

780-237



1200501602006

780

237

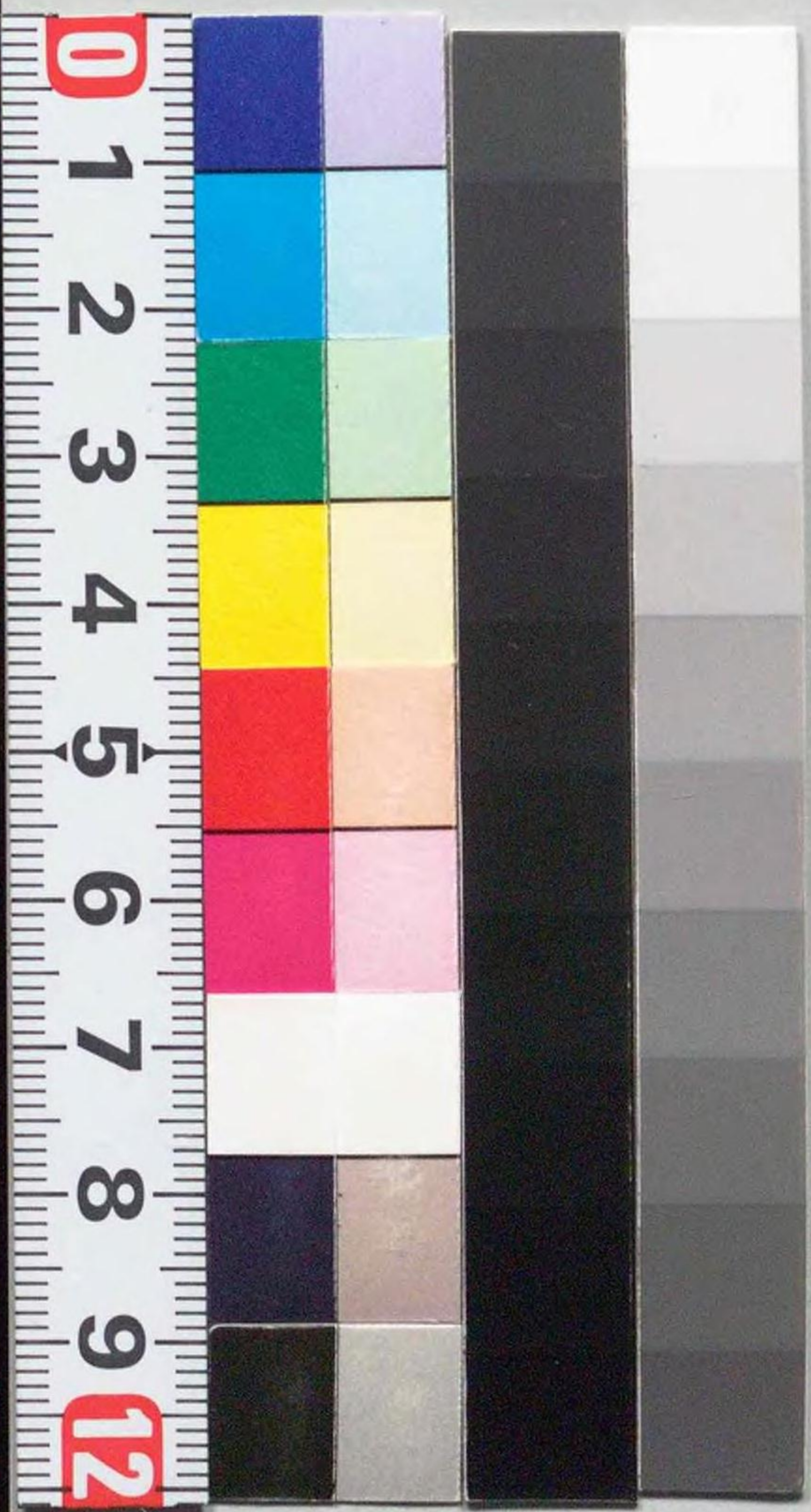
新 潮 文 庫

第 三 百 八 十 八 編

私 紀 的 行

林 芙 美 子 著

新 潮 社 出 版





私 紀 行

林 芙 美 子 著



新 潮 社 出 版



780

237³

序

人間のたましひといふものは、どんなものかしらなければ、たましひは形もなく、光も見えず、さうして裸のままである。

私は小さいときから、永住の家や土地を知らなかつたせるか、私はいつも旅愁に近いものを持つてゐたやうだ。現在もまたさうである。

物質的に、私はぜいたくな旅行を一度もしたことはないけれど、旅はかなり豊富にしてゐるし、その思ひ出は私の生涯を通じて富貴なものであつた。——そのうち折があつたら、外國航路の荷物船にでも乗つて、世界の小さい港や街をまはつてみたいと、何時も空想して愉しんでゐる。私は人に疲れ、世情に飽きてくると、旅行をおもひたつのだ。——人はこんなありのままのことを語る、人が庭から取つて來た果實のこと、人が青い苔の中に咲くのを見つけ出した花のこと、ヴェルハアレンの詩のなかにこんな言葉があつたけれど、旅へ出て旅空の虚妄のなかにありのままをつかむたのしさは、これこそ私のなつかしい天國であり、旅愁癖となつてくるのだ。

私のたましひは旅愁の渦のなかにのみ生々としてゐるやうである。

人と人とのつながりも、いまはあまり魅力を感じなくなつた。私は旅だけがたましひのいこひの場



所となりつゝあるのを感じてゐる。

昭和十四年七月

下落合にて

林 芙美子

目次

西比利亚の旅……………七

巴里まで晴天……………二六

巴里……………四七

巴里案内……………五七

皆知つてるよ……………六八

巴里を歩く……………七九

佛蘭西の田舎……………八四

下駄で歩いた巴里……………九五

ひとり旅の記……………一〇四

マルセイユより横濱までの勘定書……………一二四

一瞬の歐洲の旅……………一二八

住んでゐた街……………一三四

摩周湖紀行(北海道の旅より)……………一三七

樺太への旅……………一五

私の好きな奈良……………一八

下田港まで……………一八

大島行……………二〇〇

三津行……………二一八

秋の杭州と蘇州……………二二六

ソヴェートの冬……………二三三

哈爾濱散歩……………二三七

戸隠山……………二五五

ナポリの日曜日……………二五七

丹波丹後路……………二六一

外國の想ひ出……………二六四

旅つれづれ……………二七五

北京紀行……………二七八

西比利亞の旅

長春へ着きました。雪はまだ降つていません。——去年、手ぶらで来ました時と違つて、トランクが四ツもありましたし、驛の中は澤山の兵隊で、全く赤帽を呼ぶどころの騒ぎではないのです。ギラギラした剣附鐵砲の林立してゐる日本兵の間を潜つて、やつと薄暗い待合所の中へはいりました。此待合所には、賣店や兩替所や、お茶を呑むところがあります。

五錢のレモンを呑みながら、見當もつかない茫漠とした西比利亞の道筋の事を考へたのですけれど、——「此間滿鐵の社員が一人、哈爾濱と長春との間で列車から引きずり降ろされて今だに不明なんですがね」か、「チチハルの領事が惨殺されたさうですよ」などと、奉天通過の時の列車の中での話なのです。あつちでもこつちでも戦争の話ばかりなのですが、どうもピリツと來ません。魂に角、何處に居ても死ぬるのは同じことだと、妙に膽が据つてしまつて、何度もホームに出ては

一ツづトトランクを待合所に運んで、私は呆んやりと賣店の陳列箱の中を見てみました。去年は古ぼけた栗、島澄子や高尾光子の繪葉書なんか飾つてあつたものですけれど、いまはそんな物は何も無く

なつてゐて、いたづらに、他席他郷送客杯の感が深いのみでした。

こゝでは支那人のジャパン・ツーリスト員に大變世話になり、妙に濟まなさが先に立つて、揶つた
い氣持でした。こゝだけでも二等にされた方が良いと云ふ言葉をすなほに受けて、長春ハルビン哈爾濱間を二
等の寢臺に變へました。

「内側からかうして鍵をかつておゝきになれば大丈夫ですよ」

若い支那のビュウローの社員は、何度となく鍵を掛けて見せてくれました。こゝからは露西亞人の
ボーイで日本金のチップを喜ぶと云ふ事です。で、やれやれこれで良しと云つた氣持で鍵を締めて、
寢卷に着かへたりなんぞしてゐますと、何だか山の中へでも来た時のやうに森とした耳鳴りのやうな
ものを感じました。四圍があまり静かだからせう。此列車から、ホームはかなり遠いのです。

列車が動き出しますと、支那ボーイが床をのべに來て來れます。此ボーイは次の驛で降りてしまふ
ので床をのべに來る時、持つて來た紅茶茶碗の下皿に十錢玉を一ッ入れてやりました。

四人寢の寢臺が私一人でした。心細い氣もありましたけれど、鍵をかつて寢てしまふ事だと電氣を
消さうと頭の上を見ますと、私の寢臺番號が何と十三號です。それに哈爾濱に着くのが明日の十三日、
私は何だか嫌な氣持がして、母が持たしてくれた金光さんの洗米なんかを食べてみたりしたものです。
迷信家だなんて笑ひますが、今だにあの子供の頃のやうな氣持を私はなつかしく思ふのです。十一月
十三日の朝、八時頃何事もなくて私は哈爾濱に着きました。折悪しく私の列車は、貨物列車の間に這

入つて行つたので、北滿ホテルのポーターにも見つかりもせず、とても事に一人で行つてしまへど、
四ツのトランクを露西亞人の赤帽に頼んで、兎に角驛の前まで運んで貰ひました。冬の哈爾濱は夏よ
りも好きです。やつぱり寒國の風景は寒い時に限ると思ひました。空氣がハリハリと硝子のやうでい
い氣持でした。

「ヤポンスキー、ホテル・ホクマン」

これだけで露西亞人の運轉手に通じるのですから剛氣なものです。古風な割栗石のやうな道を、私
の自動車は飛ぶやうに走つてゐて、街を歩いてゐる支那兵の行列なんかを區切らうものなら、私はヒ
ヤヒヤして首を縮めたものです。

一ツの難關は過ぎましたが、いよいよこれから戦ひの本場を今晚は通らなければなりません。

全く何度も云ふやうですけど、私は哈爾濱が大變好きです。

北滿ホテルへ着きますと、皆が私を覚えてゐてくれました。去年のまゝの顔馴染の女中達でした。

「こつちは大丈夫でしたか？」まづこんな事から挨拶を交したのですけれど、哈爾濱は日本で考へてゐ
た以上に平和でした。「こつちは何でもございませぬよ」長崎から來た女中などは、哈爾濱は呑氣なと
ころだと笑つてゐました。窓から眺めた風景だけでも戦争はどこにあるのだらうと思はせる位こゝは

大變靜かです。

日本の茶漬も當分食べられないだらうと、朝御飯には味噌汁や香のものを頼みました。

「此間も日本の女の方が一人お通りになりました」

「その方は無事に西比利亞に行かれたやうでしたか？」

「はい、御無事で行かれたやうです。お立ちになります時、やつぱりかうして日本食を召し上りながら、死んでしまふかも知れませんか、淋しさうに云つていらつしやいましたが、……」

音楽學校の先生でシヨウジさんとか云ふ方でした。東京の列車から御一緒に巴里まで道連れにして貰はうなんぞと思つたりもしたのですけれど、何しろ二等で行かれるのでは、クラスが違ふので、私は六日遅れてしまつたのです。

「その方、運が良かったのですね。私なんか無事に越せますかしら？」そんな事を話しあつてゐますと、チチハルから、今婦女子だけが全部引上げて來たと云ふニュースがはいりました。女中達は、二三日泊つて様子を見てみたらどんなものかと云つてくれたりもしますが、様子なんぞ見てゐたら、先づ手元が困つてしまひますので、どんな事があつても、午後三時出發にきめてしまひました。

哈爾濱から西比利亞へ行く日本人は私一人でした。旅行者も居るには居ましたが、ごく少數で、ドイツの機械商人と、アメリカの記者二三人と、まあ、その位のもので、あとは支那の人ばかりです。

「日本人の方でドイツへ行かれる方がいらつしやるんですが、二三日様子を見るとおつしやつてゐますよ」

「だけど私は、どうしても様子を見てゐることが出来ないのです、私は列車に乗る事にきめてしまつて、街へ買物に出ました。寒さに向つてではありますし、又、西比利亞の食道車で、一々食事を取つてゐた日には、とても高くかゝると云ふ事でしたので、まづ毛布や食料品を買ひ込む事にしました。

哈爾濱で買つた紅色の毛布、これはもういまでは大變な思ひ出ものです（巴里の下宿で、いま蒲團がはりに使用してゐます）。初め、安いあけびの籠を買つて、それへどしどし買つた食品を詰める事にしました。何しろ初めての西比利亞行なので、——用心して細心に買物をしたつもりでも、澤山抜けたところがあるのです。

まづ葡萄酒を一本買ひましたが、吝をしてしまつて哈爾濱出來を買つたものですから、苦味ヒタくてとても飲めたものではありませんでした。外に、紅茶、林檎を十箇、梨五箇、キヤラメル、ソーセイジ三種、牛罐二箇、レモン二箇、バターにチーズに角砂糖一箱、パン五斤、ゼリーニママアマレイド、それからヤカンや、肉刺、匙、ニュームのコップなど揃へました。——また、アルコールランプやオキシフルや、醬油や、アルコール、鹽などは、溝口と云ふ商品陳列館の人に貰つて、これは大變役に立ちました。

それこそ、風呂に這入る假もなく停車場行です。大毎の小林氏が、チチハルとモスコへ、誰か迎ひに出してくれるやうに電報を打つてあげませうと云つて下すつて、一人旅には一番嬉しいことでした。こゝでは私は二等の寢臺に買ひかへて乗る事にしました。——大分番狂ひで仕方もないのですけれど、二三日哈爾濱で様子を見てゐたと思へば良いと腰を落ちつけて、何気なく、窓硝子を見ますと、頬の落ち込んでゐる自分の顔を眺めて、私は吃驚してしまひました。ところで、荷物の事なのですけれど、小さいトランクをいくつも持つより、大きいのを一ツと、手廻りの物を入れるスツッケースと、その方が利巧だと考へました。

同室者は、海拉爾^{ハイラル}で降りる露西亞人のお婆さんでした。髪の毛は眞白でしたけれど、帽子を被ると、赤いジャケットを着てゐますのでまるで三十歳の若さに見えました。晩の九時頃が命の背戸ぎはなのですが——此、露西亞婦人に大丈夫だと云はれて少しは落ちつきが出来ました。

十四日です。

私は戦争の氣配を幽かに耳にしました。——空中に炸裂する鐵砲の音でせう。初めは枕の下のピストンの音かとも思つてゐましたけれど、やがてそれが地鳴りの音のやうに變り、砧のやうにチヨウチヨウと云つた風な音になり、十三日の夜の九時頃から十四日の夜明けにかけて、停車する驛々では物

物しく支那兵がドカドカと扉をこづいて行きます。

激しく扉を叩きに來ますと、私の前に寝てゐる露西亞の女は、とても大きな聲で何か呶鳴ります。きつと、「女の部屋で怪しくはないよ」とでも云つてくれてゐるのでせう。私は指でチャンバラの眞似をして恐ろしいと云ふ眞似をして見せました。露西亞の女はそれが判るのでせうか、ダアダアと云つて笑ひ出しました。私は此女と一緒に夕飯を食堂で食べました。何か御禮をしたい氣持がいつぱいなんですけれど、思ひつきがなくて、——出發の前夜、銀座で買った紙風船を一つ贈物にしました。

彼女は朝になつても、その風船をふくらましては、「スパシイボー！」と喜んでくれました。まるで子供のやうです。手眞似で女學校の先生だと云つてゐましたが、勿論白系の方なのでせう。

ひは、色に、白に牡丹色の紙風船のんだらが、くるくる舞つてゐて、何か清々した美しさです。窓のカーテンは深くおろしたまゝです。海拉爾には朝十時頃着きました。もう再び會ふ事はないのでせう此深切なゆきずり、びとを、せめて私は眼でだけでも見送りたいものと、握手がほぐれると私はすぐカーテンの隙間からホームに歩いて行く元氣のいゝお婆さんの後姿を見てゐました。巴里へ行くまで……行つてからも、私は澤山の深切なゆきずりのひとたちを知りました。いまだに何もして報いられないのですけれど、そのまゝお互ひがお互ひを忘れて行つてこのまゝになるのでせう。

驛の露西亞風の木柵の傍には、支那兵とアメリカの記者團が何か笑ひながら握手をしてゐました。

——どうしたせるのか一茫の端に見える西比利亞の空がひどく東洋風なので、支那の人達の方の顔がどつしりとして見えました。

マンジウリに着いたのがお晝です。こゝは露支の國境です。まだ雪は降つてゐません。珍らしく日本の太陽が輝いてゐました。日本的な——笑ひますか、こんな言葉も一脈のノスタルジイでせう。こゝでは大毎の清水氏や、ビュウローの日本のひとが出てくれました。二人ともいゝ方でした。安東を出てから二度目の税關です。荷物を税關へ運んで、調べて貰ふ間にパスポートにスタンプを押して貰ひました。ガランとした税關の高い壁上には、大きい西比利亞の地圖が描いてありました。一寸ハイカラな小學校の雨天體操場と云つた感じですが、西比利亞を通過するこゝからの旅客は、ドイツの商人と私との二人きりになりました。鞆をあげて露西亞の税關に調べて貰つてゐる間に、支那の憲兵が何度も私の姓名と職業を尋ねに來ました。パスポートを調べられるのは勿論ですし、所持金までも聞かれました。勿論これは露西亞側の方です。で、私は人に教はつた通り、米弗で三百弗だと書いてみせました。寫眞機もタイプライターも持つてゐませんでした。若し持つてをれば通過する間封ぜられます。

税關では一ツ面白い事がありました。下村千秋氏が玉木屋のつくだ煮を下すつたのを持つてゐたのですが、どうしても開けて見せろと云ふので、開いて貝を一ツ摘んで食べて見せました。此様な、まるで土みtainな色をした食料品など、このひと達には不思議なのでせう。一切の仕事が片づく、さ

て、一週間を送るべきモスコウ行の硬床ワゴンに落着くのですけれど、その前に私としてはX27のやうに、初めて小さい役割をすることになつたのです。

○

モスコウへ行く日本人は私一人なのです。マンジウリの領事から、モスコウの廣田大使へ當てる外交書類を是非持つて行つてほしいと云ふ事が持ち上りました。

共産軍はもうチチハルへ出發したとか、露西亞の銃器がどしどし支那の兵隊に渡つてゐるとか、日本軍は今軍隊が手薄だとか、兵匪の中に強大な共産軍がつくられてゐるとか、風説流々なのです。

戦ひを前にしての静けさとも云ひますのか、マンジウリの驛は、此風説に反してひっそり閑としてゐました。私はあづかつた、五ツ所も赤い封蠟のついた大きな状袋をトランクに入れて鍵をかける、何だか妙に落ちつけない氣持でした。

もし調べられた場合は……その時の用意に、露文で、外交官としての扱ひをして戴きたいと云つた風な、大した添書も貰つてゐるのでしたけれど、全くヒヤリとした氣持でありました。

愛國心とでも云ふのでせうか、そんな言葉ではまだ當てはまらない、酸っぱいやうな勇ましい氣持、——何にしても早く國境を越えてくれるといふ。

いよいよ露西亞です。

青い空に眞赤な旗が新鮮でした。赤い荷車が走つてゐます。杳々とした野原が続いてゐて、まるでもう陸の海です。私は露西亞へ這入つてから二十圓だけルーブルに換へました。列車の中に國立銀行員が鞆を持つてやつて來ます。國立銀行員だなんて云つても、よぼよぼの電氣の集金人みたいな老人でした。印刷したてらしいホヤホヤのルーブル紙幣を貰つたのですけれど、まるで煙草のレットルミたいで、麥の束が描いてありました。その紙幣を九枚に小錢を少し、丁度四十錢程の換算賃をとられました。

夕方、時計は七時でしたが、明るい内にハラルへ着きました。小驛で、發車を知らせるのに、此驛では小さい鐘を鳴らしてゐました。ところで、まづ、私の寢室をこゝに描きませう。一室には四人づつで、一ツ列車に入ツの室があります。私は、一等も二等も覗いて見ましたけれど、西比利亚を行かれる方には是非三等をお薦めしたいと思つた位です。けつして住み悪くはありませんでした。初め、列車ボーイには日本金の三圓もやればよいと聞いてゐました。つまり日が五十錢の割でせうけれど、私は何を考へ事してゐたのか、こゝでは五圓やつてしまひました。大變氣前のいゝところを見せたわけです。——ルーブルでチップをやつても、ボーイは決して有難い顔をしなさいさうです。日本金でやれば、國外で安いルーブルが買へるからでせう。

私の方のボーイは、飛車角みたいにつんぐりしてゐて、むつつり怒つたやうな顔をした青年でした。帽子には油じみた斧と鎌のソヴェートの徽章がついてゐます。五圓やつたからでもありますまいが大變深切でした。私は二日間で私の名前を覚えさせる事に成功しました。帽子をぬぐと額が雪のやうに白くて髪は金色です。モスコイに母親とびつこの弟が居ると云ふ事も判りました。私に巴里へ行つて何をするのだと聞きますので、お前のやうな立派な男をモデルにして繪を描くのだと云つたら、紙と鉛筆を持つて來たりしましたので私はひどく赤面しました。

旅は道づれ世は情けと云ふ言葉を、今更うまい事を云つたものと私は感心してゐます。私の隣室はドイツ商人で、ボーイはゲルマンスキの奴はブルジョワだと云つて指を一本出して笑つてゐました。何でブルジョワだと聞くと、タイプライターも蓄音機も寫眞機も持つてゐるからだと云つてゐました。此隣りのドイツ人は仲々愛想のいゝ人でしたが、その同室にゐる露西亞人は旅行中一番親切なひとでした。

私の部屋はまるで貸しきりみたいに私一人です。だから私は、朝起きると兩隣りからお茶に呼ばれますし、トランプに呼ばれるし、何しろ出鱈目な露西亞語で笑はせるのですから、可愛がつてくれたのでせう。左隣りはピエルミで降りる青年と、眼の光つた四十位の男と乗つてゐました。私は此ピエルミで降りると云ふ青年がとても好きで、よく廊下の窓に立つては話をするのですが、何しろ雲つくやうな大男なのです。話が遠くてよくかゝんでもらつたのですけれどボロージンとはこんな男ではな

いかと思ふ程、隆々とした姿で、腫だけが優しく青く澄んでみました。

○

十六日の夕方、ノボオーシビルスクと云ふところへ着きました。そろそろ持参の食料品に嫌気がさして来て、不味い葡萄酒ばかりゴブゴブ呑んでみました。起きても寝ても夢ばかりなのです。私は一生の内に、あんなに夢を澤山見ることは再びないでせう。まるで呆んやりとして夢の續きばかりのやうでした。ノボオーシビルスクでは十五歳位の男の子が一人乗つて來ました。勿論隣室のピエルミ君の上の寢臺に寝るのでせうが、來るとすぐ私の部屋にはいつて來て、ヤポンスキーと呼びかけて來るのです。

この子供に長い事かゝつて聞いた事は、母親がモスコイで書記の様な事をしてゐて、それに一年振りで會ひに行くのだと云ふ事でした。子供の母親の名前は、カピタリナカーパと云ふ人ださうです。僕はピオニエールだよ、さう云つて元氣に出て行きましたが、兎に角西比利亞の三等列車は吞氣で面白とおもひます。

十七日、晝食の註文を朝のうちに取りに來ましたので、食べる事にして申し込んでみました。申し込むと云つたところで、扉をニューと開けて食堂ボーイが、「アベード？」と覗きに來ますので、それに承知とか、不承知とか答へてやればいいのです。

大變晝が楽しみでした。ピエルミ君も初めて註文したのらしく、指をポキポキ鳴らして嬉しさうでした。窓に額をくつゝけて吹雪に折れさうな白樺のひよろひよろとした林を見てゐると、ピエルミ氏は私のそばへ來てタンゴの一節を唄つてくれました。露西亞人はどうしてこんなに唄が好きなのでしょう。いつそ此人の奥さんにでもなつて、ピエルミで降りてしまはうかなんぞやけくそな事を考へたものですが、何しろ言葉が分らないし、私とは二尺位も背丈が違ひ過ぎるやうな氣がしますし、ともあれ諦める事にきめましたけれど、ピエルミまではまだ大丈夫遠いので愉しみます。自分で何か考へて行くか、空想してゆくか、本當はそんな事でも考へなければ全く退屈な旅なのです。これで一二等に乗つてゐる人達はいつたいどんな事をして暮らしてゐるのでせう。

晝は、ピエルミ氏が先頭で、ドイツ人と相容のミンスク氏も一緒です。此ミンスク氏の名はミンスクと云ふ處で下車するといふので、私はいつもミンスクと呼んで笑はせてみました（ミンスクは波蘭土の國境に近い土地）。まづ、運ばれた皿の上を見ますと、初めがスープ、それからオムレツ（肉なし）、ウドン粉料理（するとの一種）、プリン、こんなもので、まづ東京の本郷バーで食べれば、これだけで二十錢位のものでせう。——悪口を云ふのではありませんけれど、それがこゝでは三ルーブルもするのです（約三圓）。驚木桃の木山椒の木とは此事でせう。思はず胸に何かこみあげて來るやうな氣がしました。食べてゐる人達とは云へば、士官と口紅の濃い貴婦人が多いのです。貴婦人と云つても、ジャケツの糸がほぐれてゐるやうなのがおほかたなのです。けつして勞働者ではない級の女達

です。インテリ級の貴婦人とでも云ふのでせう。こつちの百姓の女は、繪描きが着るやうなブルーズを着こんでゐます。日本ではよいとまけの土工女がせいぜい荒つばい仕事位に思つてをりましたが、こちらでは女達だけで線路をつくつたりしてゐました。

車窓から見た七日間の露西亞の女はとてもハツラツと元氣で、悪く云へば豚のやうに凸凹になつてゐる女が多い。チエホフ型の女とか、プウシキン型の女とか、そんな女には一人もめぐりあひません。一二等の廊下で、呆んやり同志の働きをみながら、爪の化粧をしてゐる露西亞婦人も居るのですから、露西亞はなかなか廣いところですよ。

林檎が一箇一ルーブル、玉子が一ツ五十カベツク、——まだ驚きましたのは、バイカルを過ぎた頃賣りに來たいなり、壽司のやうな食料品です。思はず雑誌をはふりつばなしにして私は「アジン！」と怒鳴りました。

二箇一ルーブルで買つて、肉の刻んだのもはいつてゐるのだらうと、熱い奴にかじりつくと、これはまたウドン粉の天麩羅でありました。

ウドン粉の揚げたのが一圓だなんて、私は生れて此様なぜいたくな買物をした記憶などは初めてです。鶏の小さい丸焼きが五ルーブル位です。とても手が出ません。牛乳が飲みたかつたし、茹で玉子が欲しかつたし、——だけど、高くて手にはいりませんでした。

西比利亞の寒さは何か情熱的ではありません。列車が停るたびに、片栗粉のやうにギシギシした雪を踏んで、そのへんをぶらぶら歩いてみるのですけれど、皆、毛皮裏の外套を着込んでゐて、足にはラシヤ地で製つた長靴をはいてゐます。

鐵の棒にでも指を一寸手をふれれば痛い感じがします。長く握つてゐると手が凍りつくとボーイが教へてくれました。

此旅で一等樂しみてプロレタリア的なのは熱い湯が驛々で貰へた事です。大きい驛に着く度に、「チヤイ？」さう云つて、ボーイが私のヤカンをさげて湯を貰つて來てくれます。砂糖は私が寄付して、いつもボーイの部屋で四五人で大きな事を云ひながら茶を飲むのです。勿論紅茶も時々持つて行きませんでした。煙草はみんな新聞紙に巻いて呑んでゐるやうでした。

鯁くさい漁師が一人ゐて、ヤポンスキーの函館はよく知つてゐると云つて、日本を説明するのでせう、盛んにゲイシヤ、チブチブチブ……と云ふのです。そのチブチブが解らなかつたのですけれど、チブチブと云ふのはゲイシヤの下駄の音の形容なのでした。私が、カラカラだらうと云つてみせると、さうだと云つて、又、皆に説明をするのです。何の事はない信州路へ行く汽車の三等と少しも變りがありません。

十八日の夜、オムスクと云ふ所から、赤ん坊を連れだ女が私の部屋に乗りました。うらなりみたいな若いお母さんでしたが、此子供はまるで人形です。人見知りをしないですぐ私のベッドへ来て、キヤッキヤツと喜んでゐました。ワリーヤと云ふ子です。此ワリーヤは可愛かつたのですが、ワリーヤの母親は、一々物を呉れ呉れと云つて嫌ひでした。私は、三ヶ月と云ふ日本の安い眉墨を持つてゐたのでしたけれど、「お前は巴里へ行けば買へるんだから、それを呉れ」と云ふのです。外の物なら巴里にもあるでせうけれど、「娘の頃から使ひつけてゐるものなので、何としてもやる譯にゆかず、「あんなの髪の毛はあかいぢやないか、眉だけ真黒いのをつけてはをかしいのよ、ホラ私の髪の毛と眉は黒いから、これをつけるの」さう何度云ひ聞かしても、如何にも舌打ちして欲し氣なのです。

日本では舌を鳴らすと、嫌な意味なのですが、露西亞ではホーウとか何とかいゝ場合の意味らしく何時までも舌をならしてゐるのです。——ワリーヤはよたよた歩いて来て、私の頬へ唇をさしよせて來たりして、仲々可愛い子供です。

時々、隣室のドイツ人がレコードをかけてゐます。寒い野を走る汽車の上で、音楽を聴いたせゐるか、私は涙があふれて仕様がありませんでした。

露西亞人と云ふ人種はいつたいに音楽が好きなのでせう。トロイカと云ふ映畫を御覽になりました

か。タンゴなどはソヴエートでは禁止されてゐると云ひすけれど、走つてゐる汽車の中では平氣でした。窓外には、あの映畫に出て來るやうな馬車が走つてゐます。此ドイツ人のレコードが鳴り出しますと、まるで蜂の巢のやうにどこの扉もあいて、みんなドイツ人の部屋の前に集つて來ます。さうして皆の顔が生々して來ます。實際音楽が好きなのでせう。

ところで前の食堂の話なのですが、半年ばかり前までは強制的に食事費を取られてゐたと云ふ話でしたが、私の時は食べても食へなくても良かつたので大變これは樂でした。

隣室のピエルミ氏は、毎日詩集のやうなものを讀んでゐました。ゴルキーや、チェホフや、トルストイヤ、ゴーゴリなんぞ讀んだ事があると云つたら、ピエルミ氏は、お前に露西亞語が話せればもつと面白い話が出るのにと云つた表情でくやしがつてくれました。ところで、或時ピエルミ氏に、「あの食堂はブルジョワレストランぢやないか」と聞いた事があります。さうして私の部屋にいつもパンを貰ひに來る、まるで乞食みたいにする、ピオニールの事も訊いてみました。

「なぜ、食堂で飯をあたへないのでせう？」

ピエルミ氏は、子供つぽく笑つてわからないと云ひました。實さい、一二度の事ならば何でもないのですけれど、私が食べる頃を見計らつては、「ヤポンスキーマドマゼール、ブリーキ」なんぞと云つて、腹をおさへて悲し氣にしてみせるのです。私は、岩のやうになつたパンと林檎を持つて行かせ

て怒つた顔をしてみせました。私の食料品も、おほかたは人にやつてばかりで、レモン一箇と、砂糖と、茶と、するめが少し残つたきりです。十九日は、また晝食を註文して今度はミンスク氏と卓子に並びました。スープ（大根のやうなものに人參少し）、それにうどん粉の酸っぱいのや（すゝるとんに耐をかけたやうなもの）、蕎麥の實に鶏の骨少し、そんなものでした。晝食に出るまでは楽しく空想をして、それで食べてしまふと落膽してしまふのです。十九日の夜は、借りた枕やシートと毛布代を、六ルーブル拂ひました。毛布と云つても、一枚の布と云つた方がいゝ程な古ぼけた柿色の毛布です。手荷物を嫌がらない人だつたら、ハルビンあたりで二枚も毛布を買つた方が長く使へるでせう。枕や毛布を借りるのは旅行者だけで、私の隣人達は、枕から毛布、ヤカンまで持つて乗り込んで來ます。背負つた荷物の中からかうした世帯道具が出るのは、三等車でなければ見られない圖なのでせう。夜は、ボーイの部屋でスープを御馳走になりました。スープと云つても鹽汁です。大變うまかつた。ピオニールも呼んでスープをわけてやりました。——ボーイは、私が泣いてゐるので、どうしたのか、「トウキョウ、ママババ」戀しいかと云ふのでせう。私はスープを貰つてすゝつてゐたら、何でもないのでふいに涙が出て困りました。乗客達は、私が小さいので十七八の少女だとも思つてゐるらしいのです。——露西亞人は佛蘭西人よりも骨格が太くてのつぽです。私は此ボーイにニュームのコップと、レモンと、残つた砂糖とヤカンと茶を、モスコへ着いたら遣る約束をしました。家には湯わかしがもうポロポロだと云ふのです。

露西亞は、どうして機械工業にばかり手をかけてゐて、内輪の物資を豊かにしないのでせうか、悪く云へば、三等列車のプロレタリアは皆ガツガツ飢ゑてゐるやうに私にはみえました。

(昭和六年一月)

巴里まで晴天

十八日夜、オムスクへ着きました。

西比利亞を走つて五日になります。吹雪も晴れて光のない小さい太陽を見るやうになりました。夜は夜で星さへはつきりとして來ましたけれど、外は吸ひつくやうな寒さです。オムスクで初めて私の部屋に若い露西亞婦人が同室しました。まるで引越しのやうに、大きな板製のトランクを三つも持つて——小學校の先生だらうか、又は學生だらうか、そんな餘計な詮索をしながら、私はその女の様子を見てゐました。女は口の中で歌をうたひながら、一つのトランクの中から、汚れてドロドロした羽根枕と、小さい粗末な毛布を出して寢支度を始め、寢床が出来上ると、小さい手鞆からコンパクトを出して鼻の頭を叩きながら私を見て微笑するのです。肌が白くて、髪が光つた栗色で、厭味がなくむくむくと肥えて、女でも惚々とする位でした。美人ではありませんけれど、どこか愛らしい女です。——私たちは微笑を交はすと、旅人らしい一通りの會話をして、熱い茶を淹れて飲んだりしました。茶が済むと彼女は、大きい方の板のトランクの中から、バタでいためた鶏を一羽出して、脚の肉を切りながら、果物を包んでゐる私の縮緬の風呂敷を指差して、交換して欲しいと云つた風なそぶりをして見せるのです。

私は、如何にも美味しさうな鶏の脚を見ると、五日間も持てあましてゐた苦味い哈爾賓出來の葡萄酒の事を思ひ出して、あの鶏の肉で飲んだら、索寞とした無聊さも慰められるだらうと、そんな妙にさもしい氣持を感じて來て、たうとう草色の風呂敷と、鶏の脚とを交換してしまひました。交換すると、二人は子供っぽくクスクスと笑ひ合つたものです。

草色の縮緬の風呂敷を得た彼女は、さつそくそれを三角に折つて、房々とした自分の髪を包みました。さうして、暗い硝子窓に自分の姿を寫しながら、浮々と腰を曲げて踊り出したりするのです。「オーチンハラシヨ！」

二人はお互ひに輕口を利きあひながら、妙に打ちとけてしまつて、片言で旅の話をしあひました。オムスクを出て暫時すると何と云ふ驛だつたらう、赤い荷車に材木が澤山積んである小さい町に汽車が停りました。夜更なので町は静かでしたけれど、頭を布で巻いてブルーズのやうな仕事着を着た二人の女達が、湯を入れたばけつをさげて私の部屋の床の上を拭きに來ました。リノリウムの床の上に、絞らない雑巾で拭いて行くのですが、若い女達の手の甲が紫色に腫れ上つてゐました。拭き終るとまた次の部屋へばけつをさげて行くのです。

私は何か強く感じさせられた氣持でした。——女達が去つて行つた扉を締めようとしみますと、何時

の間にか狭い廊下に鯁臭い女や男が立つたまま、眠つてゐました。或はまた、荷物に凭れたりして暗い灯の下で話しあつてゐる貧しい老人達もゐました。

「部屋がいつばい空いてゐるのに、どうして寒い廊下にあの人達は寝てゐるのだらう」
 そんな風な事を同室の女に聞いて見たりしましたが、女は只笑つて通じたのか通じないのか答へてもくれませんでした。

其驛を過ぎると、實直なボーイが二人の商人體な男を連れて私達の部屋へはいつて來ました。

「此人達は寢床を買つたのですが、その寢床の番號には子供連れ夫婦が寢込んでゐるので、今夜一晩だけ、上の床を貸して下さい。」

いつたい西比利亞の三等列車は、女は女ばかりで、めつたに男を同室させる事はないのです。私はこの汽車旅では、今日初めての事でありすし、ほんとうに不快でした。

それに、この二人は露西亞人に似合はずあい、そがよくて、私はどうも此惡人型の二人の男を好きま
 せんでした。何が面白いのか、夜更けだと云ふのにキャツキャツと二人で笑ひあつて、床を吊つて寢
 支度が終つてからも下品な笑ひ聲を止めないのです。寢床が出來上ると、各自上の寢台に飛び上つて
 寢床へ腰をかけると、パンドの玉子だの煙草だの擲げて、仲々寢入る形勢もありません。——それに
 何としても私の疝にさはつたのは、ブラブラとしてゐる足裏が、丁度私の胸のところにはさがつて來て
 りて、靴の裏には酢漬けの胡瓜の皮がくつついてゐるのさへ見えました。

○

同室の若い女も、此男達に二言三言何か言葉をかけられてゐましたけれど、やがて若い方の背の低い男がヒョイと飛び降りて來ると、寢てゐる女の口に玉子を押し込んで惡戯をしたりしました。三人ともまた聲をあげていつとき笑ひあひながら、電氣を消したり點けたりして興じあつてゐるのです。その日の、何か書きつけた私の日記の中には、若いロスキー男女終夜戯れて眠れずと書いてありましたが、夜明近くになつて電氣を消してしまつてからも、二人は何時までも小聲で何か話しあつてゐました。上の床の年をとつた男の方は笑ひ疲れたのでせう、何時の間にか長靴の足を片方だらりとぶら下げたまゝ、雷のやうな鼾聲をあげて寢込んでしまつてゐました。

二人の間には「ヤボンスキー」なんぞと云ふ小會話も時々混つてひどく私を氣にしてゐるやうでもありましたが、
 やがて香水の甘い匂ひが部屋中に満ちて、殺風景な西比利亞の野をひどくロマンチックにしてしまひました。ロシヤについては、武骨な知識しかない私に、これはまた惱ましくそしてをかしな風景でありました。

朝。雪で光つた晴天です。私一人が早い眼覺めでアルコールランプにヤカンをかけて湯を沸かして、顔を蒸したり、茶を淹れたりして朝のみじまひを濟ませます。向うの女は鼻が悪いのでせう。ゴロゴ

口喉を鳴らして、白い額の上には脂肪を浮かしてよく眠つてゐました。上の男達はこれも兩方負けな
いで鼾聲をあげてくたの體です。昨夜のロマンチックな芝居が、今朝は樂屋裏を覗いた感じで、
残つた香水の匂ひもいまは不潔な氣持です。——十九日。いよいよあと一夜でモスコフ着です。窓外
の風景はだんだん雪が薄くなつてゐます。エトランゼには全く不自由な西比利亞の汽車旅行ではあり
ましたけれど、雪の持つさまざまな變化を、此様に澤山見た事はかつてありません。白樺の薪を積ん
だトロイカが走つてゐます。雪がしぶきのやうに散つてゐます。硝子を重ねたやうに雪道が光つてゐ
ます。汽車の音響で、樹の上の雪のかたまりが人魂のやうにポタリと落ちる。全く、窓外の雪の姿は
一生忘れられない思ひ出になるでせう。

日本へ歸つて八錢のかけう、どんも悪くはありませんが、走れ！ 走れ！ 汽車よ、泪せきあへずで
す。まだまだこゝは西比利亞の眞中！ 私はそんな一人ごと云つてみたり、二重窓の外を私はあか
ず呆んやり眺めて暮しました。

晝近くになつて、外の部屋が空いたからと、ボーイが二人の男に知らせに來ました。——二人とも
荷物を持つて越して行きました。女も男達の部屋へ遊びに行つたまま歸つて來ません。夜は、隣室の
ドイツ人がレコードをかけました。皆その部屋に集つて行きます。私も音楽を聞かうと扉を開けます
と、「よくない奴が乗つてゐるから部屋をあげない方がいゝです」ボーイが手眞似で私に注意してく

れました。——そのよくない男らしいのが、焦々して廊下を行つたり來たりしてゐます。モスコフで
降りるピオニールは砂糖をくれと云つてまたやつて來たりします。

洗面所へ行く序にボーイの部屋を覗くと、私から砂糖を貰つたピオニールが、ボーイから茶を貰つ
て高い椅子に腰をかけて飲んでゐました。

○

三等列車の洗面所と來たら、二等のとは雲泥の違ひで、水も出なければ、鏡も破れたまゝです。プ
ロレタリヤ國だから仕様もないでせう。——短い期間にロシアを知らうとする事はあまり圖々しすぎ
るかもしれませんけれども、三等列車内の色々の人情のうつり變りは、露西亞の一隅を知るには充分
です。チェホフの小説に出て來る、平凡な各階級の人物は、さう今も昔もあまり變りはないだらうと
思ひます。——二十日は晴天。夕方ヴォオルガの鐵橋を二ツも越しました。汽車の窓から見ると、一寸
安東にも似てゐますし、川崎あたりにも似てゐます。霧がいつぱいこめてゐました。工場の煙突から
白い煙がムクムク上つてゐて、鐵橋の下には筏や小船が背を寄せ集めて、河幅は海のやうに廣いので
す。こゝでも女工夫が鐵道を造つてゐました。こゝへ來ると、私は何時の間に雪が消えてゐたのかし
らと思つた位あたゝかで、そして小麥色のブクブクしてゐる土を見ました。

ヴォオルガを過ぎた小さい驛で、私達の部屋へ泊つたあの二人の商人體の男達は降りて行きました。

同室の女もあの男達が行つてしまつては淋しいことだらうと、そんな風に、私は東洋風なカイシヤクを下して、可愛い女を見てゐましたけれど、女は窓から一度だつて覗かうともしないで、何もなかつた時のやうに軍艦の繪のある本を讀みふけてゐます。下車した二人の男は汚れた袋を背負つて、長靴を引きずりながら、驛の前の工場から曲つてしまひました。軍艦の本はかなり厚い頁でしたが、女は十四五頁もそれを讀むと、それを自分の腹の上にはふり投げて、又コンパクトで鼻の頭を叩き、茹で玉子を出して呆然としてゐる私に一ツくれたりするのです。——二十日の午後四時にモスコイ着の豫定の汽車が、モスコイへ着いたのは夜の九時頃でありました。屋根の無いホームに列車が這入りますと、乗客はほとんどモスコイで下車してしまふのです。同室の彼女も、板製のトランクを赤帽に持たして元氣よく手を振つてピオニール達と降りて行きました。乗客が去つてしまふと、妙に森として只遠くの方から女性のコーラスが聞えて来るきりでした。——此汽車がペロラスキーの停車場へ廻つて、モスコイを發車するまでには、三時間ばかりも時間があります。その間に、滿洲里で託された書類を廣田大使のところまで持つて行かなければならないのですけれど、夜更けではありますし、初めての土地ではあるし、改札口へ出るのにどんな手續きがあるのか、そんな事を考へながら、私は焦々してホームに降りてゐますと、大毎の馬場氏がボクボク歩いて來られました。

「やれやれ、助かりましたよ」

「何です？」

私は馬場氏に連れられてホームを出ました。驛の前には、三角巾で頭を巻いた若い女の行列が、大きな聲で勇ましい歌を唄つてゐました。あゝこゝがモスコイだ。働く人の街だ。一週間ほど滞在してみませんか、馬場氏が親切にかう云つて下すつたのですけれども、よゆうが無いのであきらめてしまひました。日の丸の旗のついた自動車に乗せて貰つて、街を見せて貰ひました。數寄屋橋の停留所のやうなプウシキン廣場、廣場の商店の飾窓には、毛皮や、鞆や、シャツなどが陳列してありました。が、たいていは赤い布だけさげてあつて、何も商品のない店が多いのです。雪が降つてゐないせゐかとても人出が多くて、群衆は皆熊のやうに着物を着込んでゐました。

言葉の通じないせゐもありませうが、全く不思議なインシヨウになつてしまひました。何故なら私の眼にはいつた露西亞は、日本で知つてゐた露西亞と大違ひだからです。日本の無産者のあこがれてゐる露西亞はこんなものだつたのでせうか！日本の農民労働者は露西亞の行つた何にあこがれてゐたのでせう？——それなのに、露西亞の土地は、プロレタリアは相變らずプロレタリアです。すべていづれの國も、特權者はやはり特權者なのではないでせうか。あの三ルーブルの食堂には、兵隊とインテリゲンチヤ風な者が多くて、廊下に立つて眠つてゐた者達の中には、兵隊もインテリもゐません。ほとんど労働者の風體の者ばかりでした。古い日本の新聞を讀みますと（十一月八日）、東京ソヴェート大使館では、お茶の會、ソヴェート友の會があつたと云ふ事ですね。貧しい人達と一緒に汽車旅をしてゐる私には、一寸此記事はカンガイ無量でした。日本人のソヴェート愛好者を集めて、あの白い

すつきりした麻布のソヴェート大使館では、茶菓が出て、さうして活動寫眞が見せられ、列席者、何氏何々女史等々、——私は妙に胸寒さを感じます。棒のやうにつゞばつて眠つてゐる寢床の買へない露西亞人達の顔を私は眩しく見たのですけれど……。なぜ、ソヴェート大使館では、職場に働いてゐる日本の農民労働者を呼んでほくれないのでせう。何々氏何々女史も結構なことですけど、此人達は、プロレタリア愛好者であつて、有閑紳士淑女に外ならない名前ではありませんか。——モスコの母親へ會ひに行くピオニールは何度も手を出して私にパンを呉れと云ひます。食堂は金を持つてゐる者の爲めにのみくつゝいて走つてゐるかたちです。

だけど、けつして、私は露西亞を悪く云ふのではありません。私はロンドンまで行つてみて、一番好きな人種は、やはり露西亞人でした。

○

言葉が通じたならば、私の露西亞インシヨウはもつと良かつたのかも知れません。まるで、活動屋がセンデンにやる試寫會のやうな、そんなソヴェート友の會の記事にも反感は持たなかつただらうとおもひます。私は馬場氏の心盡しで、モスコ一流の料理屋で、高價な黒いイークラも御馳走になりました。——だけど、私達と一緒に國境にまで行く、汽車に残つた貧しい人達の事を思ひますと、私は眼をつぶりたくなる程、もつたない氣持も感じました。ペロラスキー停車場を發車したのが十二時近く、朝鮮人の青年が一人洗面所の中に隠れるやうに立つてゐました。——私は廣田大使への書類を馬場氏に託したので安心してしまつた氣持と、それに、ルーブルのない私に馬場氏は小錢も下すつたしこれでやつと吻つとしましたし、仲々優秀なモスコ通過であつたわけです。

朝鮮人の青年はなつかしさうに、日本語で、私に話して來ました。仲々數奇なコースをたどりつゝあるらしい人でもありません。私の部屋には、圓くて長い筒のやうなバスケットをさげた婆さんと、上の床に中年の男が二人、こゝでは毛布も何も貸して貰へないし、スチームが通つてゐないので、まるで破れるやうに體が冷えこんで來ます。私の床の上の男は、オーヴァを脱いで、私の裾にかけてくれたりしました。カジ屋さんでもあるのか、フィゴのやうなものを澤山持つてゐました。オーヴァを着せて貰つて、私は妙に泪つぽくなりながら板の寢床の上に横になりました。時々思ひ出したやうに、お婆さんの持つてゐる大きなボンボン時計が鳴るのです。婆さんはあゝと云ひながら、寒くてやりきれないやうに起きあがつては足を叩いてゐます。全く若い者だつて、此寒さには眠られないのですもの、私は毛布を一枚持つてゐるのだからと、裾のオーヴァをそつと婆さんに投げてやりました。婆さんは喜んでそれをかけて横になりました。

翌朝、私は齒の碎けさうな冷たい林檎を驛で買つて來て食事を濟ませました。上の床の男は、黒パンと澁い赤木の實を少し分けてくれました。婆さんは、ボロボロのビスケットにバターを塗つてくれました。私はみんな頬ばつて食べたのです。美味しいと云ふより嬉しくて悲しかつたから。



「フウシャ」と、部屋の人は私を呼びました。大變可愛がつてくれます。——沿線は雪の跡もありません。灰のやうにポクポクした黄土の平野が多く、柳に似たエリと云ふ木や松に似たペリオザと云ふ美しい木が並んでゐます。ミンスクでは、同室者の人達が皆降りてしまひました。驛は労働者でいっぱい、女も男もないと云つた活氣のある町です。何かモスコと違つた強さを感じました。こゝは人氣の荒いところだと云ふ事でした。こゝからは、アメリカ人のひどく下品な男が二人、私の部屋にはいつて來ました。トーマスククの薄つぺらな手型を盛に振りまはして私に見せるのです。

ミンスクは良いところですかと聞くと、眉を蹙めて、ゲエツと吐く眞似をして見せました。そして、テーブルの上に厚く積んだ砂埃に指で字を書いて、こんなに不潔なんだからと云つてゐるらしいそぶりをします。此地方はポクポクした灰のやうな土質なので、腰を掛けてゐますとそこだけを残して、あとはすぐ砂でザラザラになつてしまひます。日本はどうだと云ふので、私は沈黙つて笑つてゐました。此アメリカ人は、雜貨のやうな物を賣りに來たらしいのですけれど、賣れましたかと聞くと、思はしくないらしい顔をして見せました。やたらに、「おゝアメリカ！」を振りまはして、女が美しいとか、道が美しいとか、世界一ばかりを並べたてゝゐます。隣室の朝鮮の青年は、同室のドイツ人と馴々しくしてゐます。ネゴロエ(露西亞の國境)に晝の一時頃着きました。珍らしく冷たい風が吹いて、トランクを下げた税關まで行くのに手が痺れるやうでした。ロンドンまで長旅をして來たうちで、此ネゴロエの税關が一番ゲンヂユウでした。第一金の使ひ途から、残りの計算まで、仲々時間を取

ります。こゝでは露貨はすべて返上してしまつて、私はポーランドの金を六七十錢貰ひました。赤帽が三ルーブルで、仲々高價いのです。税關のところへ行きましたのは、私にアメリカ人二人、朝鮮の青年、ドイツ人、露西亞人夫婦、屋根が高いので、旅行者が皆小さく見えます。特に露西亞人の若夫婦は役者でもあるのでせうか、今まで見た露西亞人のうちで、一番美しく、似合はしい夫婦者でした。此人達はワルソーまで行くと云ふ事でしたが、税關吏は此二人の持ち物を、私達三人分以上もかゝつて調べてゐました。トランクの中から、色あせた絹のシュミーズや、袖の片方とれた肌着が亂暴に取り出されてゐるのです。女の方は恥しさうに肩をすぼめて、白いハンカチを口に當てゝゐました。おほかた、白系なのかも知れません。

○

ストロプツエ(波蘭土國境)へ着いたのが夕方五時頃です。——こゝの風景はまるで童話の世界。何もかもこぢんまりと美しく、國境一重で露西亞と波蘭土とはこんなにも違ふものかと思はせる程、風景も違ひ人種も違ひます。それに乗りかへた汽車は大變美しく清潔になり、何もかもピカピカ綺麗に光つてゐました。こゝでは、長い間三等列車の道連れであつたドイツ人は、一足飛びに一等の寢臺車に轉つて行きました。朝鮮の青年は、三等の二人寢の寢臺にはいつて行き、三等の板の腰掛けに残つたのは私一人きりです。——夜が近いせゐるか、皆寢臺券を買つてゐるらしく、私の居る普通席

には誰ももうゐません。時々食堂ボーイが茶や果物を呼賣りして来るのですけれど、金を兩替しておかなかつた私は、辛うじて生唾を呑んで我慢をするより仕方ありませんでした。波蘭士はおそろしくパスポートの検査が繁しい處です。寝たかと思ふとすぐ起しに来てパスポートを調べます。走りながら怪し氣な男がピラをくれたりします。私服らしいのが、行つたり來たりしてゐます。——夜更けになつて、何人種なのか、海坊主のやうに大きな爺さんが私の隣りに來て、明るい電燈の灯を消し、紫色の灯をつけたりします。さうして何か解らない事をしやべつて、私の肩へ手を巻いて來るのです。何も云へないから、驚いた私は、只大きな聲でノンノンノンの連發。これは汽車稼ぎのゴマノハイかも知れないと思つたりしました。やたらに私の胸の中に手を持つて來るのです。丁度切符切りの男がはいつて來ました。さうして大きな音をたて、電氣のスイッチを捻つてくれました。海坊主は眠つたふりをしてゐます。切符切りが去ると、すぐ若いポーランド巡査が這入つて來て、私の前の椅子に毛布を擲つて横になつてくれました。海坊主はどこかへ行つてしまひました。若い美しいポーランド巡査は、艶々した頭髪をかきあげ、海坊主が去るとにやりと笑つて、大丈夫だから横になつて眠れと云ひながら、自分の首に腕を曲げて見せるのです。眼を伏せて横になつてゐますと、何でもないのに私は涙が出て仕方がありませんでした。夜更けの十一時頃ワルソに着。灯の明るい街です、驛は人の鈴なり、工場が多いし、レールが多い。そして廣い停車場で汽車が多いのです。素晴らしく女が美しい。私はこゝでロンドンまで見た事もないやうな内氣な美しい娘さんと一緒にになりました。薄い緑色のオ

ーザに、同じ色の古い毛皮がついてゐて、茶の濃い靴下がとても足の美しさをましてゐました。お茶も菓子もこの娘さんと一緒に買ひました。私はアメリカ弗を少し持つてゐましたので、それで何でも用がたりました。早く使ふのであつたのと思つたわけです。二十二日朝、十時頃、伯林シュレジット停車場へ着きました。ケンコウで活氣のある街です。それに、久し振りに日本風にキラキラした朝の暖かな陽を見たせるかも知れません。煉瓦工場や、ビール工場などを車窓から幾ツも見ました。伯林の驛のなかは、初めて日本風に屋根もあれば、ホームに賣店などもありました。肥えた男達が目につきます。フリードリッヒの停車場では、珍らしく日本の青年に會ひました。誰か迎へに來られた様子でしたけれど、日本人は私一人でしたと云ふと、戦争はどうなつてゐますかと心配氣に訊かれるのでした。此人には、弗をマークに兩替して貰つたり、電報を打つて貰つたり、人情と云ふものは嬉しいものだと感じながら、私はあわてゝ名前を聞く事さへも失念してしまつて、そのまゝ汽車が走つてしまひました。ケルン着午後八時半、——こゝからは、十人ばかりの佛蘭西兵が乗り合はして來ました。空色の小意氣な軍服に、財布のやうな小さい帽子、唄をうたつたり、果物を投げたり、とてもにぎやかさを通り越して大噪ぎです。同室のポーランドの娘さんがあんまり美しいので、佛蘭西兵は呆つとしてしまつたかたちでもありました。それに、長い袂を着てゐる東洋の女が珍らしいのでせう、一人の兵隊は私のもみ裏の袖をひつくり返して見たりし出しました。シノア(支那人)だらうか、ジャポネ(日本人)だらうかと云ふ小論議が仲間が始まつたらしいのですけれど、私は沈黙つて眠つた

ふりをしてゐました。論議が終つて静かになつたので、眼をあけてみますと、私の膝にも、ポーランドの娘さんの膝の上にも、菓子や果物がいつぱいのせてありました。兵隊は夜中に、佛蘭西の小さい驛に降りて行きました。大きな聲で唄をうたひながら。此ヨーロッパの三等列車はまるで日本の乗合船のやうに、目白押しに並んで腰をかけてゐるのです。夜明け近く、佛蘭西の百姓風な家族と、四五人のルンペン諸君が、私の箱に乗つて來ました。此人達はすぐ仲良く話をしあつて、鐵砲のやうな長いパンをムシヤムシヤ食べながら、不景氣だのアと云ふ風な話を始めてゐるらしいのです。此中には、古風な風琴を肩にした藝人もをれば、赤い労働者、足の片方ない男、老人、可愛らしい子供達、そんな貧しい人達ばかり。——さすがに足の無い人達を見ると、何だかヴェルダンの大戦を思ひ出させます。汽車の中まで、ドイツ人とフランス人は仲が悪く、「かう不景氣がたゞつてゐるのに、わざわざ隣りから働きに來られちやたまらない！」向うの箱にゐる、ドイツの労働者らしいのに、そんなアクタイをついてゐる者もありました。だけど此汽車の三等は、まるで一ツ家族みたいなのはどうした事せう。長閑で、輕口屋が多くて、いつまでも朗らかな笑ひ聲が続いてゐます。——無産者の姿といふものは、どんなに人種が變つてゐても、着たきり雀で、朝鮮から巴里まで、皆同じ風體だと思ひました。二十三日午前八時、やつとなつかしの巴里の北の停車場に私は足を降ろしました。ポーランドの娘さんにもそのまゝアデューです。

長い間シベリヤを通つて來ましたせゐるか、こゝは何も彼も美しく、巴里の街はまるで夢のやうに見えました。けどまた、濼い木の實や、骨の多いスープや、黒いビスケットにバターを塗つたのなど貰つて食つたあの露西亞人の人情はとてなつかしいものです。それに、さてこれからどうなつて行くだらうと云ふ、そんな不安さもありましたせゐるか、巴里の宿に落ちつきますと、十日あまりと云ふもの、私はまるで石のやうに眠りつゞけました。そして、眠りつゞけて呆んやりと考へた事は、いつも眞實なものが埋れ過ぎてゐて、一寸芝居氣のあるものとか、威張つてゐるものとか、下品に卑下する者、こんな者達がどこの國でも馬鹿馬鹿しく特權を得てゐるものだとおもひました。プロレタリアと云ふハイカラ語をつかふ前に、私は長い三等の汽車旅で、随分人のいゝ貧乏人達を澤山見過ぎて來ました。さて、これから巴里の生活です。お天陽様、お見捨てなく！ 私はまだまだこれから、どこまでも遠く旅を続けるか知れないのです。

ところで、おせつかいながら、私は左に、東京から巴里までの私の旅行費用を書いて見ませう。
東京から巴里まで——三百十三圓二十九錢也。

十日。 下關よりの計算表

三十錢——下關より連絡船まで赤帽代。トランク四箇。

五十錢——船のボーイにチップ。

四十錢——釜山着、赤帽代。

四十五錢——安東知人へ電報料。

十錢——新聞、大阪朝日、大阪毎日。

一圓二十五錢——安東までの急行券。

七錢——茶。秋風嶺にて。

十錢——モダン日本。

三十五錢——日本辨當、京城にて。

四十錢——食堂にて、林檎と茶。

十一日。

七十五錢——安東から奉天までの急行券。

四十錢——鶏冠山にて辨當。

十錢——茶。

十二日。

一圓五十錢——奉天より長春まで急行券及び二等に變る。戰時故。

六十錢——食事。奉天驛前カフェーにて。

十二錢——切手代。

四十錢——戰時エハガキ二組。

五十錢——赤帽に發車まで荷物託す。

六十錢——支那人の車屋にて城内見物、但し戰時にて途中より歸る。

一圓——長春夜着、日本人の赤帽。

五十錢——支那人のツーリストビュウローの方へ。

五錢——長春驛待合室にて紅茶。

二十錢——列車ボーイ茶を持つて來た故。

一圓——列車内ロシヤ人ボーイに。(日本金)

十三日。

四十錢——ハルビン着、ロシヤ人赤帽代。

一圓——ロシヤ人の自動車にて北滿ホテルへ。

三圓——朝八時から午後二時までホテル休息料。(朝飯を含む)

二圓——女中チップ。

一圓——ホテルのポーターへ。

五十錢——ビュウローの方へ。

ハルビンにて買物。(大安を日本金に換算して約左の通り)

七圓五十錢——紅色毛布。

- 六十錢——葡萄酒一本。
- 四十錢——紅茶一罐。
- 十二錢——アケビの籠。
- 七十五錢——湯沸し。
- 二十八錢——匙と肉刺一本づつ。
- 二十錢——ニュームのコップ一ツ。
- 四十錢——瀬戸ひき皿一枚。
- 五十錢——林檎十箇。
- 七錢——レモン二箇。
- 二十五錢——洋梨五箇。
- 七十錢——チーズ。
- 二十錢——キヤラメル。
- 八十錢——ソーセイジ三色混ぜて。
- 六十錢——牛罐二箇。
- 二十錢——バター。
- 四十錢——角砂糖代。

- 三十五錢——パン五日分。
- 外、アルコールランプ必要。
- 十四日。
- 一圓四十錢——海拉爾朝九時着。晝食代。
- 三圓——ロシヤ人列車ボーイへチップ。
- 一圓——滿洲里晝一時着、赤帽代戰時故。こゝで汽車乗りかへ。
- 五圓——モスコウ行列車ボーイへチップ。(日本金でやる事。普通三圓でいゝさうだ)
- 十五日。
- ハラノルにて露貨とかへる。日本金二十圓にて、露貨二十ルーブル弱。こゝで役人は、お前のふところの金がいくらあるかと聞く。あまり少なく申告しない方がよい。
- 十六日。
- 三ルーブル——夕食列車食堂にて。
- 一ルーブル——うどん粉の揚げたの二箇、夜中バイカル邊で賣りに来る。うまくなし。
- 十八日。
- 三ルーブル——夕食。
- 六ルーブル——枕、毛布一枚代。

二ルーブル——林檎四箇。(約二圓)

二十日。

モスコイ夜九時着。

二十一日。

三ルーブル——國境ネゴロエ晝着。赤帽代。(三圓あまり高すぎる)

50と云ふ銀貨を十二箇——ポーランドのストロプツエ夕方着。赤帽私を蔭に呼んでポーランド銀貨皆持ち去る。

一ドル——(約二圓強) 食堂夕飯ポーランド料理(オードブルスープ。鶏肉。玉子チキンライス、プリン、茶、レモナード)

二十二日。

十五フラン(約一圓二十錢)——列車内にて夕飯フランス料理(スープ、魚の白いの、野菜サラダ、ビフテキ、アイスクリーム、シヨコラ、コロンボミカン、葡萄酒)

二十三日。

五フラン(約四十錢)——巴里夜明け着。赤帽代。

十フラン(約八十錢) 自動車賃。

計 下關から巴里まで約三百七十九圓九十五錢。

(昭和六年秋)

巴里

あまり長い間汽車旅を續けて来たせるか、巴里へ着いてからの私は、毎日毎日眠つてばかりゐた。

——その、眠つてばかりゐた理由には、疲れが出たと云ふ事もその一ツではあるけれど、ホテルをとつてからの私は、来る日も来る日も夜ばかりだといひたいやうな、巴里の暗い一日に本當は呆つとしてしまつたのであらう。なんのかんのかといつた所で、朝があつて、晝間があつて、夜があつてと、仲々自由自在な日本の風土に住み馴れてゐて、ひよつくりとこんな暗い巴里へ来て、夜ばかり續いてゐるのにぶつかつてしまふと、近眼がメガネを失つたやうに、まるで見當がつかないのだから仕方がない。「やれやれ、やつと朝になつた。巴里の朝景色を見てみませう。」

第一日目の朝、かれこれ十二時近くであつただらう、起きあがつた私はまづ地厚なカーテンをめくつて、レースの隙間から外を覗いて見た。——戶外はとても暗い、私は何度も腕時計を耳の傍で振つて時間の聽診をこゝろみてみたのであつたけれど、時計自身には何の狂ひもなかつた。狂つてゐるのは巴里の空の下で、これはまるで日本の夕方の色だ。こんなのならもうひとねむりと腹を据ゑて、又

眠りにかゝつたり、何のことはない此様な状態で、私は約一ヶ月あまりといふもの、夜から夜へ起きてゐるやうなひどく片チンパな生活をしてゐた。私が巴里へ着いたのは十一月下旬で、マロニエの古い並木はもうすっかり裸身にされて、辻々に出てゐる焼栗の美味しい頃であつた。眠つてゐることもアキが来ると、そろそろ起きて街へ自炊道具を買ひに出なければならぬのだけれど、何にしても、起きて歩くには言葉が必要だ。しかも佛蘭西の田舎ならば大したこともあるまいけれど、こゝは巴里。日本で、習つた佛蘭西語も、本場に来ると何だか妙におつかなくてめつたに口出しが出来ない。で、私はポケットの中にエンピツと紙を用意して、夕飯を食べに行くにも、所帯道具を買ひに行くにも一つ一つ覚えて歩くことにしたのである。

「下さい、鐵釜」

「下さい、私に、黒いキャフエ」

たまにこんな片言を云ふと、賣る方でも面喰つてしまつて、眼をパチクリしてゐるけれど買ふ私の方では、もう呆つと上つてしまつて「コムサ」ばかりの連發なのだ。それでも窮すれば通ずとかで、臺所道具もひとそろひ揃つて、毎日食料の買ひ出しだけれど、これがまた仲々ふるつてゐる。折角玉葱を買ひに行きながら、八百屋の遅ましい顔を見ると、もうタジタジとなつてしまつて、玉葱を馬鈴薯に間違へることはしばしばだつたし、計量を間違へて、玉葱を一圓も買ひ込んで來ることもあつたり、全く私の日本出來の佛蘭西語ときたら、何としても散々な粗製品であつたやうである。ところで、

同宿のお上さん達に、まづ「御キゲンいかがですか」位で場馴れていかうと、私は早速逢つたはじから利用してみるのだけれど、何としても佛蘭西出來の人間にはかなはない。私が「御キゲン」と話してゐる間に「サブ・ピアン」とやられて了ふのだから、益々私の佛蘭西語は惨めなものになつて了ふ。それには耳から習はないで眼ばかり教はつてゐたのにも原因があるのだらうけれど、ツつていへばカつといへる程、レンタツするのには並々ならぬ苦心がある。——夜から夜へ、巴里の秋から冬は全くそんな感じである。冬の巴里は夜開く街だと聞いてゐたけれど、別におほげさな嘘でもなかつた。

○

巴里に着いて間もなくである。クリスマス近い或晩のこと、モンパルナスの墓沿ひの路で、瘦せた女が私の肩を叩いて「朝から何にも食はないの」と云つて來たのだから私は驚いてしまつた。

氣味が悪いので沈黙つて歩きかけると「二法（その頃約二十五錢）下さいな」と私の後から何時までもついて來る。若いんだかお婆さんなんだかまるで見當のつかない唇の赤い女に後からついて來られたんでは、あんまり氣味のいゝ話でもないの、私は二法渡して急ぎ足に歩き出した。すると、二法貰つた女は、コツコツ走つて來て「お前は何だ」といふ。金を貰つてお前は何だと云ふ話もないので、癪に障つた私は「文士」だと威張つて云つた。すると、よつほど薬が利いたものなのか、二法くれといつた女は、とても勢ひよく私の肩につかまつて來て、二三日一緒に住んで、私の身の上話を聞

いてくれないかと云ふ。飛んだことになつてしまつたと困つたけれどもう後の祭で、その瘦せた女はたうとう二法貫つた上に私の寢室までついて来てしまつた。「グラン・エクリヴァンといつたけれど、あれは嘘なのよ」と、いまさうテイセイしてみても割合に居心地のよきさうな部屋の中や、二人位は平気で寝られさうな私の寢臺を見ると、もうその女は、私を見くびつたのか、手袋をぬぎながら、私に哀訴してこんな風なことを云ふのであつた。

「此頃は、街の男達が私を振り返つてもみなくなつたんですよ。一日おきぐらゐしか御飯が食べられないし。もう部屋はとづくに追はれ、私の女友達の部屋にヤツカイになつてゐるんですけれど、それだつて、厭な顔されるし、全く生きた氣がしないのよ」

さうして、若いんだか年とつてゐるんだか見當のつかないその女は、小さい聲をあげて泣き出してしまつた。泣き出されてみると、出て行つてくれと追ひ出す譯にもゆかずそのまゝ知らん顔をして御飯をつくりにかゝると、「私が美味しい料理をしてやる」といつて澤山のバターをジャンジャン溶かして青豆を煮てくれる。仕方がないのでムツツリしたまゝ差し向ひで夜食を共にしたのだけれど、それが病みつきになつて、私は此女に三日間も居候されて弱つてしまつた。本當の年は三十八で、二人も子供があるといふことだつたが、子供は小さい時に養育院にやつてしまつて、此頃になつて淋しくなつたと云つてゐた。

50 南佛生れで、妙に圖々しいところがあつたけれど、それでも日本風な優しいところがあつて、夜中

など子供の夢を見たといつては泣いてゐた。——此女は又、澤山の日本人にも買はれたことがあつたと見えて、相當知名の士を知つてをり、あんな人かと思ふやうな驚く可き名士の名前をあげたりもする。私が白足袋をほつちらかしておくと、指の先に造花の薔薇をくつゝけて天井へぶら下げたり、仲童心を持つてゐた。「そんなに毎晩街へ出ないで、少しは仕事を探して落ちついたらどうだらう？」といつてやつても、私の生活を見てゐて、なめてかゝつてゐるのか「働いたつてどんな希望もない。——」と、アベコベに私をやりこめたりさへするのであつた。彼女の生活は、晝頃起きると、煙草を吸つて、くだらない唄をうたつて、蓬々とした姿のまゝで牛乳を買つて来て、ゴクンゴクンと飲み乾して、まあ、そんな毎日であつた。夜になると、體中をロオシヨンでふいて、厚化粧して出て行く。歸りはいつも一時か二時頃で、その頃は、唇の色など見られたものではなかつた。それでも歸つて来ると、濟まななさうに私の額に接吻をするのだけど、わざと毛布を引つかぶつて相手になつてやらないので、照れくさいのか猫の鳴き聲などを真似て晝着のまゝ寢臺へ這入つて来るのだつた。彼女の財布の中には、十法札のはいつてゐたためしがない。「それはとても女が多いの、かなはない」とつくづく自分の顔を鏡に寫しながら、ぐちをこぼしてゐることがある。でも、此女も三日めには、インド人の爺さんを見つけて、私の部屋をサツパリと引きあげて行つてしまつた。ダンフェル裏のブウラアドの通りには、いつたいに日本人が多い。——こゝを通ると、かならず、一人か二人の日本人に行き會ふ。顔みしりの美術學校の制服を着たるし屋さんや、風呂敷の中に黒大根を包んで歩く雜貨屋さんなど、

一寸なつかしく哀愁のある風景だ。私も、約一ヶ月近くこの通りですごしたことがあるけれど物價は安いし、日本人に對しての人氣もさう悪くはないので大變住みよいところだと思つた。日本へ歸つて來ると、巴里にゐる日本人をくそみにいふ人が多いけれど厭なことだ。何でも悪口をいひ出したらきりが無い。良いところをほじくれば、又それはそれでソウトウなものであらう。——女に一生懸命になつて、留守中家財道具を持ち逃げされた繪描きや、女に金をまきあげられて、ニースでピストル自殺をしかけて、眼の玉を失つた寫眞師や、食へなくつても、コッコツ展覽會を見て歩いてゐる繪描きや、日本人はつくづくやさしい人種に違ひないと考へる。——巴里へ行くと、石黒と云ふジュウドウの強い偉い人がゐる。偉いといつても、トルコで、大變もてたといふ話で、巴里ではさうでもないのだらうけれど、仲々唄の好きなひと。西洋物の大判のレコードをまはすと「仲々濟まないんですね」と、もどかしがつてゐるが、一度おけさ節のレコードに至れば、子供のやうに首を振つて唄ふひと。まして、此石黒さん酒でも飲んでゐるものなら、誰にもしやべらせないで、一人で楽しさうに唄をうたつてゐる。此石黒大人、又なかなかの古物の蒐集家で、道場の中を見せて貰ふと、さながらクリニアンスールの蚤の市の縮圖を見てゐるやうで、興味津々たるものがあつた。

此道場では、牛原虚彦氏にも會つたけれど、至つて此連中は朗らかと見えて、シヤレコウベの隣りに蝶々の標本が並べてあると、イチハヤク「馬鹿の骨頂だね」とシヤレを飛ばすことに腐心する。石黒五段の巴里生活もかなり長いもので、もはや巴里の名物男に數へられても異存はないだらう。——

モンマルトルの裏手の丘には、仲々面白い興業が多い。レイモンドと云ふ新しい女友達と、一タモンマルトルを歩いたことがあつたけれど、酒場の入口から地下室の映畫劇場にはいると、畫面は丁度、足のない男が、義足を壁の釘に一寸引つけて、戀人の寢室に這入つて行く光景で、——寢臺の中なる中年の女は、あき盲目なのか、唇を塗るのにまるで西瓜を割つたやうな氣味の悪い描きかたで男を見上げてゐる。そんなおそろしくグロテスクな場面であつた。

「まア随分シンコクねえ」

「日本にこんなのがあつたらどうでせうか？」

私も女友達も此映畫にカンタンの言葉をしまなかつた。男がピョンピョンと飛びながら窓に行くと、大きな月が窓の上から覗き出す。女は怒つて、男へ食つてかゝると、男は片足で部屋中を逃げまはる。すると盲目の女は男の後を追つて狂ひながら、家具につまついて、とてもソウゴンな美しい女の腰部がスカートからめくられて見えたりする。巴里のシネマは、日本より少々ばかりお達しがゆるいといふのか、シヤンゼリゼーの映畫館へ行つた時も、エロチックな小篇がかずかずあつたものだ。そのひとつ、——嵐の夜、町の交番に寢間着姿の女が「私は男を殺しました」と訴へて來るところから畫面が始まる。巡查は、むき出した女の足を眺めながら「それは聞き捨てならん」といつた風に、寢卷姿の女に水を吞ませたりしてゐる。

「私は會社員の妻でゐますが、夫が出張しました留守に、仲のいゝ男を泊めましたところ、夜中に

なつてその男が死んでゐるのです。——もうぢき主人が歸つてくるといふ電話がかゝつてきて、仕方なく走つてきました」

實に野方圖もない呑氣な映畫で、巡查と細君が死んだ男を窓から投げるとグニヤグニヤの男がやつと這ひ出したり、電話が鳴つて來るとそれはもう一晚おくれるといふ主人のことづけだつたり、急に雷鳴がはげしく鳴り出して、巡查は、細君と一緒にカーテンの蔭に隠れるといつた、全く、ナンセンス物で、そんな映畫がザラにあるのだ。私は、子供を連れて來てゐる親達を、いまさら驚きの眼をもつてながめたものであつた。巴里のモンマルトルといへば、まづ日本の淺草のやうなところ。町は全くインタナショナルで、玩具箱をひつくりかへしたやうな繁華さだ。

「え、お前の胸より温かいのオ」

ポーランド女の焼いてゐるパンジュウ店や、「貴方の愛らしきアミへ」と呼び賣りしてゐる菓賣り、青い蝸牛や、レモンと牡蠣を賣つてゐる露店、辻には幽霊汽車や、カンシヤク自動車などがあるし、一步小路へ這入ると、青い瞳の女がまるで背戸の筍のやうにつゝたつてゐる。キャバレーなんでも、日本のカフェーなどのやうに軒並みで、シヤノアールと云ふところなどは、何も知らずに這入つて行かうものなら、舞臺の女達から、ノツケに悪口を云はれて、田舎者は赧くなつて戶外へ逃げ出してしまはなければならぬさうだ。キャバレーといへば、ブルヴァール・サン・ミッシェルの燕横丁に、昔牢屋であつた跡の地下室の穴藏を酒場兼用につかつてゐる店があつた。松尾さんに案内されて夜更けて

出掛けて行つてみたけれど、戸口に、赤ハンカチのアパッシユの男が立つてゐる。扉にはトランプが散つてゐる毒々しい繪が描いてあるが、一步中へ這入るとガラソとした空虚さがあつて妙に深閑としてしまふ。此酒場が盛んな頃には、ボオドレールとか、アルチュール・ランボーなんかが出はいりしてゐたものと見えて、石の柱には此様な文人達の落書が眼を惹く。地下室に降りて行くと、カンテラ風な電氣がついてゐて、低い舞臺には、風琴一ツで女が詩のやうなものをうたつてゐた。こゝではビール位を注文するに限るさうだ。變に氣取つてカクテルをとつたりすると似顔描きなどが寄つて來て、仲々メンドウな仕儀になつてしまふと教へて貰つた。私なんぞも、下手なパステルの似顔を買はされて五法も取られたりした。巴里のキャフェは素敵だ。それも、街裏の小キャフェになると、空氣は至つて閑散で、一法二十文のキャフェ一杯で孫の悪口をいつてゐる婆さん達や、西洋將棋に耽つてゐる青年達、ケイコをつけてゐる小音楽團、その他、トランプをしてゐる者、冗談を云ひあつてゐる女房達、全く呑氣至極で腹さへ空かねば一杯のキャフェで朝から晩までも居据つてゐることが出来る。

私は部屋の電氣が暗いので、仕事をする場合と云へば、たいいキャフェで仕事をすることにきめてゐた。不思議に、日本のやうに雑音が氣にならないし、誰でもセツセとキャフェで仕事をしてゐるのを見ると、案外これが常の生活なのかも知れないと考へたりする。ポイイは男だし、チップは一割だし、非常にそのところは呑氣にかまへていゝ。但し、夜になつて女が一人でキャフェに出かけたると、毛色の變つた女だと男の方からウインクされることがあつて驚くさうだけれど、そんなこ

とはどうでもいゝとして、街裏に行くほど呑気なキヤフェが多い。何が美味しいといつて巴里のコーヒーほど美味しいものはない。私は朝々三ヶ月パン一ツで、此キヤフェをすゝりながら食事を済ませた。

○
私は巴里では四軒ばかりもアパルトを變つたけれど、どの部屋も哀愁こもごもでみんないゝアパルトばかりであつた。

巴里の街へきたての或日本の紳士が、「巴里には二様の街の天使がゐますね。一ツは賣笑婦で一ツは巡査ですが、さう思ひませんか」といつてゐたことがある。なるほどさう云はれてみると、巴里賣笑婦の多いところはないだらう。又、巴里位、短いマントウを羽織つた巡査の姿のやさしい都會はないだらう。夜學の歸り、おそくなると、私は度々此マントウを着た巡査君にアパルトまでおくつてきて貰つた。チツプに一法もやれば、門番が出てくるまで、ゴエイしてゐてくれるのだし、巴里のお巡りさんは仲々重寶なものである。ヨーロッパをめぐつて、巴里が一番自由な國であり、お上りさんのよろこびさうな街だ。その自由な街に、私も約八ヶ月ほど住んでゐたけれど、歸るまで私の佛蘭西語が片言であつたやうに、かうして書いてゐる私の巴里觀も、シヨセンこゝでは片言のキキを脱しないのである。

巴里案内

巴里のちよいとした街通りで眼につくものは、出來上りのスカートを賣つてゐる店でせう。此出來上りスカートは、どの階級の女に賣れるのかと云ふと、たいていは商店のお神さんや、月給取りの細君連中がはいてゐて、仲々便利に氣が利いて見える。

私のアパルトの女主人も、此出來上りスカートをはいてゐて、上から同じ色のジャケットを羽織つてゐたけれど、「仲々安直でシックだから、お前も部屋着にどうか」と自慢された位であつた。私もその出來上りスカートなるものを買ひに行つただけれど、いざ出かけて見ると、私の腰が二ツもはいりさうなスカートばかりなので、つひにあきらめて止めてしまつた事がある。

綿繻子で出來たグリンのサキュラ型や、灰色のセル地で出來たのや、黒だの白だの自由に選べる。値段はたいいて二三圓止りで、一寸體裁がいゝので、近所の芝居位にははいて行ける。——此、スカートを賣る店と云ふのが、また仲々面白い。昔銀座四丁目の角にあつたライオンの隣りに、世界一小さい店だと云つてネクタイ屋があつたものだつたけれど、あんな風な路地や、アパルトの出口を利用

して、色々なスカートが戸口にぶらさげてあるのだ。

「腰つきを新しくしなくちや、あの人に嫌はれるよ」

戸口の椅子に腰をかけたスカート屋の主人は、こんな軽口を叩きながら、買ひ物してゐるお神さん連中に呼びかけてゐる。

此スカート屋へ這入ると、安物の靴下から、綿入りのジャケット位は揃へてあるので、一寸した部屋着はこのスカート屋で間に合ふと云ふものだ。

巴里のごみごみした裏街を歩いて、此スカート屋の前を通ると、妙にレヴェューを見るやうで、一寸楽しくほゝ笑ましい。腰つきのいゝ所帯臭い女がぶらさがつてゐるやうで、私は長い間、此スカートに關する道化た物語を考へて歩いたものであつた。

日本では百貨店の食料品部に行くと、カツレツとサラダが折の中にはいつて並んでゐる。その他、壽司でも菓子でも、刺身でも折詰になつて賣つてゐるやうであつたが、巴里の食料品屋では、折詰と云ふものがない。——店の硝子戸越しに覗くと、大きな瀬戸引皿に、貝料理やサラダや、肉料理などが、ずらりと並んでゐて、お神さん達は自分達の食べるだけをキログラムで自由に買つてゐる。

私は、よくパン屋で、小さい長いパンを買つて來ては、此食料品屋でサンドウキツチをこしらへて貰つたものだ。パンの横腹に庖丁を入れて、鶏肉や、トマトや胡瓜、鹽豚などを挟んでくれて、十五

錢位で大變美味しいサンドウキツチが出來上る。

ジャムを買つて、コップを返しに行くと、コップ代だけ引いてくれるし、一寸した料理の仕方などは、親切に教へてくれるし、仲々氣の利いた食料品屋であつた。

臺所と云へば、巴里の住宅は、ほとんどアパート住ひが多いので、日本のやうに、あんなにきまりきつた臺所を所有してゐる家はまづ少い。それに、たいていは戸外のレストランを利用する家族が多いので、大した臺所も必要ではないのであらう。

日本の料理屋が、まだまだゼイタク視されてゐる間は、一家の主婦が臺所から解放されると云ふ事ははなはだ遠い事であらうと考へる。少しばかりの歐洲滞在で歸つて來て今さら氣がついて驚いた事は、私の近所のお神さん達が、朝から晩まで臺所で働いてゐると云ふ事であつた。

例をあげて云つて見るならば、私の隣家は六人家内で三人は子供、お婆さんに御主人にお神さんと云つたぐらゐで、御主人が出掛けて行くと、後始末にお晝まで臺所に坐つてゐる。晝は子供達と臺所で食事を濟まし、それから暫く洗濯に過し、それから一寸晝寝、晝寝から覺めると、晩食の支度、行水の支度、夜は縫物、私は、朝から晩まで軒をつらねて見てゐる、此氣の毒な隣家の主婦に何と云つて敬意を表していゝか、言葉が見つからない位であつた。

巴里で見た私の隣家の家族は、子供が三人、主婦と御主人、と五人暮しで、土曜日曜以外は食事はいつも家でするのであつたが、朝はキャフェにパンのまゝで濟まして、主婦は子供を三人連れて、す

ぐ近所の公園に出かけて編物か讀書に過し、歸つて來ると、アパルトの掃除人が掃除を済ませてゐるので、子供達をおいでどこへでも訪問に出かける。訪問から歸つて來ると、着物を變へて、御主人のお歸りを待つてゐる。

窓の下から主人の口笛でも鳴ると、三人の子供を連れした主婦は、御主人の腕にもたれて、近くの料理店で子供達と一緒に食事をとり音楽を聞きに行つたり街を散歩したりするのだ。

つくづく私は此主婦達に、うらやましさを感じてしまつた。臺所と言ふものが非常に事務的に考へられてゐるので、此様にカンペンに日々を送る事が出来るのであらう。日本の臺所は皿が何枚、客膳が何枚と、全くお話にならぬ程ハンサすぎる。

日本の主婦が、臺所から解放されるのは何時の日の事であらうか。

巴里では自炊生活であつたせるか私は、此そ、う、ざ、い、屋のあるのには嬉しくなつてしまつた。外へ出た歸り、一寸此そ、う、ざ、い、屋に寄つて酢漬の胡瓜に、鹽豚位買つて歸ると、茶だけ沸かしてそれで食事が済む。

60

だから、巴里の生活では、臺所がめんどうだなんぞと、か、こ、つ、やうな事は一度もなかつた。そ、う、ざ、い、屋の物に飽いて來ると、近所のレストランで安い食事が出来るし、その料理店の入口には、その日の獻立が出てゐると言ふ鹽梅で、全く巴里の料理店は、男や女の爲めと言ふよりも家族の爲めにある

と言つた感じであつた。

○

私の右隣りの部屋には、醫科大學生兄弟が住んでゐた。

クリスマスの夜、部屋を間違へて、私の部屋へ侵入して來た事から口を利くやうになつただけけれど、巴里の大學生は日本の大學生と大分おもむきが違つてゐて、朝から夜まで忙がし氣であつた。

兄の方は内科を専門に勉強して夜は自分の趣味だと言つて天文学の研究に通つてゐたし、弟は眼科専門で夜は自動車學校に通つてゐた。

「これからは、一ツの専門だけでは、生活は難しいし、生活がすぐ空虚になつて來る。で學費が許せば、まだまだ研究したい事が山ほどあるのだが」と學費の少い事を此大學生達はこぼしてゐた。「一ヶ月どの位でやつて行つてゐるのですか？」

或日、私はぶしつけに兄の方へ尋ねて見た事があつたが、二人で八百法だと言ふ事であつた。日本の金とくらべたならば、今の日本の金にはおそろしく値がないのでくらべものにはならないだらうけれど、日本で言へば、約七十圓位の生活程度に當るであらう。

ベッド一ツ、机が一ツ、洋服ダンスが一ツ、これは一人者の私の部屋と同じで、二人が寝るだけだと言つてゐた。

二人共朝早く出て行くと夜まで歸つて来ない。日曜なんぞ、たまに唄をうたつてゐる聲が聞える位で、全く、二人の男の部屋とも思へぬ程静かであつた。それに、此大學生連は、自分の部屋へ來客をむかへると言ふ風な事をしないので、なほさら静かであつた。

「僕達の部屋は客間ではなく、お互ひが休息をする部屋だから、戀人も友達も、外で會ふ事にしてゐる」

私はハッキリした考へだと思つて感心した事である。

日曜日などは、弟の方が自動車に乗つて來て、よく私をさそつてくれたりしたけれど、人種的な差別と言ふものがなく、實に朗らかであつた。

兄の方はまたピアノも習ひに行つてゐて、ひまがあると楽譜を見てゐた。弟の方は香水を造る事が好きで、いつも香水の本を買つて來てゐた。たまに、此兄弟の戀人が訪ねて來ても、決して部屋へ這入れると云ふ事はなく、戸口に待たしてすぐ出掛けて行くと云ふ風である。部屋の中はいつも清潔で道場のやうに見えた。

○

私は佛蘭西の女學生にはあまり知己はなかつたけれど、佛蘭西語を習ひたい廣告を新聞に出したら、

六人ばかりの申込みの半分が、女學生であつたのに驚いてしまつた。——十七歳になる家政女學校の女學生に來て貰つて、私はかなり長い間レッスンを續けて行つたけれど、此お嬢さんはブルターニュ生れの海臭い娘さんだつたが、非常に眞面目で、自分で判らない事はわざわざ先生に聞いて來てくれたりして教へてくれた。それに水曜日は帽子屋の賣り出しにも務めてゐたり、仲々の働きものでもあつた。

「貴女の宗教は？」

彼女は逢ふなり初めにかう尋ねた。私は佛教だと云ふと、「方丈記を教へてほしい」と云ひ出したのは驚いてしまつた。日本人を教へるには、日本の事を少しでも知らなくてはならないとソルボンヌ大學の東洋科の課外教室へ通ひ出したと自慢して話してゐた。何としても十七歳の先生が此様に眞面目で、生徒の私が呑氣なものには、全く閉口頓首のかたちであつた。たまに私が臺所をしてゐる時などに來ると、此可愛い先生は、さつそく二ツ三ツ料理をつくつてくれたり、全くいゝ友人でもあつた。「私の理想は自分の働いた金でお前の國へ行つてみたい事だ」

これが十七歳の娘の理想で、結婚はどう考へてゐるかと聞くと、文明がこんなに私達若い者を樂ませてくれるのだから、急ぐ事はないと云つてゐた。

「男の友達は何山ありますか」

と尋ねると、「男も女も澤山友達がある」と威張つてゐた。

巴里では一度困つて質屋と云ふものに飛び込んでみた事があるけれど、初めは、市民権を取つてゐなかつたので斷わられ、二度目はパスしたものの全く安くしてお話にもならない。まるでお役所のやうなところで、日本と違つて市營ばかりなので、あのやうにケンシキが高いのであらう。私が持参したものは、絹の日本着物であつたが、價をつける爺さんは、「これはまさに歴史的だ」と云つた。なる程、日本の女着物を持ち込んだものはおそらく私が初めてであらう。澤山の行列の人達は、珍らしさうに私の赤い絹の着物に集つて、「お、美しい！」とさゝやいてゐた。借してくれた金は着物三枚で、五十法あまり、私は此金で暫く斷食をする事から救はれた次第であつた。

パイプを置きに来てゐる老人だの、勳章を胸に飾つた男がピアノを持ち込んでゐたり、銀のフォークに肉刺を十本ほど置きに来てゐるお神さん。天井の上には、ランプや蠟燭立のやうなものまでぶらさがつてゐて、實にお伽話のやうな長閑な風景であつた。

○

銀座なんかへ行くと、蠟紙に包んだ十銭の花束を可愛い娘達が賣つてゐるけれど、あの十銭の花束は、よつほど世帯臭いものでなければおそらく買つて行かないだらう。氣の利いた散歩人達は、あの十銭の花束をかゝへて歩く氣なんてしないだらう。一ツ巴里の眞似をして、銀座人の胸を飾る花束をつくつて賣る娘達はゐないものだらうか。——巴里の夕方の散歩道には、莖を二三輪藥玉のやうに圓

く束ねて道行く女連れの男達に賣りに来る。すると男達は、新聞を買ふ程の小錢で、その花を買ひ、女の胸に或ひは自分の胸に飾つて散歩をするのだ。

花と云ふものがこゝまで進出して來れば、何と街は花の匂ひであふれる事であらうか。

一人で歩いてゐてさへ、淋しくなれば、此花束を買つて私は胸にさして楽しんで歩いた。巴里は、草花の美しい街であるし、女も男も草花の詩情をよく心得てゐる。

○

日本の百貨店位、廣告術の下手なところはないだらう。

その月々に、何を力點にして賣り出すかと云ふモットウがないので、いつも新聞廣告には臧拂ひ大賣出し式の文字ばかりで、A百貨店もB百貨店も同じやうに見えて仕方がない。私が巴里へ行つた季節は丁度秋の十一月で、クリスマスが近いせゐるか、或マガザンは玩具の月であつたり、又、他のマガザンは、子供服の月であつたり、或は手袋ばかりを主にした店などもあつて、その店々で仲々面白い趣向を示してゐた。又、入口や出口には、その店の無料月刊雑誌が置いてあるので、自由に買物を調べた事もあるし、流行を知る事もある、又、その店が、主力をそゝいで賣り出してゐる品物も知る事が出來た。それに、クリスマス前になると、巴里の百貨店達は、いつせいに日記帳を賣り出す事になつてゐる。日本で買へば二三圓はするだらう日記が、たつた三十錢あまりで賣り出されるので、

此日記の賣場は大變なひとだかりだった。——私が、ボン・マルセエで買った日記帳は表紙は銀色、模様は一輪の赤い花で、大きさは、婦人雑誌の二倍大、一頁をめくると、先づ店の主意が書いてあり、店の寫眞が出てゐる、第二頁は花言葉、第四頁は女流藝術家達の一寸した言葉と寫眞、日記をつける餘白にはかならず店の商品をつかつてゐる美しい繪が描いてある。夏ならば、海水着を着た女が砂に寝轉んでゐる圖や、旅を讚美した詩などが書いてあつた。此廣告が三百六十五日間の日記の餘白に繪になつてゐるのだからとても美しい。その繪も同一人の手になつてゐるので、此廣告繪はさう苦にならないのだ。終りには巴里の大きな地圖がつき、仲々洒落れたものだと思つた。

○

巴里の街でも、町内町内で時々祭のある事は日本と似てゐて、四ツ角の廣場には、子供の木馬がかつてゐたり、風琴屋が出たり、づぼんつりを賣る香具師が出たり、露店が澤山出て仲々賑ふ。

玉轉がしも、私の楽しみな遊びのひとつであつた、お菓子屋さん、果實屋さん、パンジュウ屋さん、小さな並木街は玩具箱をひつくり返したやうになる。又公園の入口などには鐵啞鈴を持つた力持ちの藝人が店を擧げてゐたり、漫畫雑誌を賣る女が面白い身振りで、通行人を皮肉つてゐたり、此様な氣分は日本の町内の祭氣分と少しも違はない。

66 佛蘭西人は、日曜と祭日を太陽のやうにうれしがる國民だ。日曜日になると、魚屋も肉屋も八百屋

も午前中で店を閉めてしまふので、行つた當座は大變不便なところだと感じるけれど、馴れてしまふと、仲々規則だつてゐて氣持がいい。——日本の夜更けのやうに、おでん屋風のものもなければ、夜の十一時までも開いてゐるやうな食料品屋はまづ仲々みつからない。

時間から時間へと云つた感じの巴里だけれど、只、キャフェだけは夜明し店が多くて、旅行者には何より便利に感じるものの一つであらう。日本のキャフェのやうに女をおいたキャフェなどはないので、チップの心配もなく、安心して休息出来るのが、巴里での一番楽しいものであつた。

これから秋近くになつて來ると、辻々に大きな鐵釜をすゑた焼栗屋が店を出して、栗の焼ける匂ひがなんともいへない頃になる。

「熱い熱い焼栗！」

氣の利いた焼栗屋のおやぢさんが、こんな風に呼び賣りしてゐる。あのなつかしい巴里の焼栗の事を思ふと、若い美しい巴里女が、枯れかけたマロニエの並木道を、ムシヤムシヤ、焼栗を頬ばつて歩いて行くのを、私はなつかしい風景に思ひ出すのだ。

皆知つてゐるよ

1

巴里の賑やかな街通りには、ゴム管でレコードを聴かせてくれる蓄音機屋がかならず一二軒はあるものです、安いところで二十五センチムから、高くて五十センチム位で、日本で云へば、「お前とならばどこまでも」のやうな古いものから唄が揃へてあります。何時行つてもこゝは澤山人が這入つてます。——だが、唄を聞くと云つても、レシーヴァを二ツ耳に當て、聞くので、自分一人で聞いてニヤリとするのも勝手、金貨（店で買ふ）を箱へ入れると、箱の下でレコードがくるくる廻つてゐます。

腕を乗せる硝子の臺の上には、譜と唄と唄手の寫眞が出てゐるので、お上りさんには大變便利。——夕食を食へたけれど、シネマにはまだ早いと云ふのや、アパートへ歸れば部屋代をガミガミ云はれる大學生、煙草も買へないやうな労働者とか、何か薄呆んやり退屈な時間を持つた人達が、あくびを噛み殺したやうな顔でぞろぞろ譜面を覗いて歩いてゐます。——だから、私なんでもその薄呆んやりの

一人なのでせう、夕方になると部屋の鍵をポケットに入れて私は毎日街へレコードを聴きに出ました。最初見付けたのが、モンパルナスのクウポオルと云ふキヤフェの並び。い、一番に聞いたのが、「妾淋しい」と云ふ唄でした。その次はモンマルトルの盛り場で、ジョセフィン唄ふ「妾にや二ツの戀がある」と云ふ唄。——どうも巴里の街そのものが甘いのか、妙にこんなものに惹かされます。此ジョセフィンの「二ツの戀」の意味は、——何と云つたつてそれは巴里が第一よ、巴里がなかつたら、私は焦れ死するでせう、巴里は私のいゝ人さ。だけど私の過去には、海のあるあなたに残して來た過去がある。それは私の黒い體を産んでくれた故里、空が青くて花が赤くて、人間がまるで赤ん坊で……あゝ此戀は二ツながらにやるせない。と、まあこんな風なものです。その外南京豆の唄とか、皆知つてゐるなどを私は淋しくなるとよく聴きに行きました。

この「皆知つてゐる」と云ふのは目下巴里に流行つてゐる唄で、私が初めて此唄を聴いたのは、ムーランルージュの踊り場でした。何しろ芋を洗ふやうなあの大ホール天井には、硝子板に唄を書いたのが下つてゐて、四方からよく讀めるやうに明るいので、皆踊りながらそれを見て唄つてゐます。まるでモオパッサンのベラミーの初めにあるやうな状景。

初めに出たのが薬屋よ！

薬屋の奴が牛肉屋にしやべつて

牛肉屋は喜んで石屋に話し

石屋驚いて村長に耳打ちし

村長は困つた事だとか、ニューウのおやぢにぶちまけてしまひ

カニューウのおやぢは大笑ひものだ

町の楽隊屋にしやべつてしまつた

楽隊屋は町中ブカブカふれて

今ぢや町中であいつのヒミツは皆知つてるよ。

何でもこんな風なお伽話のやうな唄だけれど、あいつが初め藥屋から出て來たと云ふのが、此唄のつけめなのでせう。フランスらしくて面白い軽い唄でした。

ノエルの晩、随分風琴屋が此唄を唄つてゐた。巴里と云へば風琴屋が懐かしい。一寸お祭なんかになると、足の先で太鼓を鳴らして風琴を弾く器用なのがあるたりします——巴里はどこへ行つても音樂の聽ける街。——日本のキャフエでは、まるで電車の中で酒を吞まされてゐるやうに蓄音機をヂャンヂャン鳴らしてゐて、しかも擴声器とやらをつけてゐるので、ライオンの聲を聞いてゐるやうな恐怖性になるのですが、こつちのキャフエでは音樂が個性を持つてゐる事です。蓄音機の代りに四五人の音樂師を置いてゐたり、又或ところでは女ばかりのオーケストラもありました。甘くて靜かであれなら誰だつて酒の一杯も吞みたくなくなるでせう。

巴里の風呂屋にはけつして日本風の青いのれんは出てゐません。まるで産婦人科と云つた風な家構へで、ドアをあけると正面に切符を買ふところがあります。こゝにはアルカリソーダの一フランの袋が山のやうに積んであつて、お神さんが雑誌か何か讀んでゐる。

「セ・コンピヤン？」

と云つたところで、まだ向う様の云ふ事が判然と吞み込めない私は、五フランの札を出して先様の氣心を惹いてみます。するとお神さんは眼鏡越しに毛色の變つた此東洋女をジロリと眺めて何かあいそを云ひながら青い札を出してくれます。

「メルスイ」

一フラン五十サンチムのつり錢。風呂も仲々馬鹿にはなりません。日本金で四十錢あまりです。女中には五十サンチムのチップをやつて、三階の風呂場に行くのですが、丁度下宿屋の廊下を歩いてゐるやうな氣がして仕方がなかつた。ところで女中が湯を出して、外からピンと鍵をかつて行くと、私はまづオーヴァを脱いで釘へかける。中は三疊ぐらゐの廣さだけれど味氣のない事おびたゞしく、穴のあいた椅子が二ツ、一尺四方の鏡、白い湯舟、たつたそれだけです。何も不平を云ふ事はないのだけれど、日本のやうにのんびりとしてゐない事が不平です。脂肪でギシギシした浴槽の中に、私は

暫時呆んやり立つてゐます。立つてゐても仕方がないのでそつと體を屈折して横になるのですが、湯が少いので何の事はない醬油の中に浮いた刺身みたいにびたびたしてゐる。

嚏をしながら汚れた湯を落して、それから、清水きよみづの瀧たきのやうにチロチロと出る湯の根氣長さに呆れ、まあ！ 巴里と云ふ處は田舎だねと一人でフンガイしながら、やつと肩を浸して上るのですが、これでは風呂を楽しむなんて氣持にはなれない。それに生がわきの足に靴下をはく時、なめくぢの上を踏んだより嫌な氣持でした。

巴里の風呂屋も正月には、一フランのソーダをお年玉にくれます。女中にソーダを渡すと、それを湯の中へ落して混ぜてくれますが、ソーダを入れたせいでせうか、すぐ汚れが取れて軀がサラサラして行くので、それから、風呂へ行く度にそれを買ふ事にしました。まるで體が洗濯物みたいな氣がします。私は巴里へ来て、月に三度づゝ風呂へ行くのだけれど、巴里は埃がないので割合體が汚れない。

風呂屋と床屋へ行くのは巴里へ来ての楽しみの一ツ。私は髪を短くして四年あまりになるけれど、巴里へ来て初めて頭が軽くなつたやうな氣がしました。日本の床屋へ行くとまづ横にジャキジャキ剪つてくれるのですが、巴里のは縦に髪を取つて行くので、さすがに五右衛門のやうだつた私の髪型のだけは、パンドラの箱の主人公ルイズ・ブルツクスみたいに、ピツタリ頭にくつゝいて一寸ばかり見良くなりました。

巴里の床屋さんは廻轉椅子に私を腰かけさして、私をくるくる廻しながら髪を刈るのです。それは、まるでモデル臺を廻してゐるのと同じ。

日本では美容師には女の人が多いけれど、巴里は男が多い。シャンゼリゼーあたりの、大富豪の奥さんの流行女優だのの来る一流店では、裸を砂で揉む術からあると云ふ事でした。——私の髪を剪つてくれる男は、アドルフ・マンジュウにそっくりで、仲々あいそがいゝ。或日、日本から送つて来た××畫報の中の、××女史結び上げたところの女學生の斷髪を見せたら、大變外側は上手に出来るけれど中心が出来てゐないと云ふ事であつた。繪描きがデッサンを大切にするやうに、女の頭を前にしたら、その女の顔の中心をとらへると云ふ事がカンジンだと、仲々面白い事を云つてゐた。勿論、ツウヤクつきで聞いたのだけれど、仲々味な事を云ふものだと思つた。

「これで、髪の毛が多いと、こんなに饅の線が亂れるのは無理のない事です」
ムツシユウ・マンジュウ氏は何時行つてもあいそがいゝ。

3

松尾さんに案内されて、パンテオンの裏にある小さい踊り場へ連れて行つて貰つたことがありました。

男が男を抱いて踊つてゐる。来てゐる女達は商店の女中だの安淫賣だの、寡婦婆さんだったので、男達

は、街の不良青年とでも云つた風なのが多い。

唇紅を濃く引いた男や、女のやうに紅いバンドをチラチラ見せてゐる男なんかがありました。ビールを呑みながらそんなのを見てゐると、隣りのボックスで、一人呆んやりしてゐた中年のアメリカ紳士が、「まだ面白いところを知つてゐるから行かないか」と私達をさそひます。一人では危険だと云ふので誘つたのでせう。私は自動車で遠くへ行きました。夜のせるか、地理が少しも解りません。降りたところは街の入口らしいけれど、労働者風なアパツシユが澤山ありました。アパツシユと云ふのは、一寸小意氣に赤いハンカチを首にまきつけてゐるのだけれど、此珍らしい三人のエトランゼをじろじろ見ながらついて來ます。ガス燈の下には巡査がピストルを持つて二三人立つてゐました。

「ねえ、且那一緒にホテルに行かない！」

連れのアメリカ人を金主と睨んでか、盛んに、若いなよとした男達が、アメリカ紳士に凭れかかつて來てゐます。

「お、あいにくだが、今晚は女が欲しいんだ」

「そんな事云はないで、——ぢやお金少し頂戴！」

「お、あいにくだがギリギリさ……」

「けちな人！ ぢやア酒をね」

「安い酒なら一杯ぐらゐ、煙草はどう？」



ホールの汚れた床を蹴つて、ビール樽みたいなお婆さん達が若い男を擁して踊つてゐたりします。まるで虱がうじやうじやしてゐるやうな人の重なりでした。

「ねえ、そつちのムツシユウ、今晚ホテルへ連れてつてよ、三日も食べないんだから」

蔭で聞けば、まるで女の云ひさうな事だ、此東洋のムツシユウは、至極田舎風の人なので、腕をこまねいて、馬鹿らしいと云つた表情をしてゐた。

この部類の男は十四五の少年からゐる。生意氣に煙草をふかしてゐて肩で男客のところへ擦り寄つて來るのだ。



サン・ミツシユエルの地下鐵を上るとすぐ、燕と云ふ街通りがある。名前は燕通りでも古風な匂ひがあつて夜になると、空家のやうな家の前にアパツシユたちが立つてゐる。私は時々その燕通りの酒場へ友人に誘はれて行つた。

入口が酒場で、まるで空家に腰掛けを並べた感じだ。その酒場の片隅の歪んだ梯子をぐるぐる廻つて降りると、石の壁で圍んだ、天井の高い小さい部屋がある。その石の壁には、ボオドレーンなんかの署名が刻んであつたけれど、本當か嘘か、そんな藝術家の署名が、石の壁に澤山刻んであつて仲々風趣がある、隅の梯子から下へ降りると、天井の低い穴藏の部屋がある。——ビール箱のやうな舞臺

の上では、黒い背廣を着た金髪の女が「あゝうい！ あゝうい！」と唄つてゐる。別に節もない出鱈目なうたひかただけれど、風が夏の濱邊に吹いてゐる感じ。

「あれは漁師の詩を唄つてゐるんです」

友達からさう聞くと、なる程と、最初の感じがあたつた事を私は少々得意とした。ゼスチュアがとても品があつて、年を取つた女だつたけれど、實に感じがよい。暫時すると、ボーイが、小さい梅の實のはいつた酒を持つて来る。似顔描きがパステルで新來の客の顔を描き出す。日本にもこんな自由な詩を聞かせてくれる小屋があつてもいい——伴奏は風琴ひとつだつた。

漁師の唄が済むと、二十ばかりの可憐な女が、舞臺に立つた。舞臺に立つと云つても樂屋かなんぞから出て来るのではない。客席にゐたのが出て行くだけの事で、石の壁のバックにはアパッシユの顔だの刀だのを描いた紙がさがつてゐるきりだ。

「體がガタガタするわ」

「何でもいゝから良いの聞かせて」

「忘れてるかも知れない。昔の事だから」

舞臺に立つた紫レースの女は恥かしさうにニツとして、「巴里の思ひ出」と云ふ詩をうたひ出す。甘い聲で、風琴が實に哀愁たつぷりで、——途中で何度か引つかゝりながら、それでも皆樂し氣に……舌の上で梅の實を轉がしながら、「うまい！ うまい！」とでも云つてゐるのだらう、時々拍手がおこつ

たり日本では見られない詩的な寄席だ。

「笑つちや駄目よ」

「だつて、皆の顔がをかしいんだもの」

實に長閑で、口をあけて笑つてゐる間に、紙剪りの男が、笑つてゐる私の顔をこしらへてゐた。日本の寄席にもよくこんなのがあつたけれど、一寸器用で早すぎる。

電車が來てるのに、接吻してゐる長閑なものにも驚いたけれど、フランスの飯屋へ夕食でも食べに行かうものなら、あつちでも、こつちでも一口食べてはチュウと接吻し、一皿註文すると云つては首に手を巻いて頭を愛撫したり……私はなるべく見ないでゐようと熱心に心がけてゐてもついつとりと眺めてしまつてゐる。まして二人とも美しいと來たら、全く溜息ものだ。巴里ぐらゐ接吻の多い街はないだらう。私は倫敦にも行つたけれど、倫敦はその點は實にチツジョがある。巴里の公園は一人でブラブラしてゐると、こつちが上せあがつてしまふ程だ。睦言があつちもこつちも、——映畫活動へ行つても、眼の前にそんな組に來られてしまふと、何を見て歸つただか、銀幕なんかそつちのわけで、二人の唇を突きあはした黒い影ばかりが頭にこびりついて來る。呆つとしてしまつてゐる。何の事はない接吻を見に行つたやうなものだ。——私の友人にフランス女の可愛いアミがある。これが巴里で

はたつた一人私に接吻してくれる人なのだけれど、勿論頬べたへの友情に外ならない。——實に軽い音を立て、呆つとさせてしまふ術は手に入つたものだ。毒々しい紅がついてはやりきれないと思つて遠慮したのだけれど、コンパクトを開いて見ても別に紅い跡は残つてゐない。東洋の男が首つたけになるのも無理のない事だらう。

あゝ接吻の憂き情、ゆきたくもあはざる心さしよせ、うまし實を吸ふ。——私は小さい頃、こんな詩のやうなものをつくつた事があつたけれど、巴里のやうにかう接吻が亂賣されてゐては、食傷してひつくり返つて氣絶してしまひさうだ。

日本では、街の中で接吻でもしようものなら、一寸來いと云はれるけれど、こつちはお巡りさんも最敬禮をして通つて行く。お巡りさんと云へば、ブラブラ巡廻しながら八百屋の女中と接吻してゐるのだから、巴里もなかなか長閑ではある。(昭和七年三月)

巴里を歩く

巴里で二週間目です。私は三キロの伊太利米を食べ盡しました。實に馬鹿馬鹿しい悲しさだ。

朝々、大きなエナメル塗りの買物袋をさげて、三十文の赤くなつた鯛を二三尾買つて來ては焼いて食べてゐます。

耳飾りの大きい婆さんの女中が(アパルトの雇ひ女中)「お前は何時も足に板をぶらさげてゐるが病氣にならないか」と云ふ。で、私はジャジャと云ふ小犬と走り競べをしてみせました。女中は腹を叩いて「小さい床が走つてゐる」と云つて笑ひます。

いま巴里はミモザの花が盛り。街を歩いてゐると、花屋の車の上では黄金色の霧のやうな花が薫じてゐます。

あゝこゝが巴里なのか、何しろ高い腰かけで、足がブランコしてゐるやうでは、仕事にポットウする氣にもなれません。石炭屋を見つけて坐り心地のいゝ木箱をみつけようと、私は巴里に着くなり二里ばかりもぐるぐる歩いてみました。どこまで行つても立派な歩道ばかり。箱がみつからなくて道に

ばかり迷ひ、やけくそでメトロへ乗つて地上へ出てみましたら、これはまたおつそろしくにぎやかな
 プランタン(三越みたい)と云ふマガザンの前へ出てみました。私も驚いたけれど、街の人達も驚いて
 私を見てみました。木の塗り下駄に、紫のめいせんの羽織、新しいと云へば足袋と襦袢の襟だけで、
 大變粗末な風體です。

宮川美子さんとかが大變バタフライを宣傳したのでせう、私を見てバタフライだと云つて行く人も
 ありました。さて大變なバタフライではありません。

十二月のマガザンの賣出しと云へば、クリスマス玩具を當込んだ物が多い。メイド・イン・ジャパ
 ンのキューピーが五フラン均一。昔、私は此セルロイド工場で、日給六十五錢でキューピーの色塗りを
 した事があつたけれど、田舎生れのキューピーが、華の巴里に身を賣つて来ようとは思ひもよらない。
 夢中でマガザンの中を歩いてみますと、賣り子が「マドマゼール！」と呼びかけて來ます。おそろ
 しくなつて下駄で早足。この様なところを華の巴里とも云ふのでせう。何しろ陳列の中は裸のロウ人
 形が、桃色のコルセット一ツで並んでゐます。

今年は腰のくびれたオーヴァが流行らしく、無地よりも小さい緋地が小意氣だし、シャツポオは、
 ドン・キホーテの帽子のやうにピンとした小鳥の羽根が額の前にくつゝいてゐて、これだけは巴里女
 を優しく見せてゐます。

巴里の午後三時は東京の日暮れみたい。メトロを降りて何度も地圖を見返りながら、やつと私の街

のダンフェルまでたどりつきました。

○

さて、私のなつかしいダンフェルの街です。こゝは悪く云つて六分まで貧民階級です。野菜も肉も
 魚もパンも安い。一番びつくりした安いものはキヤフェだとおもひました。私は、朝口を磨いて顔を
 洗ふと、新聞を買ひに出かけたついでにキヤフェに寄ります。私の肩とすれすれなスタンドに凭たれ
 て、キヤフェの立ち呑み。ミルクなしで三十文、三ヶ月パン一ツつけて貰ふと六十文、日本金で四錢
 八厘あまり、パンとキヤフェで五錢で吞ませてくれる家が日本にもあるでせうか。巴里のキヤフェは
 朝から晩まで居ても嫌がられないし、私は當分椅子が買へるまでキヤフェが仕事場です。ところで文
 の事だけれど、本當はサンチームと云ふのでせう、私は穴があいてゐるので、つい何文と云つてしま
 ひます。とてもチヨウホウな小錢。

巴里は此小錢さへあれば、小さな義理はそれで済んでしまふ。風呂代が三フラン五十文(約二十八
 錢)、女中へのチップが五十文。キヤフェでキヤビネ(便所)を借りると女にチップが二十五文、大し
 たキヤフェだと二フラツくらゐ、めつたにキヤビネ拜借も出来たものではない。そこへ行くと男はチ
 ヨウホウです。辻々にハイカラな無料便所があつて、足がづらりと見えて面白い。——チップと云へ
 ば、シネマの案内人にも五十文はいります。初めて映畫を観に行つた時、チップをさいそくされまし

た。映畫と云へば巴里のは何と云つても肩が張りません。東京で觀た巴里の屋根の下と云ふ映畫に、鳥打帽子の男達が出て來ますが、あれは巴里のプロレタリア。河向うの品のいゝ街通りの男達は、山高帽子で歩いてゐます。

銀座の男には、まだ山高帽子なんて遠い事でせう。私も日本では、田舎の村長さんが東京へ來る時かぶるものだと思つてゐました。

巴里でうれいものは、畫商へ沈黙^{だま}つてはいつて行つて、沈黙つて、繪を見て來られる事です。ラブラードの南畫風な黒とホワイトと緑のうすあかり、一日立ちつくしてもみれんが湧きます。海に蝶蝶が飛んでデイフイの繪も好きです。コロはもう論外だ、これは神品の中に數へませう。日本の繪描きに恨みはないけれど、何と淺い繪の多かつた事だらう。巴里の畫商の持つてゐる繪は皆落ちついてゐる。今年にはよくないと云はれてゐるサロンの繪でさへ落ちついたものばかりでした。古典へまた逆もどりのかも知れませんが。日本の繪描きも澤山入選してゐました。こんなところで見ると日本人の繪はなつかしい限りです。木下孝則とか云ふ人の奥さんの繪は一すいゝものでした。若いひとなのか年をとつたひとなのか知りませんが、とにかく女であれだけの繪組と、水々したすなほさは嬉しいものでした。——ヴァン・ドンゲンの繪はおつそろしくもつ、たいぶつてゐて、革命でも來たらあんなのから燃してやるといゝと思つたくらゐる、サロンの出口には藤田の畫集を賣つてゐました。今は不遇でゐられるらしいけれど、あのひとを不遇にした半分は日本人にも罪があるでせう。廣い巴里でともか

くにも日本の藤田として名をあげてゐるひとに、日本人達は少々冷たすぎると思ひます。ところで、ロシアも愕いたけれど、もひとつ巴里にも愕いてしまひました。金がなくてカンジンなところを見られないのかも知れませんが、コンコルドの廣場が何だつて、シヤンゼリゼーもノートルダムも巴里はいゝ色に古びてゐますけれど、地震があつたらゆかいでせう。——さて明日から食べることに。伊太利米も無くなつて六十文の長いパンでも齧つてゐるでせう。

あゝ私の國はいま戦争の最中だ……。腰の痛い寢臺にひつくりかへつて、私は日本の唄をうたつてみます。此間も街を歩いてゐたら、支那の青年が、私を支那婦人とでも思つたのでせう。「國難通告」と書いた傳單をくれました。誰でもさうでせうが、國を遠く去つてみると、變に愛國心が湧いて來るものです。何とした事でせうか。巴里では走つて會ひに來てくれる人もない。誰にも會はないで、毎日街を歩いてゐるせゐか、ひどく言葉をつかふ事がおつくふになつてしまひました。——巴里では何千フランでなければやつて行けぬと云つてくれた人もあつたけれど、今の私の豫算は六百フラン、米が買へなかつたら、パンにうまいバターを塗つて食べます。部屋代は、寢臺から腰の高い椅子二ツ、外に一切ついて三百フラン(約二十四圓)。馴れないのだから仕方もないでせう。あと三百フランが生活費。巴里の日本人が知つたら笑ふかも知れない。だけど、借り歩いてさもしい思ひをするより至極呑氣です。これで國の肉親達の心配がなかつたら、少しばかりは仕事もやしてみたい。——さて巴里の冬を越しましたら、私はもつと遠くに歩いて行くつもりでゐます。(昭和七年三月)

佛蘭西の田舎

1 信

巴里では毎日無爲な日の連続でムいました。アリアンセの夜學がひとり、ついたならば、巴里を去つて一寸田舎へ行くのも悪くはないと常々心の用意にかゝつてゐまして、随分空想をたくましくしてゐました。

佛蘭西と云ふところは、御承知だとおもひますけれど、世界中で一番汽車賃の高い國で、ほんの二三圓で行けるところも、その二倍はかゝりますので、全く道の肥料になるやうな氣がして仕方がありません。——けれど、汽車賃の不平は別として、白い房のやうなマロニエの花が咲き始め、夏近い大きな雲が無數に林立した可愛い朱色の煙突の上を流れ出して來ますと、誰だつて野や山を見たくなつて來ますでせう。

ところで私の語學の事でムいますが、せいらい吞氣者のところへ、少しばかりアリアンセの夜學の

力量をつけましたせみか、生兵法ながら、片言も結構通じるやうになりました、美しい山野の村落で、取つておきの片言も使つてみたく……これで、仲々野心のある旅行家のつもりでをります。——初め、友人に教はつて、地圖の上に星をつけましたのは、モンモランシイと云ふ山の中の町でムいます。地圖の上で見ると大變山中らしくて、案内書には桃果の名所と出てをりました。北の停車場から、約一時間位で、東京で云ひませば埼玉あたり邊へ行く位の道程でもありません。——それはもう並々ならぬ苦心を濟ましてやつと列車に乗りましたのでムいますが、此日が大變な雨の日で、窓から見える風景は、ひどく東洋風でムいました。

あなたはラプラードの風景を御記憶でムいますか、白と、エメラルドグリーンと、黒の色調を持つたラプラードの繪のやうな、あんな風景の中を、雨に濡れた北方行の汽車は、仲々此東洋の女を愉しませてくれたものです。——さてかうして書いて參りますと、如何にも長閑さうでムいますが、私は地圖と時間表は片時も離さず、まるで中腰の状態で驛々の名前に注意するのでムいました。すると、私の前にゐた繪描き風の一老人が、全く落ちつきを失つてゐる私を見兼ねたのであります。いつたい何處で降りるのよと尋ねてくれました。

「私、モンモランシイで降りますのですが、初めての土地で判りません」

するとその老人は、此汽車はモンモランシイにはまはらないと云ふのです。

「此次のアンギャンと云ふ驛で乗り換へるといふ」

で、もうお話にならぬ程悲観してしまつて、「ウイ・ムツシュウ！」の連發です。アンギャンと云ふ驛は、待合所に洋燈のついてゐようと云ふ古風さで、降りた客と云へば二三人きりです。砂地のホームの上に霧雨が降つてゐますし、綠樹はこゝまで來ますと、つやつや光り過ぎてゐて眼がまぶしい程でした。

雨の中にうろろしてゐる私を見て肥つた驛長が「マドマゼール！」と呼びかけてくれたのですけれど、何も彼も嫌になつてしまつて、掘立小屋のやうなホームの待合所に私は腰を据ゑてしまひました。隣りに腰かけてゐた百姓の夫婦者は、まるで家鴨のやう。

2 信

今年は、こちら雨の多い年だと云ふ事でムいますが、日本の此頃は、定めし天氣晴朗な日が続いてゐるのでムいませう。飛んだ失敗をしたアンギャンの驛では、親切な驛長氏から、モンモランシイへのコースを聞きました。驛から十町ばかりも畑道を行くと、モンモランシイ行の乗合自動車があると云ふ事でありました。雨の中を重いスーツケースをさげていつとき畑道を歩いて行つたのですけれど、だんだん雨が強くなりました。丁度その時、汽車道に近いところに、唐子のやうな赤い看板を出した煙草屋兼キャフエがありましたので、暫時そこで休むことにしました。二人ばかり、強さうな馬方のやうな男が赤葡萄を呑んでゐました。めつたに見たこともない黄ろい人種の私を見て不思議さう

にしてゐます。熱いキャフエをすゝつて、荷物を頼んで貰つたのですけれど、まあ、何と運のいゝことに、馬方だと思つたのは、タクシ一の運轉手だつたのです。アンギャン驛から約十五分でモンモランシイの丘の上のホテルへ着きました。——全く田舎ホテルで、日本で云へば、御泊り宿と云つた感じです。バビヨン・ド・フロールと云ふ大したホテル名ですけど、こゝも洋燈のはかなさでありました。

三食で二十法あまりでムいましたが、こゝのお神さんは朱いジャケットのよく似合ふ働き者で、料理はまるで自分等の家庭で食べるやうな美味しいものでした。雨の叩きつける音を聞きながら、洋燈で食事を執ると云ふ事は、何か物語りめいてゐて、バルザックの小説の中にもありさうな風趣です。——ホテル・バビヨン・ド・フロールは丘の上の一軒屋みたいところでムいますが、夜更けまでも近在の女房連が、店のスタンドに凭れてキャフエを呑みながら世間話をしてゐました。

裏の窓を明けると針縦のたぐひでせうか鬱蒼と山いつばいに繁つてゐて、夜明けなどは閑古鳥の啼く聲さへ聞えて來ました。此モンモランシイでは全く雨に降りこめられてばかりゐて、まるで私は葡萄酒を呑みに來たやうな氣がしたものです。それでも、宿の好意で雨傘を借りて私は森の奥深く這入つて見ました。黒い樹間には白蠟のやうな李の花が霰のやうに咲いてゐて雨の山間には花の匂ひがいつぱい溢れ、何か私の心の底にまで沁みる程、此花の空氣を吸ひ込みました。その山間の森の中には

城址らしい石崖があつて、日本風にお濠がその城址を圍んでゐました。

泣き濡れて、秋の女よ

わが幻のなかに去る、

泣き濡れた秋の女を

時雨だと私は思ふ、

一しきりわたしを泣かせ

またなぐさめて秋の女よ、

凄まじく枯れた古城の道を

わが心だとわたしは思ふ。

あなたのお好きな佐藤春夫詩集の中に、たしか此様な一節がありましたけれど、古城を圍つた水のない濠端に立つて、雨の中の閑古鳥の聲を聞いてゐますと、信州にでもゐるやうな現な氣持になつてしまひます。此詩ほど、此風景程、私を慰さめ甘くしてくれたものはありませんでした。

3 信

88 又巴里へ歸つて参りました。歸つて來れば來るで、壁の冷たさが私の神経の種になります。あなたの送つて下さいました、メンデルの雜種植物の研究は大變ありがたいものでゐました。知らない土

地へ來ると、知らない雜草雜木に心惹かされてしまひます。——巴里には二日ばかり落ちついて、此度はまた、リヨンの停車場からフォンテンブローの森へ参りました。こゝへは夜分おそく着きました。信用あるホテルと云ふので、電車の女車掌が氣を配つてくれたのでせう、ホテル・サヴォイと云ふ、さるで御殿のやうな宿に泊りました。一生のうち再びめぐりあはせぬであらうやうな豪勢振りで、仲美しいホテルです。——その夜などは、眠る事も出來ず、ヴェランダに長いソファを持ち出して涼みながら夜更けの森に圍まれた町を眺めてゐました。

夜ナイト驚スリルに閑古鳥がはげしく啼いてゐて、まるで深い井戸の中にあるやうでゐます。こゝは昔、フォンテンブロー派の繪畫や文學の發祥地で、ジャン・コクトオなども、此森を泉の森とか云つてゐたと云ふ位だと聞きました。

朝も私は一番に飛び起きて湯をつかひ、日本に似た錢苔の多い森中を、樹の葉や草を摘んで歩きましたけれど、森の中の自動車道はまるで一本の大河のやうに涼しく青く素敵でした。樅、山毛櫸、針樅、樺、栗の種類が多く、歩いてゐますと、時々コロコロの繪に見る風景に驚かされる事も度々です。ホテルの晝食もおいしくて、山のホテルにしては實に素敵です。——奈良の若草山のやうなスロープが庭になつてゐました。廣いホールの食堂を燕のやうなコスチュウムのガルソンが、セルヴィスしてゐます。私が参りました時季は、まだ夏の休みには間があつたので、英國の老夫婦とか、アメリカの

女達が二三人きりできて、ひどく閑散なものでありました。料理は最後のコースまで食べ終り、まことに、初めての遊山気分です。

二日目、私はバルビゾンへ行つてみた、馬車で約四里の山道を、バルビゾンへ参りました。

此街道は、丁度奈良の奥にも匹敵する程です。ゆさゆさと風に鳴る樹間を、馬車はかなりの速度で走つて行きます。妙に心が淡くなつてしまつて、とても旅人以上の氣の弱さです。大名笹のやうになやかな若木の並木の下を行く時は、空ばかり見てをりましたが、まるで、自分が瀬を行く鮎のやうな氣持さへして参ります。魚の心に、魚の姿になつて冷たい瀬を泳いだら楽しいだらうと、そのやうな空想もしてみたりしました。

4. 信

バルビゾンの二日目です。送りましたこちらからの數々の繪葉書お受取りでうれませう。私のホテルは、シャルメツテと云ふ古い宿屋で、鹿の家と云ふ意味ださうでうれいます。バルビゾンは帯のやうに細長い町並で、此小村にホテルが四五軒もひさしをつらねてありました。こゝの女主人は、着物を着て行きました私を、まるでお伽噺の中から來た娘のやうに考へたものか、ひどく丁寧にもてなしてくれます。食堂にはミレーの繪が私の眼をうばひました。

「あの繪はミレーの繪でせう」とたづねますと、給仕女は呆れた顔をして、「お前はミレーの家を見に來たのぢやないか」と云ひます。

こゝも有名なバルビゾン派の發祥地で、バルビゾン派と云ふ一つの流派が生れたところだときましました、その主なものに、ジャン・フランソア・ミレーだの、テオドル・ルツソーだのの名前がつかねてあります。全く嬉しくなつてしまつて、私は、日暮れの町をミレーのアトリエへ参りました。ホテル・シャルメツテの筋向うが、ミレーのアトリエで、仲々古風なかまへです。

明るいのですが、八時を過ぎてみましたか、扉が閉つてありましたので、ミレーのアトリエに沿つて小道を曲り、廣い野道を歩いて見ました。

聲のいゝ小鳥が肩ぢかく降りて鳴きます。

きつと日暮れが長いので、小鳥達もなかなか眠れないのでせう。此村の家々は、ほとんど農業をする者ばかりで、畑と云ふ畑には麥のやうなのが青々と伸びてゐて、小道の家沿ひにはもつれたやうな若い樹が繁つてゐました。そんな淋しい村でありながら、所々扉を固く閉ざした酒場があつて、蛙（グリーイユ）と云ふ家などは、ランプの下に酌婦のやうな女が、水つばい眠たげな聲で唄をうたつたりしてゐました。

いづれの國も同じやうに、村の男が首にハンカチを巻いて、ホテルの酒場にたむろをしに來ます。私の行きました時季は、月夜のせゐるか、庭の食卓には、若い戀人同志や家族づれが唇をつけあつては

楽しく食事をしてみました。此様に静かな氣持は、再びめぐりあつて来るものではありません。古びたピアノには蠟燭がともり、眞黄なカーテンの出窓には色々な花を植え、白い食卓の上、紅色のスタンドも、ぢき過ぎ去つてしまふ痛い思ひ出になりませう。

5 信

朝の窓をいつぱい開けますと、向うの雜貨屋の背戸から、ねむの桃色の花が見えました。色彩が非常に鮮かです。——凸凹の多い割栗石の村道を、白い煙をたて、自動車を通ります。

バルビゾンよ！

バルビゾンの村道よ！

少し許り甘くなり過ぎてゐますが、此甘さは、悔いなく費ひ果したい。お元氣でいらつしやいますか、田舎の空氣を澤山吸ひましたせゐるか、蒼ざめてゐた私の頬もあからんで、心まで落ちついて參りました。倫敦では自殺の事を考へてゐた私もこの新鮮な風景を見ては、そんな考へも犬に食はしてしまへです。

この宿は一番料理の美味い宿でした。鶏の野菜入りのポタージュなんか、頬がふるふるやうです。朝は近所のキヤフェで、キヤフェの立ち呑みです。

「日本と云ふ國は、爪が一尺程長いさうだつてね」

こんな事しか日本について知識のない老人もゐました。

私の袖を振つて、空を走るのがと笑はせたりもします。——ミレーのアトリエには、感心してしまひました。——女學生の部屋にはきまつてぶらさがつてゐる、あの晩鐘や落穂ひろひも、このミレーの晩年の貧しかつた話など聞きますと、そこいら邊のプロ繪描きの比どころでないと思ひました。

ミレーの家は小作人らしくて、相當貧しいものです。アトリエの土間の入口に、一人寝のベッドがありました。——ミレーは雨に濡れながら繪を描いてゐて風邪になり、つひに此ベッドで死んだと云ふ事です。部屋の中には埃つばい大きな鏡が一つ、土の人形が七ッ八ッ臺の上にはふり出してあつて、藥製の椅子はミレーの尻が突き抜けたかのやうにボロボロのものでありました。

今の、ミレーの子孫は、ミレーの偽物まで造つて賣ると云ふ話です。——雜草の繁つた庭も如何にもミレーの好みらしく、只一つの長い白椅子が眼につきました。頬を猿のやうに紅く塗つた案内女は、繪を私に賣りつけようと思つたのか、ミレーの友人ばかりの繪の集つてゐるアトリエにも案内してくれたのですが、惹かれる何物もありませんでした。それよりも、偶然にミレーの家を眺めて、ミレーの生活を知つたと云ふ事は、私には何よりも大きな勉強だと思ひます。

テオドル・ルツソーのアトリエにも參りましたが、私の好きな繪描きではありません。此人は小地主で、家のかまへも、仲々大きく、人工的な花園には、莖のやうなむらさき色の花がさかりでした。ミレーとは只ならない友達でありましたのでせう、墓にも一緒に埋つてゐると云ふ事です。

太い梁の出た中二階のルツソーのアトリエには、晩年の描きかけの繪がそのままになつてゐて、やはり室内は素朴な調度でありました。ミレーの繪は見てゐて心が澄んで來ます。ルツソーのは少しばかり紳士的で、さう好きではないと思ひました。

フォンテンブローに二日、バルビゾンに三日、實に風車のやうなあわたゞしい旅でありましたけれど、巴里のやうな都會を知つた事よりも、かうして田舎を知つた事の方が、私にはどれ程得る處があつたかも知れません。

歸途は船のコースを選びたいと存じます。マルセイユの海邊の町にも、少し住んでみたい計畫でもをります。カンヌや、ニースも見物していらつしやいと、おつしやつて下さいましたけれど、今の私には、そのやうなところには少しも魅力がないのです。動かない風景、動かない人の心に飢ゑてゐますので、當分、片田舎ばかりを、さがして歩いてみたいなど考へてをります。草の葉の蒐集は、かなり相當なものになりました。いづれ海邊の町からおたよりさしあげようと思つてをります。

(昭和七年五月)

下駄で歩いた巴里

1

さて巴里の第一頁だけれど、——初めの一週間はめつちやくちやに眠つてしまひました。第一巴里だなんて、どんなにカラリとした街だらうとそんな風に空想して來たのですけれど、夜明けだか、夕暮れだか、すこしも見當がつかない程、冬の巴里は乳色にたそがれてゐて眠るに適してゐるのです。

「巴里に眠りに來たのだらう」と云ふ人もあつたらしいのですが、兎に角金なし、周章てゝは事を仕損じます。私は眠つたふりをして本當は巴里での生活をあれこれ考へてゐました。

けれど、あまり眠り続けると、頭が非常に不健康になる。「いくたびか死なむとしては死なざりし、わが來しかたのをかしく悲し」啄木の歌のせるでもないでせうが、いざ日本を遠く離れてみると、妙に涙つぽくもなつて來ます。私の下宿は鳩と猫の巢だと説明したら、妙にロマンチックに聞えるでせうけれど、巴里の猫程氣味の悪いものはありません。毛糸玉のやうにふくれあがつてゐて、夜ふけて歸つて來ますと、暗がりの天井から背中へおつこちて來ます。此下宿屋には野良猫が七匹も巢をくつ

てゐるし、犬が二匹もゐます。

鳩は、これは食用にするのでせう。私の窓下の庭に、金網の中に鳩が飼はれてゐて、朝になると、クルクル……優しい聲で啼いてゐます。

凸型、これが私の部屋の姿。おそろしくやゝこしくて、少し稼いだら四角な部屋へ越したいのですが春までは動けないでせう。

初め部屋を見て、妙に呆んやりした顔をしてゐましたら、「三百五十フラン」——（約三十二圓）だとお神さんが云つてゐます。「高價いわねえ」と云ふフランス語が見當らないので、案内の方と顔をしかめてみせたら、三百フランにまけてくれました。何しろ自炊が出来るやうに半坪ばかりの臺所もあります。初め、私はこの臺所を電話室と間違へてしまつて、巴里はハイカラなところだと感心して扉を開けましたら、大きなガス臺があり、三段ばかり棚が吊つてありました。三百フランは（約二十四圓）勿論家具つきですが、おつそろしくチャチなもので、洋服ダンスは今にもひつくりかへりさうに木口がふんぞりかへつてゐるし、二ツある椅子と來たら背が高く、足がどうしてもぶらんこしてしまひます。だが、時々笑ひころげるに、椅子。此椅子から楽しい仕事が出来ればなんぞ野心を持たぬ事。——笑ひころげて笑ひころげて死んでしまふ時は、此椅子にかぎります。外に樂屋裏から引っぱり出したかの様なガタガタの圓テーブル、これは少し猫背で、墜落する姿で、書き物しなければなりません。さて、一番私の神経を焦々させるものは七面に張つてある壁紙。まるで安宿みたいに紅色

の花模様で、何かあわたしくなやましい。木屑の浮いた日本の優しい壁の色こそなつかしくなつてきます。朝、眼を覺ましますと、紅色の洪水、眼をとちると瞼の裏まで紅くそまる。こゝで病氣にでもなつて文無しになつたら悲惨でせう。

巴里へ來て二週間目、私はめつちやくちやに街を歩きました。街を歩きながら、街を當度なく歩いている人間の不幸さを知りました。

2

私の下宿は、ダンフェル街のブウラアド十番地。一寸廣場へ出ると、ライオンの像があります。寢そべつてゐるかたちは三越のと同じ。此街は小石川邊のごみごみしたところのやうに物が安くて、あまりつんとした方達はお住ひにならない。つんとした方達は皆セーヌの河むかう。だから、此ダンフェルは下町と云つた方が當つてゐるかも知れません。物が安いと云へば、パンがうまくて安い。こつちのパンは薪ざつぼうみたいに長くて、これを齧りながら歩けます。これは至極楽しい。巴里の街は、物を食べながら歩けるのです。私は毎朝六十文（四錢八厘）ばかりの長細いパンを買つて來て食べてゐます。巴里では米も食べます。伊太利米のばさばさしたのだけれど、御飯を食べると澤庵を空想するので止めてしまひました。巴里の食料品はパンの外は何だかみんな大味で、魚は日本にかなはない。

買物に行くのに、塗下駄でボクボク歩きますので、皆もう私を知つてゐてくれます。伊太利人の食料品屋では、あまり私がマカロニを買ひに行くので、「お前の舌は伊太利がよく判る」そんな風なおせじさへ云つてくれます。伊太利と云へば伊太利語は非常に日本語に似て母語が多いと思ひました。初夏には伊太利へ行きたい。お天氣が少しばかり良くなると、烏打帽子の風琴引きがよくやつて來ます、これだけは最初の巴里らしい氣持が湧いて風琴引きが來ますと、皆窓から覗きます。一ツの窓が一軒の所帯だから窓から違つた人種が覗いてゐる時があつて、面白い風景です。

私のホテルでさへ三軒に分れてゐて、五階もある澤山の窓から人が覗くと、蜂がぶんぶん云つてゐるやう。私の窓の眞向ひに美しい娘がゐます。アルルの女だと云ふ事ですけれど、非常に胸が出張つてゐてとてもいゝ。この娘は夜更けていつも唄をうたひながら歸つて來ます。

共同水道でかちあふと、ニツと白い齒を見せて笑ふ。此女はマガザンの賣子に通つてゐると云ふ事でしたが、歸りが夜明けになる事があつたりして、おそろしく長い店開きをやつてゐるマガザンだと思ひました。

私の下宿から一寸電車道へ出ますと、ユニブライと云ふマガザンがあります。此マガザンは、十フラン以上のものはない均一店ですが大變繁昌してゐます。一階の食料品賣場でやつてゐる朝のキヤフエが、ブドウ入のパン付五十文(四錢)、晝間の食事がビール一杯ついて三フラン五十文(二十五錢)、皿

の上を見ますと、サラダやハムやサーヂンや玉子まで乗つかつてゐて、五寸ばかりのパンがついてゐます。

一度その晝食と云ふのが食べたいのですが、そのうち字引を引つぱつて食べる事にしませう。此間もアイスクリームが食べたたくて仕様がなかつた。「ドンネモア・アイスクリーム」なんて云つたところで通じやしない。一晚かゝつて字引を引くと、何と優しい言葉で「グラス」と出てゐました。「ドンネモア・グラス」でいゝわけです。

ダンフェルの街からモンパルナスまでは五六丁、私はよく歩いて行きます。

もうメトロにも自動車にも乗らないで、やけに歩く事。歩いてゐる事が、いまの私に一番幸福らしい。歩いてゐるより外に落ちつきやうもない巴里の生活です。それかと云つて巴里へ來て郊外にもつともらしく住ふ氣持にもなれません。あゝだけど、實さい窓のみはらしが利かないので灯のない行燈に首をつゝこんでゐるやうな部屋のあかりです。

先日、オランピヤと云ふ映畫館へ這入つてみました。「無名の音楽家」とか云ふ映畫をやつてゐましたが、小味ないゝもの。映畫そのものはチャチだけれど唄がいゝ。巴里の屋根の下式に軽くはゆかないけれど、巴里の街ではもう風琴引きが唄つて歩いてゐます。

映畫の合間にヴァリエテがあつた。日本で見たレヴューより本場だけに氣が利いてゐます。日本では足を出す踊りが流行つてゐましたが、巴里の踊りは、上半身だけむき出しで、スカートだの、ずぼんだの、コスチュームが多い。

初めは一人のアパツシユダンスで、黒縞子のずぼんに紅色の三角布で頭を巻いて乳房の上は銀色のバンドで一才隠してありました。

二度目は扇子の舞ひとかで、朝顔型の白いスカートに、五段ぐらゐるも朱色のふちとりがしてあつて、乳房の上はやはり白い布でほんの一寸巻くくらゐ。扇子は、これは踊り子の背丈よりも大きく、白い羽根で出来てゐるので、鶴が舞つてゐるかのやうに美しく、七人の踊り子の腰の横線がそろつてゐるとも華麗でした。電氣の照明ひとつで、葉鶏頭のやうに朱く染つたり、煙のやうに紫色になつたり、バックが黒つぼいせるか、少しも眼が疲れなくていゝ氣持でした。

第三番目の汽車と云ふのは、これは十五人ばかりの踊り子が黒いバックの眞中から出て來ます。トンネルから出て來るところなのでせう。だぶだぶの青いずぼんで、シユツシユツと云ひながら出て來ます。第四番目は蜂、黒い胴に茶つぼい紅の腰布、バンドは黄色、これだけは美しいむき出しの脚が出てゐました。

蜂の踊り子が散つて樂屋へ行つてしまふと、すぐ白い幕が降りて、樂屋の踊り子の姿がスクリーンに寫ります。

「あら！ 私のズロース誰がもつて行つたア？」

「嫌だなア、ずぼんがほころびてる」

「あたいのネクタイした奴ないか」

トキキイだ。皆蜂の衣物をぬぐと、ワイシャツを着て、ずぼんをはいて、ネクタイをつけて、背廣に中折帽子、立派な紳士と、立派な淑女が出來上る。淑女は桃色の長いスカートきりで小さい帽子をチヨコンと乗つけて、幕がするする上りかけると、「まだまだ、アタイのお乳かくすのみつからないよ」観客が笑つてゐる内に、もう舞臺に明るい灯がついて、スクリーンで見た紳士淑女がすまして舞臺へ出て來ます。

何の事はない、子供の頃見た連鎖劇。仲々思ひつきないゝもので、大勢の唄ふコーラスが澄んでとてもよかつた。それに體のいゝと云ふ事が何よりも得でせう。私は眼がくらくらとしてのぼせてしまひました。

どうして私は巴里に來たのだらう。これやお嬢さんか學生かそんなものが來るところぢやないかしら、巴里のどの人種が、佛蘭西を支へてゐるのでせう。誰かは少數の知識階級だと云つた。フン愕いた話だ。佛蘭西を支へてゐるのは百姓とエトランゼでせう。

巴里へ来てから日本が妙に健康に見えます。何故でせう？ 日本では一寸雨が降ると道が悪いのな
んのと、變にグチをならべてみましたけれど、かう歩道が固くカッパと身にこたへては一里も歩け
ばくたびれてしまいます。「さう巴里を悪く云ふものではない」さう云つて叱る巴里の日本人もゐます
けれど、まるで自分を佛蘭西人だとも思つてゐるのでせう。

ところで女のお化粧ですが、こつちのお婆さんを一人日本へ連れて行つて銀座を歩かせたら、皆お
ぼけだと云つて笑ふでせう。頬紅が猿のやうで、口唇は朱色、眼のぐるりをアイシヤアドで引いて、
何の事はない油繪の道中。たゞしどこの國も若い女は美しいものです。お化粧のめだたない、働いて
ゐる女はとても水々しくていゝと思ひました。巴里の働いてゐる女にどれだけの自覺があるのか、私
はまだ日が浅くて判らないけれど、モンマルトルの下の新宿のやうな街を歩いてゐた時、夜店を出し
てゐる若い美しい女のひとを見ました。あんな可愛い女ならば、一寸飾つてキヤフエで男を探せばよ
いのにと思ふくらゐ、一寸類なく美しい娘もゐました。

辻々の花屋には、カーネーション、すみれ、菊、ミモザなどがとてもいま盛りです。土が見られな
いせゐか、パツと咲き出た花屋の色を見ると、せいせいとしていゝ氣持になります。

私は街を歩いても古い建築物を見るのが楽しみです。苔むしたやうな古風な街角の水道の栓一ツに
も何か美しく刻んであつたりします。冬の巴里も、住んでみればなつかしくなつてくるでせう。春の

木の芽のふき出る巴里もまたいゝでせうし、巴里が荒んでみえるのは夜が長いせゐかも知れません。

巴里は繪描きの来る街です。文學者が来るにしても、言葉を本當に持たなければすぐ淋しくなつて
来るでせう。私の最初の友人デイモンドと云ふ巴里の女は「貴女が段々好きになつて来て困る。言葉
を早く覚えてくれ」仲々くすぐつたい事を云ひます。

こんな優しい女が居るのだもの、巴里は優しくなつかしいところ。デイモンドは「そのうちエツフ
エル塔へも連れて行つてやる」と云ひます。

兎に角、パンが六十文、生鱈が三尾六十文、これだけで巴里でやつて行かうと云ふのですから仲々
大變なことです。(昭和七年三月)

ひとり旅の記

巴里を引き上げて、倫敦に移つて来ました。倫敦は静かな街です。如何にも王様のいらつしやる街です。——それよりも、佛蘭西のダンケルクの港街から夜中に船出した、夜の海峽風景は素敵でした。倫敦では仕事がフンダンに出来さうな気がします。巴里では散々な氣持でした。だが、オペラや、シネマや、音樂會には行けるだけ行つて楽しみました。

此間フランス・カルコのラ・リュウと云ふ本を送りましたが、著きましたでせうか。貴女は長い間佛蘭西語をやつていらつしやいましたが、この LA RUE はたしかに面白い本です。作者はいま賣出しの中年のひとですけれど、技巧は仲々うまいもので字引にないやうなプロレタリアの方言が澤山つかつてあります。

此作家には巴里に歸つてから、是非とも會つて歸りたいと思つてゐます。

ところで、倫敦のことですけれど、私の宿はケンシントンと云ふところにあつて、大公園のハイドパークが近いのです。ケンシントン區でも、一番肩の張らない勤人の多い町で、ホウランドロード町のセシルハウスと云ふのに下宿をしました。こゝの女主人はまだミスなのですけれど、年はもう五十位でもあるでせうか。妹らしい四十位の婦人とたつた二人住居で、二人とも猫みたいに黙つた人です。

一週間二パウンド半(約二十五圓)、朝食、晝食、夕食、それに、夕方四時頃には茶をつけてくれます。でも一週間約二十五圓あまりでは、私の身分としてやりきれないので、一週間も過ぎましたら部屋を越すつもりでをります。此部屋は古風な大きな部屋で、生れて初めて、フカフカした夢のやうな寢臺のあることを知りました。——倫敦がしのぎにくかつたら、船でナポリか、ジブラルタルか、モロッコへ行きたいと思つてゐますが、何にしても私はお金が欲しくてなりません。

全く、此様な甘い言葉なんぞ嫌なんですけれど、當分貴女にもお會ひ出来ないでせう。

荷物は何も彼も送り返して、身輕にはなりました。何しろ着のみ着のまゝですから、小さいスーツケースの中には、巴里の粕を捨てかねて、皿を一枚、すきやき鍋、フォークに匙、飯釜、茶碗、こんなものを入れてゐるのです。だからまだまだ元氣ですよ。何くそ！ と力んでもゐますが、たまには泪がいつばいにもなる。——ところで私は、死ねる覺悟も出来たのですけれど、此手紙はいつたい何日頃日本へ着くのでせう。長い時間に晒されて、日本へはるばる着くのですから、いゝかげん頼りない

話ですね。

母にも會ひたいのですけれど、それももう遠い話。これから何日間私の體が生きてゐるか、兎に角もつと洋燈を明るくして、大變心に適つた小説を一篇かきあげたい氣持でをります。

まだ二日目ですが、倫敦は落着ける様な氣がします。巴里の様に植民地的ではありません。

巴里も、もう海の向うに過ぎてしまひました。倫敦で一番最後の日が來たら、長い日記でも送りませう。ところで距離がこんなに遠くなると、人間の記憶心と言ふ奴も、一寸當にならなくなりませう。何だか何も彼も、ボヤボヤとなりさうなのです。此氣持なんですよ。外國に居る奴を馬鹿にしてしまふのは、厭に陽が當つた蜜柑のやうに、日本はサンゼンと輝いて見えるのですが、その島の上の知人の顔が皆生々と想ひ出されます。

外國なんて、東洋のブツダに言はしむればさあ何と言ふでせうか、ブツダは笑つて眼をとぢるであります。——ところで後四五日もすれば、いよいよ一文なし。だけど金がないからつて死んでしまふやうな、ケチな事はしない積りです。倫敦は毎日深い霧です。

○

あゝ本當はいゝ仕事をしたい。一月二十八日の日記をおめにかけてませう。——すつかり慢性の孤獨

病だ。戸外に出るのが嫌ひ、人に會ふのが嫌ひ、——だが此宿の食事ときたらどうだらう、朝も晝も夜も、卵ばかりだ。まるで私の胃は卵を入れる袋だ。たまに十三時の時計も打つものだと、東洋の文豪佐藤春夫さんが言つてゐる。脂肪で押さうか力で抜かうかなんぞと、山師の考へるやうな事なんか考へぬ方がよい。纏て二月もまちかだ。夕飯前に、霧の中を金魚のやうにフカフカ歩いてポストへ行く。あまり霧が深いので、集配人が此ポストを忘れて行きはしないだらうか、とても寒い夕方、誰かが突き當つて行つた。「アイアムソーリイ」——元氣で生きたいな。——全くいゝ仕事をしたい。忙がしい旅路にありながら、あれもこれも駈けりまはり、國の暮しむきから私の事まで、こんなにひそひそして來ますとぐちの一口も言ひたくありません。私が一番怖れてゐますのは、折角小説を書きたいと思つた氣持も、すぐ中腰になつて目先の仕事でアラえつさつさなのですからね。今日は少しばかり仕事にかゝりました。

それは「日月の跡」と云つた風な題です。心が仄々するやうなものを書きたい。——夕方の賑やかな登路で、私は十五錢もする桃の枝を見てゐた。此街の名を何と呼ぶのか、こつちへ來ると、山のやうに日本が書きたい。此手紙と一緒にボンナアルの畫集を送ります。倫敦の古本屋で買ひました。繪はいゝ。音樂だつていゝですね。街の看板の字はよく讀めます。英語は女學生みたいで大變よろし、だけど發音は大變むづかしくて、仲々あなどれません。

私はこゝへ來て、又チエホフとバルザックを讀了しました。アンドレ・ジツドも讀みたいのですが、

まだとりつきが悪い。勿論日本譯ですが日本で讀む氣持と少し違つて來ます。譯した人が日本の風景の様に描寫してゐるところが、とても多い事を發見しました。あゝ私も今年はがんばりたい。いゝ仕事の出来る時ではあるのです。日本は、日本の此頃はどうでせうか。また變なイヅムが流行ですか？日本の流行のうつり變りは、全く笹の葉の露が風に吹かれてゐる感じですね。

○

黒い龍と云ふ名を、度々倫敦の新聞で見るのですけれど、あれはいつたい何なのでせう。倫敦の平和論者の一部には大ヤバン國日本とやつゝけてゐますが、日支戦争の折から井上さんの暗殺は、益々日本を大ヤバン國にしたらしい。厭なことです。理窟が通らないとなると、政治家も人民も劍術をなからはなければならぬですね。

十三日の日曜日には、トラファルガル廣場で、支那コミンタンのデモンストレーションがあります。勿論日支問題の事を演説するのでせう。私は聞きに行くつもりです。——藤森成吉氏御夫妻に先日會ひました。アメリカへ渡られると云ふ事でしたが、一寸ばかりうらやましかつた。大變眞面目な人でした。日本へ澤山仕事を持つて歸られるといふと思ひます。大陸へ來て感じた事は至つて流行がにぶい事です。文學においてはなほさら、日本のやうに、あゝせつかちに、何々イヅムはおこらない。それだけに藝術家達も何かのんびりしてゐます。

今は朝です。とても霧が深い。こちらの霧には色がついてゐるやうに思ひます。窓の下には、ゆつくりした速度で二階建の赤い乗合自動車走つてゐます。

こちらへ來て煙草は止めてしまひました。熱い風呂にも這入りたい。一週間も湯に這入らない事があります。何しろ七八十錢もするのだから、かう圓がさがつては、私のやうに自力で來てゐる者には手も足も出ません。母へは元氣でゐるらしいと、おついでの方に手紙を出して下さい。井伏さん元氣でせうか、倫敦の日本宿に藤森さんを訪ねて行つた時、應接室に古い文藝春秋がありました。その中に、シグレ島何とかいふ井伏さんの小説が載つてゐました。なつかしかつた。ハガキでも出してよろしく云つて下さい。

私もいゝ仕事をしませう。きつと元氣で生きてゐます。心配なされないやうに。手紙も私の返事でありましたらいいですね。四十日も喰ひ違つたお返事よりも、貴女の近況でも知らせて下さい——實際、これから、ジブラルタルにでも行かうなどと、鞆を整理してゐる時に、「巴里安着何よりです。自炊生活は面白いでせう」とか、全く氣の抜けた話です。とつくの昔に巴里を去つて倫敦に來てゐるのに、さうして又いまではジブラルタルへでも行かうかなんぞ考へてゐるのですからね。地圖を見てゐる事はユカイです。人間が大きくなりますよ。陽が少しあつて來ました。窓の外を、箱車を引いて山高帽子を被つた、村風子然とした層屋が通つてゐます。

「ハロー・ムツシユウ！」

何を賣ると思ひます？ 手ぶらで三階から駈け降りると、私は金側の腕時計を脱して談判してみました。箱車の中には、破れたマントウやら足の折れた椅子、糸のないヴィオロン、赤い女の雨靴、そんなものがはいつてゐます。

「俺には、こんな金屬物は判らないでね」

「お爺さん、エトランゼだから買つて頂戴よ。君だつて何も食べないで體が冷たくなつて行つたらどうします」

「とにかく、パスポートを見せなさい。五圓で買つておかう」

テンシリリングで腕時計の取引きが済むと、初めて大きな聲で、私は唄の一節を呶鳴りました。

○

全く世界の到るところ、屑屋君は行きとゞいてゐるものだと思ひました。彼達の呼び聲だつて、ひどく日本の屑屋さんに似てゐます。此テンシリリングの金のある間、貴女や友達にいたよりを書きませう。手紙を書いてゐる時だけはつきりと皆の顔を思ひ出します。意氣銷沈して何も彼にも希望がもてなくなつてくると、私は部屋の中をうろろと歩いて色々な家具に手を觸れてみます。——飴色をした食器臺は、一世紀も前のものだと女主人が云つてゐましたけれど、指をあてるとハツカ水に手を

浸したやうに冷たくて、そのくせ、隅々には埃が厚くたまつてゐます。敷いてあるタツピイの模様は、代々の宿泊人に蹂躪されて、花なのか、動物なのか解りません。會議にでも使ふやうな大きな圓卓、汚れた大理石のストーヴ、その上には汚點だらけな壁いっばいに、鏡がありますけれど、ストーヴ臺が高いので、やつと私の肩から上が寫ります。

私は此鏡になるべく眼をむけないやうにかまへてゐるのですけれど、時々何気なく驚かされるのですよ。夜なんぞ爐の火にあたつてゐて、何とも仕様がなくなりむつくと立ち上ると、大理石のストーヴの上に圓い女の首が乗つかつてゐます。

薄呆んやりした三白眼。ねえ、これが私の首なんです。吃驚して身を引くと、臺の上の首も向うへ轉落してしまふ。

夜が段々おそろしくなつて來ます。私は夜になると自分の影にさへ聲をたてます。部屋の間には、高音譜の黒い鍵が、齒抜けのやうになつてゐる古いピアノもあります。これには格子のやうに蠟燭だてがいつぱいつつたつてゐて、年代を経たらしく緑青が吹いてゐます。ところで、私はピアノを見る度に、井戸車のまはるやうな音と、無数の手を聯想して來ます。聯想して來ると私は部屋中の窓を明けて此音を吐き出す事に努力します。壁紙は青色、だから時とすると、海のやうな風が吹く事もあり、難船の夢を度々見るのです。

此セシルハウスの住人は女主人姉妹に女中に私と屋根裏のお爺さんがゐます。此人達は終日笑つた事がないのです。此間も四階上のはばかりに行つて、扉があかないので、悲観してゐますと、扉の外で、「オス・ムカウ」と呶鳴る人がありました。向うへ強く押すと、背の高いお爺さんが、むつゝりして立つてゐます。だから、此屋根裏の老人とはこれが初対面で、最後でした。日本へ行つた事もある人でせうか、「オス・ムカウ」には微笑しましたけれど、私なんかも、そんな英語をつかつてゐるのでせう。

夜はなるべく早く安静にして寝る事にしてゐます。寝つく前は本を読む事です。佛蘭西語を少しやつてあとは出鱈目に讀書をしてゐます。今は何も讀むものがなくなつてしまつて、岡倉さんの茶の本なんぞを讀んでゐますが、大變面白い。——ところで、今朝はね、紅い封蠟の厚い銀行からの手紙を買つたのですよ。まるでお伽話でせう。巴里で打つた電報に改造社から云つただけの金を送つて來たのです。全く奇蹟です！ 私は何も手につかなくて、豹のやうになつてしまひました。人間には仲複雑な現象があるものです。ピアノの蓋をあけて、一直線に指を走らせましたが、私の今の心のままに鳴つてくれないのです。まるで、井戸の底へ石を投げるやうだ。軽い、風の吹くやうな音と云ふものは此世の中にはないものでせうか。私は思ひきり此ピアノをけいべつしてやりました。何度も寢臺にひつくり返ると、四隅のバネが厭な音をたて、鳴るのです。さあ、巴里まで一直線。それから伯

林、モスコ、日本へは少し足りません。電報を打つた時に來てゐたら、私はまだ少しは持つてゐたのですけれど、まあまあ、歸れないのは何より、私は元氣になつて、一ヶ月の倫敦生活に訣別する事にしました。さて離れるとなると倫敦はまたなつかしい都です。

○

倫敦では博物館を見ました。イーストエンドも歩きました。ユダヤ人の町を見たり、ピカデリー廣場の地下鐵に出てゐる女も知つたし、オクスフォード大學都市も、テームス河の魚市場も、マルクス墓も、芝居も、等々、私はこまめによく歩いて行きました。言葉がわからないので、紙と鉛筆を持つて、よく歩くことです。184と云ふ赤自動車は歸りの私をハウランドロードの街角まで運んでくれます。倫敦の乗合自動車は一區四錢あまり、つまりワンペニイです。——倫敦の博物館は素敵ですよ。全く、大きい聲では云へないのですが、よくもあんなに世界各国から大泥棒が出來たものだと思ひました。日本の古代の青銅器なんかも澤山ありました。壁といふ壁、空間のない程の豊富さです。私を感歎させたものに陶器の部屋がありました。——晝から倫敦大英博物館に行く。陶器の部屋は好きだつた。特に東洋のものはいい。藍色ひといろの清楚な色調は、やがて盛られる美味しい食物を聯想させてくれる。西洋の陶器の味はどうだらう。これは全く舌からはづれた遠い眼の觀賞に任せるべきだらう。一枚の皿にも、デコデコに色を塗るか、凹凸をつけるか、始終何かおしやべりしてゐなけ

れば氣の濟まぬ西洋皿。——私は部屋隅にあつた古い支那製の壺にそつと頬をつけてみたりしました。それは冷たくて素直に圓い。肩の邊には、小鳥が二羽藍色で描いてありました。全く静かすぎる。私は何故か日本の母親の事を思ひ出しました。此壺に、二三枝の黄がかつた梅の花でも投げこんだらどんなに人達は其の美しさに驚くでせうか。

これは、博物館を見た時の私の日記ですが、英國の博物館だけは、巴里のルーヴルでもかなはないでせう。本當に一月中は何も仕事が出来ませんでした。けれど、此頃になつて百枚ばかりも書きました。母へ少し送つてやりたいと思つてゐます。百枚と一口に云つても旅さきでは仲々ですよ。疲れてぼんやりしてしまふのですが、元氣を出してゐます。

上海まで戦争が擴がつて行つたやうですがいつたいどうなるのでせう？ 外國へ來てゐますと、毎日の新聞で、日本の評判の悪いのが氣になります。

トラファルガル廣場の、支那コミンタンの示威運動も、あまりパツとはしなかつたけれど、支那婦人の火を吐く愛國の演説には感激してしまひました。

ねえ、誰だつて國を愛してゐるのですよ。國を愛さない者がどこにあるでせうか？
ねえ、國だの金だの

いものでせうか。——世界大戰の跡、いつたいどこに平和が來たのでせう。各國の人民達が妙に疲れきつてゐます。外國を歩いてゐると、今でもプンプンと
の匂ひがします。

そんな
サンドウキツチマンか、乞食か、ヴィオロンをひく藝人ですよ。かつては
が何をしてゐるか云ふと、大抵は、

歐洲各國にはうようよとはけ口を求めてゐるのですよ。

○
巴里の職業紹介所もさうでしたけれど、倫敦の職業紹介所は、これは壽司詰の盛況で、毎朝何町となく失業者が行列で順番を待つてゐます。

全く世界が飢ゑてゐる感じ。日本でも昔は平和博覽會なんてあつたのですがね。——誰達の爲めに飢ゑて、いつたいあの長い行列をつくるのでせうか、日本は温いと云ふ事ですね、倫敦は今年雪の日が多いですよ。旋風のやうに雪がくるくる舞ひながら降り込めてゐて、馬車の上から、石炭の御用はと、石炭屋が雪の中を馬をひいて通ります。倫敦の、此邊の町並はみなつましくて、帽子なんぞも色あせたのをづくつてゐて、おかみさん連中は平氣でかぶつてゐます。

近日、いよいよ倫敦を引きあげるつもりでをります。倫敦を淺い日で論じる事は厚かましいことですね、要するに、芝居も、文學も、禮儀も、英國はもう田舎つべの感じでした。芝居に行くにも着物を着替へて行くんですから、仲々一寸やそつとのカンタンさではありません。文學だつて、現代の英文壇なんぞいつたい何でせう？ 日本の方がよつほど華々しいものだと思ひます。バナナアド、

ショウがあるつて？ 私はあのひとのものはきらひだな。少しねぢくれてゐますよ。此頃は盛んに露西亞の悪口を言つてゐるやうですね。仲々きまぐれな良い爺さんです。

芝居も、私は此まゝの服装で御免かうむつて觀て來ました。アデルピイと云ふ一流の芝居小屋で、歴史劇ヘレンと云ふのをやつてゐましたが、何だか活人畫のやうに美しく、巴里のシヤリアピンのドン・キシヨットとは雲泥の違ひです。——聲が小さくて唄がカサカサに乾いてゐるのです。倫敦は戸外よりも家庭に落着けるところでせう。——ところで爐の火と云ふものは、歐洲の思ひ出の中で私の一番なつかしいものになりました。

こゝで一番面白く見たものに、均一百貨店が澤山ある事でした。日本にもあるでせうか？ きつとまだ出來てゐないと思ひます。一ツの街々にはかならず一軒はその百貨店があるのですけれど、プロレタリア階級にとつては仲々便利です、此百貨店にはいると、六ペンス(約二十四錢)以上のものは絶対にないのです。六ペンス以下の商品ばかり。——石けん。お白粉、首飾、指輪、糸類、雜誌、子供レコード、レース、布地、花の種、食器、金物、電氣の傘、鍋、籠、文房具、菓子、立食堂のコーヒーやパン、サンドウキツチ、野菜や、乾物、食料品、造花、玩具、ピクニック道具、單行本、肌着、パンツ、安全剃刀、硝子類、全く豊富な六ペンスの店で、一ペンスの塵紙まであるのですからチヨウホウです。こゝだけは芋を洗ふやうに繁昌してゐました。

それに晝の立食堂は、六ペンスで腹がふとるのですから大變な人です。

日本には、こんな安物百貨店が一軒位出來ても面白いと思ひますね。レースだつて、一ヤール一ペンスからあるのですし、こゝへは朝々二ペンスの紅茶を呑みに通ひました。實に氣が利いてゐて、賣子も綺麗です。店の飾窓には、その月の賣れさうな人氣物を澤山飾つてありますが、ひとつ誰かに此様な店を薦めませんか？ 五十錢以下の均一店のマガザンなら流行する事受けあひ、但し店がまへは、仲々大きいものでした。

物價は何と云つても高いと思ひます。爲替相場は日本と同じ位でも、こつちの十圓は日本の五圓位の價値なのです。日本は食物が新鮮で、とても外國の比ではありません。

○

今は夜の十時半です。私はニューハアヴェンの港から佛國のダイエツプ行の船に乗つたところです。ドーヴァ海峡を越えるならば、たつた五六時間で行けるのですけれど、急ぐ旅でもない故、私は遠廻りして此コースを選びました。倫敦巴里間には、色々なコースがあつて、値段も亦色々違ふのです。私の買つた切符は、ニューハアヴェン、ダイエツプ經由の、一番長くて一番安いコースなのです。夜分の八時五十分の汽車でロンドンのヴィクトリヤ停車場をしますと、翌朝の六時には巴里の北停車場です。賃銀は十七圓ばかり、ドーヴァ越えですと、その四倍か五倍はかゝるでせう。

ニューハアヴェンの港はとてもいい所です。中國の尾ノ道のやうな夜景をしてみました。晝間はどんな風景なのでせう？ 波も風もたいへん静かで雲が海面に觸れあふ音まで聞えるやうなのです。此船は魚も人間も同居で荷物船なのです。巴里から倫敦へ行く時は、税關がとてもやかましかつたのですけれど、歸りのデイエツプの佛蘭西税關では、婦人税關吏もゐて、とても女客は氣樂でした。

夜更けの船旅は味氣ないものです。まして一人の旅です。私は氷の下でずりさがつてゐる魚の匂ひを肌を感じると、此まゝ何でもなく海へ飛びこんでしまふのではないかと思つたりしました。私の頭の中では、絶対に死にたくない氣持が力んでゐるのですけれども……こんな時に、ウキスキイでも持つてゐたら樂でせう。——私は唇をあけて雲を舌に受けてみました。雲は私の眼も鼻も、唇も肩もサラサラと叩いて消えて行きます。——この船はスチームも何も通つてはゐません。七八人の船客は、皆むつとりとしてデッキを歩いてゐます。歩いてゐるより外に此寒さのしのぎやうがないのです。私は毛布を出して腰に巻きベンチに横になつてみました。體中が木片のやうに痛くなるのです。かへつてベンチの上に寝てゐるよりも、便所の中が温かでした。部屋がせまいせゐるのでせう。私はスーツケースの中から、大きな菓子パンを出して齧つたりしました。それでも寒い。デイエツプの港へ着いたのが夜明けの五時頃。おぼろげにデイエツプの波止場が見えます。何だか、釜山の港のやうでした。此船は人間よりも魚がお得意様らしく、私達が降りた時にはもう起重機から魚の樽が降ろされてゐました。

全く、汽車へ乗つた時は吻としましたよ。汚ないながらも温かです。でも日本の汽車で云ふならばこゝは二等位でせう。四人組の部屋で、同室者はニースの小學教師夫妻と私です。蓄音機を鳴らせて聞かせてくれたのですけれど、大變にぎやかな曲で、頭が破れさうでした。寒いのを我慢してゐて、急に温かになつたせゐでもあつたでせう。

體が溶けてしまひさうにいゝ氣持で、スーツケースの上に足を乗せたまゝ私はうつらうつらしてしまつたのです。

「マドマゼール！ お前は巴里で降りるのだらう？」

私の肩をゆすつて、切符切りの男が起してくれました。驛の大時計の下には、「サン・ラザール」と出てゐます。おやおやマドレーヌのお寺に近い驛ぢやないか、私は北の停車場に行くのだと云ひますと、此汽車は北の停車場には廻らないでリオンの驛へ行くと云ふのです。周章てた私はスーツケースを赤帽に頼むと、森閑とした淋しいサン・ラザールの驛に降りました。晝間ですと、こゝはまるで新宿驛のやうに賑やかな停車場です。何しろ汽車と地下鐵があるのですし、一寸出ると、マドレーヌの寺やおペラに近いのですから。——何にしてもへとへとに眠りたい。いつとき私は夜明け近い驛のストーヴにあたりながら、宿屋の事について思案してゐました。

巴里は毎日雨です。やつぱり、前の古巢へ歸りました。たゞし街は同じでも宿は違ひます。此ホテル

ル・フロリドルは前のホテルの約二倍ですが、どうしたのか此氣持は自分では判らないのです。今、非常に私は疊が戀しくなつてゐます。倫敦の宿で花か動物かもアイマイな古ぼけたタツピイのある部屋にゐたせゐるか、坐りたくて仕様がなぬものですか、敷物のある部屋に落ちついてしまひました。私は毎日膝を組んで坐つてゐます。坐る事が一番樂です。

ねえ、昔、都の花石けんと云ふのがあつたでせう、あの箱の表のやうに桃色じみた部屋です。巴里のホテルの壁紙は、あまり派手すぎます。いつもレヴェユの幕裏にゐる感じで、私は眼が覺めると、何時幕があくのだらうかと飛んでもない考へをおこす事がありました。

圓はこちらではガタ落ちです。去年は日本の百圓は、仲々威張つたもので千二百法あまりになつたものですが、いまでは私がこつちで換へた金は、三百圓が二千四百法そこそこで、もう千二百法の差がついてゐます。——だけど、圓がさがつたところで、要するにいゝ仕事が出来ればいゝのです。かうなつては、こつちへ來てゐる留學生諸君も大變だらうと思ひます。巴里は毎日のやうに雨が降つてゐます。五階の窓から見降ろすと、ダンフェル公園の芝生が一日一日、緑深くなつてゐます。

もう、マロニエの芽も臆て吹きますでせう。日本だつて桐の芽も櫻の花も咲く。日本の田舎で、梨の白い花の咲く家で少しばかり住んだ事がありましたけれど、マロニエの芽が出たらどんなでせう、私は日本へ歸りたくなつて何も手につかなくなつてしまふでせう。

貴女のポピーは元氣でせうか？ 犬の鳴聲なんてものは、日本だつて巴里だつて同じ事ですね。只

犬の姿は巴里の方が珍種が多い。組板のやうな犬だの、毛糸玉みだいの、婦人連がよく散歩路を連れて歩いてゐますけれど、何だかをかしい氣持なのです。

こつちの映畫館には、實寫ばかりかけてゐる小屋があります。此頃日支戦争の實寫があるので、良くと出掛けて行きます。戦争の中で、日本軍が鐵砲を打つたりすると、厭だと云つて巴里人はとても口笛を吹いてゐます。をかしなものです。又、巴里のソシヤリストの大寫しが出て大變な口笛ですし、面白いと思ひました。私は又、ダンフェルの近所のシネマにも行きますが、時々ひろひもの的に面白いものにぶつつかります。タゴールが詩を讀んだり、ガンヂーが糸を紡ぎながら笑つてゐたり、その他印度の寺の寫眞や、南アフリカ探検などユカイでした。

三月三日は、日本では雛祭で、桃の花の見られる日ですが、巴里でもミカレームと云つて子供の祭があります。荒物屋では、シラノ・ド・ベルジュラツクだの、道化たチャップリンなどのお面を賣り出したり、縮緬紙で出來た帽子や小鳥や、大根のやうな赤唐辛子や、風車などを賣り出してゐます。親達は自慢もので、子供達に化粧させて街を練り歩いてゐます。シャンゼリゼーのブルジュワ街では、シルクハットの子供紳士や、デコレテの子供淑女が多かつたさうですが、此邊の街ではオランダの田

舎娘や、馬乗り姿や、ピエロや、様々の衣裝で登しいながら、街は子供と風船で賑やかでした。

私は此頃アリアンセの夜學にはいりました。私のクラスは十人足らずですがとても呑氣ですよ。一ヶ月百法の月謝で、大變安いと思ひます。初めから一寸した短篇もので、今は婦人が手袋を買ひに行く物語りまでやつてゐます。恥を云ひますと、私が一番下手で一番發音がまづい。私の隣席のポロネエの紳士は、私のノートに皆寫してくれて、チヨコレットまでくれるのですが大變深切です。ずつと前、早稲田大學に少しばかり通つた事がありました。教室の感じがよくあそこに似てゐました。私は此學校へ来て二人のエストニヤ婦人と仲よくなりました。エストニヤと云ふ國を貴女は知つてゐますか。地圖で云ふならば、露西亞の上の方にあります。小さいところです。大變寒い處ださうですけど、この切手だけは、美しい部では随一でせう。三四のライオンだか三の字に描いてあつて、朱だの、青だの、緑だの、あります。若い女の家へ遊びに行つたのですが、とても古めかしいパンションにゐて、何だか、私は倫敦の下宿を思ひ出しました。クツションなども崩れかけたままで、何年かその位置におきつばなしのやうな部屋でした。

この女主人の亡くなつた夫と云ふのが小説家だと云つて *NEJMA-RAOULDERIVASSO* と云ふ、此様な單行本をくれました。女の名前ださうです。此、エストニヤの女の故里はまた素敵です。急にエストニヤに行きたくなりました。麥の刈り入れ頃の姉妹の寫眞を見ましたけれど、手も足もむ

き出して、全くハツラツとしてゐます。私は靴下をはく事がとても嫌ひ。かうして、手も足もむき出して麥束の上を轉んでみたいと思ひました。

エストニヤ婦人はヒルダアと云つて、佛蘭西語は私の大先輩です。玄關に、サロンに、寢室に、臺所に、押入れなどついて四百法、御飯が二食で四百五十法ださうです。部屋は廣いばかりで、全く古びた歴史陳列部屋と云つた體で、私なんか一週間で氣が狂つてしまつて女王様になつた氣になるでせう。

こゝにも毛糸玉のやうな白犬がゐました。今頃は風が強い。風邪を引いて寢込んでをります。窓は五階です。只青い空と雲だけ、あの雲は日本から來たのでせうね。私は當分ベッドに休息して、四角い青い窓でも見ながら、巴里の街の音を聞いてゐませう。

——本當は悲しくなつてしまつて、何か考へる事でいつばいなんですよ。(昭和七年四月)

マルセイユより横濱までの勘定書

五月十三日 榛名丸にて——マルセイユ出航。

三十パウンド——マルセイユより横濱までの三等船賃。(約三百五十圓)

四十五法——佛蘭西出國税。(約六圓)

三十法——カンネビル街の郵船までと、波止場までの自動車賃。(約四圓)

七法——酢牡蠣に赤葡萄酒を波止場の料理店で中食。(約九十錢)

三十法——部屋靴一足。(約四圓)

三十五法——スカート二着。(約四圓七八十錢)

二法——エハガキ。(約三十錢)

六十錢——フキルム一本船にて。

五月十五日 ナポリ午前七時半着。

二十五法——ナポリにて、烏賊の天麩羅、マカロニ、キヤフエなど。(約三圓)

三法——エハガキ二組。(約四十錢)

二法——ゆすら梅のやうな木の實。(約二十五錢)

三法——マセドニアと言ふ煙草。(約四十錢)

五月十九日 ポートサイド午前六時半着。

四法——コロンボ蜜柑五ツ。(約五十五錢)

四法——枕のやうなメロン一ツ。(約五十五錢)

一パウンド——船の三等ボーイにチップを半分だけ先拂ひする。食堂係りと、掃除係りと風呂番へ。(約十二圓)

八十錢——船の床屋にて髪を剪る。

十五錢——浴衣洗濯料。

八十錢——ビール二本。

十法——コロンボバナナ一枝。(約一圓三十錢)

一法——蜜柑一ツ。(約十三錢)

十法——輕木細工の袋物三ツ。(約一圓三十錢)

十五法——煙草色々四箱。(約一圓九十錢)

六法——自動車賃。(約八十錢)

一法——電車賃。(約十三銭)

八十銭——ビール二本。

四十銭——レモナード二杯。

六月四日 シンガポール朝六時半着。

三十銭——俵賃。

四十銭——エハガキ。

八十銭——ビール二本。

四十銭——ビール一本。

六月九日 香港朝六時着。こゝでは一パウンドが、約十二圓の相場だつた。日々に相場が變つて行

くので、相當損をする時がある。

八十銭——山頂まで自動車一人分。(四人乗り)

一圓八十銭——支那煙草五箱。

八十銭——アイスクリーム四人分御馳走する。

十銭——渡しのサンパン代。

一圓二十銭——陶々仙にて支那飯一人前也。八人で卓をかこみ、支那金で十ダラ三十五仙。

十五銭——浴衣洗濯料。

四十銭——ビール一本。

二十銭——レモナード一杯。

六月十二日 上海朝八時入港。

一圓三十銭——自動車にて四川路の内山書店及び魯迅氏のところへ。

六月十五日 神戸入港。

二十圓——ボーイにチップ三人分。

八十銭——ビール二本。

計——四百二十六圓あまりかかりました。他に切手代が二圓程あつたが、その港々の小さい金で拂つたので忘れてしまひました。(昭和七年九月)

一瞬の歐洲の旅

八ヶ月で四足の靴

一瞬の間に佛蘭西の生活が過ぎてしまひました。家の横の、堰を走る白い流れ河の水を見てゐますと、去年のまゝの姿で、音をたて、キラキラ光つて流れてゐます。たつた、秋と冬と春を抜かしただけなのに、日本へ歸つて來た私は何かまぶしくて眼をあげてゐる事が苦しい。まぶしいのを我慢してパチツと眼をあげてみると、眼の蓋をつき上げるやうに、涙があふれて來ます。船を上る時は寫眞をうつされてしまつて、ひどく屈託して、眼を伏せた私の姿が新聞に興をそへてゐましたけれど、全く、どうにもやりきれません。やつぱり、昔のまゝの垢だらけの心で、顔で歸つて來ましたのに。波止場に着いたら三十錢位残つてゐました。私は、人波に群れた波止場を背にすると、初めてアルルの女の口笛を吹きながら、白い三和土の道を愉しく歩きました。日本へ着いて第一番に私は、うどんが食べたくて仕方がないので、埃っぽい屋臺に首をつつ込んで、青い葱の刻んであるうどんを食べて、「をばさん景氣はどうなの？」と聞いて見ました。

「景氣いふたてかて、いやはやもう、話の外だつせ、うどんも一錢下げましてん」
 「一杯いくらなの……戦争だから景氣がいゝでせうに……」
 「フフン」
 うどん屋の神さんは笑つてゐました。一杯四錢のうどんはまるで火が走るやうに咽喉を通つてしまひました。垢だらけな心、垢だらけな姿、寒々とした思ひ。

東京へ歸る旅費だけ用意が出來て、家族の者にも、友達にも沈黙つて雨の降る東京に着いたのですけれど、東京はなつかしい街です。日本へ歸つて來た！うれしくて仕方がありません。

一年の間、私は四足の靴を、パリで、倫敦で、バルビゾンではき捨て、來てゐます。今はマルセイユ出來の白い海岸靴が足を包んでゐるのですが、こんな安靴でも日本へ洋行して來るのですもの。此白い靴に、遠い旅をしたからと云つて、別にえらさうな獨白もないでせう。ところで靴の奴も、私のやつて來た事を皆知つてるのだし、「え、あちらでの收穫は」なんぞと云ひ出した事には、それこそをかしたのになつてしまひます。

あゝ、だが何としても、パリへの此戀慕の心は何とした事でせう。別に大事がられたわけでもなく、別にアンダンに金のつかへた譯でもないけれど、パリはいゝ所でした。

カルコと語る

パリを去つた日が五月の十二日。マロニエの白い花も霧のやうに房々と咲いてゐました。パリは今の花の盛り。——その美しいパリの街で、私は、安ホテルのラベルでベタベタしたトランク一つさげて、パリ中の驛々を走りまはつてゐたのです。

ロンドンにも行きました。ニューハアヴェンの港も、北のモンモランシイにも、南のフォンテンブローにも、バルビゾンにも、皆よかつた。あんまり都會人がゴタゴタ行かないところだけに、思ひ出はまことに青々と涼しいのです。

パリで會つた人達の事も、いまではまるでお伽噺のやうに、呆んやり記憶の中に浮かんで來ます。

コクトオが、スポーツシャツ一つで自轉車に乗つてゐる姿をザツキンのアトリエの庭で見ましたが、まことにエネルギーシユだ。又、フランシス・カルコにも會ひました。「私は貴方の作物をあまりよく知らないで訪問したのですが」通譯の若い青年は、さう正直に私の意を通じてくれたのですが、カルコはとても機嫌よく、書棚から澤山の本を抜いて來て、思ひ出の一章を書いてくれました。又、カルコは自分の顔を描きながら、「いゝ男振りせう、日本の作者にも、こんな顔をしてゐるのがゐますかね」とじょうだんを云つたりしてゐました。

窓をあけると、一望にして彼の書齋から、セーヌの河を見る事が出來ます。呆んやり窓を見てゐると、此逞ましい小説家は、私の肩を叩いて「何度戀愛をしたか」と聞きました。「私は無數に戀愛をしたがみんな戀でなかつたやうな気がする……」と云つてやつたら、私の肩を叩いて笑つてゐました。

「貴女はどんなものを日本で書いてゐる？」とも訊きます。

机の上には電話があり、支那製の大きな灰皿、紅皮の椅子、緑の書棚、蓄音機、一寸上品な株屋さんの自宅と云つた感じでした。

シユミーズ一つの女が、不意に風呂場から覗いて、「失禮！」と私達を驚かせたりしました。

「コレットはどうか？」一流女流作家にも及んで呉れたのだつたけれど、「何か喰ひつきがたい作者らしいから」と云ふと、カルコはウイウイと何時までも微笑してゐました。

プウライユの微笑

アンリ・プウライユに會つたのは四月下旬の寒い日でした。十四區のゴミゴミした新開地の靴屋さんの三階に、娘のやうに見える奥さんと、三つになる女の子と三人で住んでゐました。まるで、本郷時代の詩人萩原恭次郎の家のやうな感じで、子供もお客さんも主人も奥さんも一ツ部屋に一緒です。

貧しいながらも、埃まびれな蓄音機が一臺置いてありました。黒表紙の本が壁一面にあふれてゐた

し、窓の外には子供の肌着が旗のやうに干してありました。私が訪ねて行つた時は、四五人の作家達が、卓子を圍んで立ち上つて何か激しく議論してゐました。二時間あまりも私は部屋の隅で子供と遊びながらコニヤックをなめさせられました。子供はいつも洗濯ばさみをしやぶつてゐます。小さい灰皿は見る見る吸殻で山になる。議論は果てしもなく續く。時々プウライユは私を見て微笑して見せる。奥さんの見せてくれたアルバムには、徳永直氏の「太陽のない街」の浴衣を着た日本女の表紙繪が貼つてありました。——プウライユは、「私の女友達で、もう五十近い人だが、踏切番人をしてゐる女流作家がある。會つて見ませんか、娘の頃から踏切番人をしてゐて、踏切番から見た汽車だけの小説を何冊も出してゐる人です。出色の一ツに『踏切番の女』と云ふのがあつたが、これはヴェルダンへ運ばれて行く軍用列車が戦地へ行く時、元氣ハツラツとした若い男をいつばい乗せて、幾月か過ぎて戦地から歸つて来る軍用列車には、

で、偶然窓から見えた

と云ふ様な、踏切から見た汽車ばかりの描寫を二十年も書いてゐて、今なほベルギ「境の踏切番なのです」——私はこの踏切番の女流作家に添書を書いて貰つて、ひどく會ひに行きたい熱情を持つてゐたのですが、つひに金がなくて行けませんでした。會つて來なかつたと云ふ事は思ひ出しても口惜しい事です。二十年も踏切から見た世界が書けると云ふ熱情には全く參つてしまひました。机にしがみついてゐる私よ拜跨しろです。プウライユからは「毎日のパン！」と云ふ著書を貰ひました。

佛蘭西の田舎では、モンモランシイ、バルビゾン、フォンテンブロー、ヴェルダンなどに行きましたが、日本の田舎と同じやうに景色は美しいし、人情が素直です。東京だけで日本を論じられないやうに、佛蘭西も巴里だけでは何も分りません。

ヴェルダンへ握り飯をして行つた思ひ出もありますが……大陸を旅して、田舎の生活が一番私にピッタリしてゐた。さて、今巴里では「働いても食へぬ」と云ふ小唄が流行つてゐますが、ヴェルダンの茫漠たる廣野の中の記念碑を見た私は、東洋のヴェルダン滿洲の空を回想して何か身に心に沁むものがありました。(昭和七年六月)

住んでゐた街

昔、倫敦のケンシントン・ハウランドロード九十九番地のミセス・ブルウトンと云ふお婆さんの家に下宿してゐた街の思ひ出であります。

ヴィクトリアの停車場から市バスで三十分位の近さで、ハイドパークや、ケンシントンパークがあり、こゝは物價の安いところでした。私は此ケンシントンに二ヶ月ばかり住んでゐました、此二ヶ月は雪と霧ばかりで、随分淋しい日を私は過しました。あまり霧が深いので金魚のやうに空気をパクパク食べてる氣持です。一番心配なのはポストへ行つても、郵便屋さんがポストを忘れて行きさうで困りました。牛肉屋さんの隠居さんが牛肉屋の店先を少しばかり區切つて郵便事務をとつたりしてゐます。女學校の英語くらゐでは仲々言葉が通じないので、こゝでは一々筆談で用事を済ませました。ケンシントン公園の前からハイドパークを通つて、マーブルアーチを横切り、オグスフォードストリートに出られます。私は八十四號の市バスの二階に陣取つて、お茶を飲みに行つたり床屋に行つたりしました。髪を少年のやうに刈りあげて雪の降るオグスフォードの街をぶらぶら歩いてゐますと、ヴィ

オロン弾きの辻音樂師が、車道と人道のすれすれのとこで色々な曲を弾いてゐたりしました。私はその頃はもうややくそで、日本は勿論巴里にさへも、歸られないわづかな財産しかなかつたので、その少しの貯へで友達へ愉しい旅の詩を書き送つたり、床屋へ行つたり茶を飲んだり、本を買つたりして使つてしまひました。思へば、まるでお伽話のやうにむかうみずな倫敦の生活でしたけれども、巴里の水くさいホテル生活と違つて、素人下宿で、しかも下宿の女主人は大變可愛がつてくれますので一文もなくても落ちつけたのかしれません。私の少しの財産は、たうとうミモザの花を買つておしまひになり、手紙も一週間書けませんでした。丁度、遠い日本から私の書いたものが金になつてといひて來ましたので、私はほんとうにうれしくて涙が出て仕方ありませんでした。金のあるうちに巴里まで歸つてしまひたかつたのですけれど、巴里と違つた家庭的な街が好きだつたものですから、何時までもねばつてゐました。夜になるとオクスフォードの街に音樂を聴きに行つたり、ケンシントン街に古臭いナジモヴァのフィルムを見たりしました。晝はミュゼを見て暮しました。日本語が話したくなると、よく日本人のうなぎ屋へ出かけて行きました。いまになつてみるとあんなにアイマイなロマンチックさは仲々ないものだと思ひ出すのです。

日本人と云へば藤森成吉氏御夫妻と、大毎の楠山氏、山下三郎さんぐらゐにしか會ひませんでした。毎日あけてもくれても一人で街を歩くより外なく、街を歩けば寒いので、よくお茶を飲みました。倫敦は紅茶がおいしいので大變愉しく、文房具類が巴里と違つてしつかりしたものばかりなので、私は

百貨店へ這入つてはノートやゴム消しやカレンダーを買ひました。——着物などと來たらとても野暮で、去年は青竹色が流行つたりしてゐました。あまり寒いので私はスエス製の青いジャケットを一枚買ひましたが日本へ來ると五十圓もするさうで、これだけは仲々じまんものです。巴里のやうに街の市場には安直にムッシュウが買ひ物などをしてはをりませんが、街上の露店市場は仲々にぎやかでした。ケンシントンの古靴屋の娘に仲良しが出來ましたけれど、大變なおでこで、髪が灰色なので夜などは寒氣がするやうな事がありました。私は寒い間中を倫敦の下宿のストーヴで暮しましたけれど、自分をあんなに佗しく見すゑた時代はありません。さうしてあんまり考へすぎて來ると、何だか呆んやりしてしまつて、オルゴオルを鳴らして乞食が唄をうたつてゐてもすぐ甘くなつてしまひ、霧の中に首を出して聞いたものです。ストーヴがガスなので、長い間チツソクしさうな變な時もありましたが、思へば倫敦の霧位不思議な抒情を感じさせるものはありません。眼をつぶるとハウランドの古ぼけた通りが眼に沁みて來ます。

教會。古靴屋。シユミーズ屋。花屋。新聞と煙草を賣る店。トランク屋。パン屋。美容師。小魚屋。古時計屋。地下鐵の前では、地面にチョークで繪を描いてゐる大道繪師など、風景のつゝましさだけが、いまでは心痛い思ひ出となつてゐます。(昭和九年十月)

摩 周 湖 紀 行 (北海道の旅より)

宗谷本線の瀧川と云ふ古い驛に降りた。黄昏で、しかも初めての土地で一人の知人もなかつた。随分用意深く、行く先々の様子は、旅行案内で調べておくのだつたけれど、途中で氣が變つてしまつて、根室本線へ這入つてみたくなり、乗りかへ驛の瀧川に、周章で、降りてしまつた。ホームを歩きながら、道々私は驛夫をつかまへて、此町ではどのやうな宿屋がよいかといふことを聞かなければならぬ。樺太以降東京まで直行のつもりであつたので、最早私の懐もとぼしい。

町はまだ冷々してゐた。毛織のスーツが結構間にあつた。此町では三浦華園と云ふのがいゝだらうと聞いた。荷物を三浦華園の宿引きに頼んで、私は暮れそめた瀧川の町を歩いて宿へ行つた。官吏とか商人とか一寸足だまりに寄つて行きさうな小さい町であつた。宿へ着くと再び頭の前から足元まで出迎へた女達に見られなければならぬ。

女で、しかも一人旅は不思議なことなのであらう。風呂に這入り夕食の膳を前にしたが、何としても佗しく、一合の酒を頼んだ。酒は二杯ばかりを唇にすると、最早胸につかへて苦しく、床をとらし

て眠つたけれど、床へ這入れれば這入つたで急に眼がさえて来て仲々眠れなかつた。
 黄昏に降りた不用意な旅人のために、こゝは根室へ行く汽車もない。ふかくにも私は瀧川で一泊し
 なければならなくなつたのであつたが、これもいゝと思ふ。枕元の水差しの盆の上には、此一夜泊り
 の客の爲めに小さい列車時間表が置いてあつた。裏をめくると、明治三十八年出版「運命」よりとし
 て國木田獨歩の一章が書いてある。

「何處までお出ですか」突然一人の男が余に聲を掛けた。「空知太まで行くつもりです」「さうですか、
 それでは空知太にお出になつたら、三浦屋と云ふ旅人宿に止つて御覽なさい」

獨歩が此三浦屋に泊つたのかどうかは判らないけれど、愛なく情なく見るもの荒涼寂寞たると嘆じ
 た獨歩の一人旅を偶々面白く思つた。私も御同様だ。明治三十八年と云へば私の生れた頃の旅愁だ。
 まだその頃の空知の國はもつと未開の地であつたに違ひない。天井の燈火を消して枕元のスタンドを
 つけた。何か本を讀んで此愛なく情なく荒涼寂寞たる自分の氣持に應へたかつたけれど、何も讀む氣
 がしない。夜更けて嬌聲を聞いたが、女中が迎へに来て云ふには、「うちではカフェーもやつてゐるん
 でございますが、お厭でなかつたらいらつしやいませんか」その嬌聲は女給達の聲であつた。
 妙に疲れてゐたので、そのまゝカフェーにも行かないで枕元の燈火をつけたまゝ私は深く眠つてし

まつた。

翌朝は不幸なことに曇つてゐた。九時十五分の汽車で根室線に這入る。

空知の風景は私には苦しすぎる位廣かつた。北海道の地圖は少しばかりコチヨウして小さくしてあ
 りはせぬかと思ふほど宏大で、空よりも野が廣い。途中空知のぼんもじりより沛然たる雨にて、澤梨さくらの
 白い花が虹のやうに美しく見えた。馬と一緒に黒くなつて畑を耕して行く人達の汗だらけの努力を、
 深として感謝せずにはゐられない。朝から汽車へ乗りづめ、しかも此根室線には急行がないので、一
 驛一驛私は野原の中の驛々にお目にかゝれる。——釧路へ着いたのが八時頃で、驛を出ると、外國の
 港へでも降りたやうに潮霧ガスがいつぱいだ。雨と潮霧で私のメガネはたちまちもつてしまふ。帶廣か
 ら乗り合はせた、轉任の鐵道員の家族が、こゝでも町は歩いて行つた方が面白いと云つて、雨の中を
 こまめに私を案内してくれた。

山形屋と云ふのに宿を取る。古くて汐くさいはたご屋であつたが、部屋には熊の毛皮が敷いてあつ
 た。——町を歩いてゐても、宿へ着いても、三分おきに鳴つてゐる霧笛の音は、夜着いた土地である
 だけに何となく淋しい。遠くで聴くと夕焼けの中で牛が鳴いてゐるやうな氣がする。こゝでは朝日新
 聞の伊藤氏に紹介狀を貰つて來てゐたけれど、黙つてそのまゝ宿屋へ着いてしまつた。宿では無職と
 書いて怪しまれた。女中は老けた女で何となく固い。判で押したやうな宿屋の遅い夕飯を食べて、熊

の毛皮の上に體を伸ばしてみるけれど、まるで熊の背中に馬乗りになつてゐるやうでをかしい。手紙を書いてゐると今日の食堂車に働いてゐた十六ばかりの二人の少女が、同じ宿に泊りあはせたからと遊びに来た。給仕服をぬぐと二人とも美しいので愕く。明日はまた十時の汽車で函館へ歸るのだと云つてゐた。茶を淹れたり菓子を擲げたりして、何とない行きづりの語らひを愉しむ。月給が三十圓で兩親がそろつてゐるとも云つてゐた。

風呂からあがると寢床が敷いてあつたが熊の毛皮がこはくて、私は次の間へ寢床を引つぱつて行く。寢てゐると霧笛の音で眼がさえる。家が古いので妙におくびやうになる。夜更けて梅雨のやうな静かな雨が降つてゐた。

六月十六日。

北海道へ渡つて久しぶりに青い伸々とした空を見た。伊藤氏に電話をして朝食をとる。土地へ行けばその土地の事を少しばかりくはしく聞いておかなければならないので、私は根室への列車の中で作つた私の旅のコースと地圖を擲げて用意しておく。

伊藤周吉氏は伸々いゝひとであつた。

お遇ひするが早いのか、とにかく此宿屋を出ようではありませんか、こゝへ來たら角大と云ふ啄木の唄に出て來る女のひとの營んでゐる宿屋がありますと云つて、自動車を頼んでこられた。旅先で貰つ

た紹介状ではあつたが、旅の情と云ふものは伸々身に沁みるものがある。

山形屋の拂ひを濟ませて道路へ出ると、宿の前が、はからずもさいはての驛であつた。山形屋へ泊つたことも伸々いゝではありませんかと、いまは肥料倉庫のやうな舊驛を眼前にして、私は啄木の唄をまるで自らの唄のやうにくちずさむのであつた。「さいはての驛に降り立ち雪あかり、淋しき町に歩ゆみ入りにき」さいはての驛の前は道が泥々してゐて、雪の頃のすがれたやうな風景を眼の裏に思ひ出す事もできた。

啄木の唄つた女のひとは昔小奴と云つたが、いまは近江、じんさんと云つて、角大と云ふ宿屋を營んでゐた。新しく大きい旅館で、舊市街と新市街の間のやうなところにあつた。おじんさんは四十五歳だと云つてゐた。小奴と云ふ女のひとを現在眼の前になると、啄木もさう老けてはゐない年頃だと思ふ。たしか五十歳位でもあらう。誰でもひとゝほりは聞くであらう啄木との情話よりも、啄木が優しい人であつたと云ふ何でもない挿話を、私は大事にきいた。おじんさんは大柄で骨ばつた人であつたが、世の常の宿屋の主のやうにぎすぎすしたところがなかつた。美しい娘さんの寫眞を持つて來て、亡くなつてしまつたのだと、嘆いてゐたが、誰でもが聞くだらう啄木の思ひ出話よりも、娘の話をするおじんさんは、何となく私に好ましかつた。

私は此宿屋で、釧路の町の色々な人達に遇つた。先住民族遺跡を研究してゐる吉田仁麿と云ふひと

や、野尻と云ふ歌よみの人や、その他にも藤井と云ふ婦人記者の人など。さうして様々な町の歴史を此熱心な人達から聞いたのであつたが、雑記帳を持つて筆記して歩くやうな氣持になる事を怖れ、私は一人で此地方の湖めぐりをしようと思ひたつた。

晝飯をおしんさんに馳走になり早々旅館を辭して、阿寒地帯の中の一番氣むづかしい湖へコースをとつた。

釧路の町は快晴で、天氣がいゝのか霧笛も鳴つてゐない。

途中、啄木が勤めてゐたと云ふ釧路新聞社の前をとほつた。赤いレンガ建で、明治四十年頃の建物としては、相當新しかつたのであらうが、いまは古色蒼然としてしまつて、何となくをさなびてゐてよかつた。霧笛を鳴らしてゐる知人岬と云ふ所にも行つてみた。岬の丘に登ると、太平洋炭鑛埋立地が南の防波堤に續き、まるで海を二ツに切つたやうに見える。樺太でオホーツクの灰色の海ばかり見て来た私には、釧路の海はるり色に光つてゐて、天氣のいゝせむか一望にして港の中が眼にはいつて来る。朱い煙突を持つた浚渫船が起重機から泥を吐きながら、まるで大雨のやうな音をたてゝ動いてゐた。内地の風景と違つてどこか青くて冷たかつた。港には船が澤山はいつてゐた。厚岸あつけしの海では海軍の演習があると云ふので此釧路の海も賑ふだらうと人々が話しあつてゐた。

釧路の驛へ行くと、午後三時半の網走行があつたので、その汽車へ乗る。こゝではさつき角大旅館で遇つた藤井と云ふ若い婦人記者のひとが私と旅を共にすると云つて合財袋を持つて一緒の列車に乗つたが、いゝ人達の親切は斷りやうもなかつた。

窓外は茫漠たる谷地で柏の木が多い。標茶しやうぢの驛あたりより驟雨になつた。車内では川湯温泉の驛長さんが乗り合はしてゐて、色々な旅の話に興じた。

「摩周の湖は、すぐ霞がかゝつてしまふので、運がよくなないと仲々見られませんかよ」
今日はとても見られまいとの話で、弟子屈温泉でしこくに泊ることにする。

弟子屈の山小屋のやうな小さい驛へ着くと、起伏のある部落の家々に早や灯がはいり、土を掘るやうなすさまじい雨であつた。泥まみれなハイヤアに荷物も何もいつしよくたで伊藤氏に紹介された近水ホテルに行く。田上義也と云ふひとの建築になるとかでライト式だと云ふことである。だが山の温泉宿としては少々薄々とした建物でアパートのやうな氣がしないでもなかつた。私は洋室がきらひなので、日本の部屋へ案内して貰ふ。いゝ部屋のつくりであつた。温泉へ着いて日本の部屋位有難いのはない。女中達は物靜かで優しかつた。

何よりも沛然と降る雨を眺めて、雷のすさまじい音をきくのは、ぴしぴししたきびしいものを感じて爽かであつた。眼の下を小さい釧路川の上流がゆるく走つてゐる。雨の霽れ間を縫つて蝸がよく鳴いた。

私はだが不幸な旅人であるらしい。此様な風景を見ても、私の心は先へ先へと走つてゐて、同行の女性にも氣の毒なほど黙りこくつてゐる。

二人で温泉へはいる。

湯舟は川へ突き出てゐて、赤いレンガを疊んだ圓い浴槽であつた。河の流れが黄昏れた大きい硝子窓に寫つてゐる。これで四圍に鬱蒼とした深い樹林があつたら素敵だらうと思つた。ホテルの戶外は土地が若いせゐるか荒地にある感じで、此河だけがよかつた。ホテルの經營者遠藤清一氏は、廳で庭にも野菜や花を植ゑると云つてゐられたが、むしろあの庭には白樺や檜の木の亭々としてゐる方が似合ひはしませんか。

湯から上ると、窓をあけて明日登ると云ふ摩周の山々を見た。ピラオ山や雄阿寒岳、雌阿寒岳が、薄墨のやうにそれらの峰が遠く見える。その山の上に星も月もさえてゐた。月はまだ細かつた。東京を出て何日になるだらうと、偶と、そんなことも考へる。手紙の外は何も書かず讀まずのありさま、その手紙もまるで日記がはりで、その日その日の心を書きおくるだけで、不思議な位に空虚だつた。床につくと、婦人記者のひとは色々静かな話を始めたけれど、私は遠く外の事ばかりに心が走つてゐた。雨は何時まで止まなかつた。

翌朝眼が覺めた時は、河も向う岸も滴るやうな新緑で、山の木立の影さへはつきり見えるかのやう

に晴れてゐた。障子をあけて此美しい空に茫然とする。

すぐ山へ行く支度にかゝると、ホテルの遠藤氏が御案内しませうと云つて來られた。かへつて恐縮な氣持であつたが、快く、三人で宿を出る。便利なことに摩周の峰までハイヤーが通ると云ふことで、私達は自動車クルマで山へ向つた。此地帯は、山うるしや、どろの木、白樺、柏、澤梨さわなし、えんじゆの樹木が多くて、緑の色は内地よりも浅い。

摩周山は海拔三百五十米位で、湖の深さは二百米ばかりあるとか聞いた。摩周山の中腹から見える湖の姿はまるでぼつんと鏡を置いたやうであつた。此鏡のやうな湖心にはカムイシユと云ふ黒子のやうな島があり、まるで浮いてゐるやうであつた。去來する雲の姿が露西亞の映畫のやうに明るく見えて、波一ツない静けさである。湖の向うには摩周の劍のやうな頂上雲の中へ隠れてゐるやうに見える。湖岸は降りてゆくにむづかしい絶壁で、遠くはるか地底に眺める湖だけに暗く秀でてゐる。紅鱒やザリガニを放つてあると云ふことだつたが、あんまり波がないので、死んだ湖のやうにも見える。足元は熊笹と白樺の若木で、風が下から吹きあげて來た。

此邊いつたいを阿寒地帯と云つて、私の立つてゐる熊笹の丘から雌雄の阿寒岳の峰や、斜里岳漂律の重なつた山の姿がパノラマのやうに眼に這入つて來る。

雲のよ

雲の海かよ渦巻く霧に

煙る摩周湖七彩八變化

かはる姿のとなこ

おもしろや

これは摩周湖小唄とでも云ふのであらうが、これでは摩周の湖も氣の毒すぎる。私は北海道へ来て、興味を持つてゐる湖はこの摩周と、帯廣の奥の然別湖しかりべつであつた。摩周湖は自分の空想した湖よりも神しかつた。渚に人を寄せつけない孤立した湖だけに、地味で雄大であつた。晴れ間に姿を現はしてゐる間はまことに束の間で、何時も霧か雲で姿を隠してゐると云ふことである。

摩周の湖へ出るには、釧路から舌辛驛したかへ出て、阿寒湖めぐりをして、摩周湖へ着くのが風景がいゝらしい。——私達は、それより山を降りて、北見の國境近い屈斜路湖畔へ向つた。

山を降りると、もう天候が氣むづかしくなつてゐて、雨氣をふくんだ風が沿道の森林の梢を氣味悪く圓く吹きあげて行く。

屈斜路湖は周圍四十七軒で、まるで海のやうにも見える。まづ南岸の方から這入つて行つた。此邊の御料地にはポントウ、オサツペ、エントコマツブ、サツテキナイなどの部落があつて、途中の和琴小學校では運動會があつた。運動場の木柵には馬もつないであつた。校舎をめぐらした紅白の鯨幕が風をはらんで獅子舞ひのやうに見えた。白い運動着の先生はメガホンを眼にあてたりしてゐた。校舎はぼつんと荒地の中にあつて、その小さい校舎の横には運動會相手の菓子屋や團子屋が小さい店を張

つてゐた。

私達は、此小部落を通つて和琴半島へ這入つて行つた。渚には茹で玉子やせんべいを商ふ茶店が一軒あつた。茶店の前には野天の自然風呂があつて、岩と岩との割目に出來た浴槽につかつて、部落のお神さんや子供達が茹でられたやうに紅い皮膚をして聲高く世間話をしてゐた。自然で何の工作もしないだけに私は夜の此天然温泉の風景も思ひ描く。月の明るい夜などどんなにいゝだらうかと思つた。岩の上には黄色の湯花がたまり、まるで菖蒲池に水浴してゐるやうにも見える。私は子供のやうに手をつつこんで見た。私のそばで背中を洗つてゐた若いお神さんは「今日は天氣のせゐか、えらい熱い湯で、ぢつとはいつてをられん」と云つてゐた。湯の湧口に掘立小屋があつて、そこには型ばかりの脱衣場もあつた。

此湖は、摩周湖のやうに孤獨氣ではない。派手な湖で、渚の平地には、所々小さい温泉旅館があつた。南はチセヌプリ、イワタメシの山岳に圍まれ、その後方に、コトニプリ、オサツペヌプリ、サマツケヌプリの山々が流れてゐる。

湖が廣いので一望に眺めることが出來ない。渚はまるで海のやうで砂地はどこを掘つても湯があふれた。水ぎはの波の色は糸を引いたやうな黄色な湯花の波で私には不思議な景色だ。

和琴半島と云つても小さな半島で、大町桂月氏のメイメイだと聞いた。

歸途は屈斜路湖の沿岸をめぐるつて、川湯の部落へ向つた。途中、私達は硫黄山へも登つた。這ひ松や、白い花を萬朶と咲かせたい、そつ、いじのお花畑へ出た。いそつ、いじの花は、頬をよせると、ふくいくとした匂ひをはなつて、姿に似ず何時までも匂ひが浸みて来る。此お花畑は硫黄山麓十五六萬アールに互つてゐる。

硫黄山には樹木が一本もなかつた。それなのに、中腹の柵の中には保安林と書いてあつた。どつとんどつとんとまるで何臺か動いてゐるモーターの上を歩いてゐる様なすさまじい活火山で、登りながら、硫氣を噴出してゐる氣孔の上へ石を投げると、面白い程その石がミデンに碎け散つてゆく。銀製の指輪が眞黒になつた。山肌は白と黄とエメラルドグリンの苔で、まるで菓子でつくつた山へ登るやうである。山裾には硫黄の工場があつた。明治十九年頃、安田一家がこゝに硫黄採取事業を經營して、標茶しべちやの驛まで運搬したものと云ふことだ。

川湯温泉は、弟子屈温泉より一つ向うの驛で、網走へ向つた方である。部落中にふくいくとしたい、そつ、いじの花が咲いてゐて、浅い枯れたやうな河床から湯が吹きこぼれてゐた。弟子屈への車中で、この川湯の驛長さんに遇つたのを思ひだしたけれど、こゝではあいにくと雨が降り始めた。土産物を賣る店と自動車屋が二三軒ある。

黄ろいジャケツを着た若い運轉手は「これは大雨になりさうですぜ」と、急いでハンドルをきり川

湯から弟子屈への森の中の沿道を四十哩も出して走らせた。

昨日よりもひどい雷で、雷光が走るとすぐ頭の上にすさまじい雷鳴がした。烏が幾十羽となく吃驚したやうに森の中へ逃げこんでゐる。雨に滴を拂つて逃げまどふ鳥の姿を私は何時までもふりかへつて見てゐた。

「人の子にとつては、生れないこと、烈しい日の光を見ないことが、萬事にまさつてよいことである。併しもし生れ、ば、出来るだけ早くハイデースの門を過ぎ、厚い大地の衣の下に横はるに若くはない」
どう云ふ聯想か、私は北の果の森林の中で、しかも耳の破れるやうな雷鳴の中に、プチアーの中のデスペラートな一章を思ひ出した。兎に角私は元氣だ。私は常に雑談をして自分を考へない。旅空で瞑想してみたところで、所詮は底ぬけに小心者で、粕ばかりで何もない空々くうくうな軀をもてあましてゐるにしかすぎないもの。

宿へ落ちつくくと、婦人記者氏は人生について話しかけて來たけれど、私は此女性よりも本當ははるかにおとつてゐるのだ。お菓子を頬ばつてゐるか眠るか雑談してゐるか。

温泉が一番嬉しい。私は黄昏までに三度も軀を洗つた。

音楽が聴きたかつたが何もなかつた。

つひに二泊。

早朝四時半に起きて、釧路へ歸る支度だ。窓をあけると、もう鯛がなきたてゝゐる。——五時半の汽車で釧路へ向ふ。三等切符を二枚買った。切符を切つてくれた驛長さんは、此二人の女連れに、「もうお歸りですか」と云つた。

釧路へは八時頃着いた。驛に荷物をあづけて、驛の前の飲食店に這入る。私の横には陸軍の將校が一人辨當をたべてゐた。私も辨當がほしくなつて、うどんだの辨當だのを注文した。旅なれないと見えて婦人記者氏も疲れてゐる様だ。

辨當をすませて伊藤氏宅へ行つた。美しいおくさんや、小ちやい坊ちゃんや嬢ちゃんに遇ふ。伊藤氏へあいさつして私は釧路をたつて帯廣へ行かうと思つた。晝間の汽車にはまだ間があるので、支應へ行き、先住民族の古跡を歩いて釧路の郊外にある春採湖はるとりこに行つてみる。

春採湖は、摩周湖や屈斜路湖と違つて、ひどくアイヌ的で、ひなびて賑やかな湖であつた。

私は此一月あまりの北への旅で、何だか、湖と平野と沼地と森林ばかりを見て暮してゐるやうだ。陽氣になりつゝある。知らない土地で遇ふ人達は案外肥つた方ですねと云つてくれる。十一貫の小さい私が、一貫目もふえたのだから、どつかへ肉がついたのだらう。平野と湖を眺め暮し、宿屋では牛乳と鮭と露ばかりの一ヶ月は、仲々樂天家にしてくれたのかも知れない。生きてゐることは嬉しいことだ。

釧路は午後一時半の汽車でたつた。また例の遅い列車で、來た時の驛々に一ツ一ツお目にかゝる事になる。狩勝峠は雨であつた。——帯廣には五時頃着いた。平原の町らしく晴々としてゐて、アカシヤの並木が深い葉を垂れてゐた。釧路から伊藤氏が電話をかけておいて下すつたのか、こゝでは朝日の奥原と云ふ人の出迎へを受けた。

驛前の北海館と云ふのに這入る。

旅館へはいると、ぼつんと一人になつた氣持で伸々とする。宿の前はすぐ驛への通りで、果物屋や、十銭スタンドがあつた。夕飯前に、私は一人で帯廣の町を歩いてみる。がらんとした淋しい町であつた。

私は如何にも古くから此町には住んでゐるかのやうな容子で、町を歩いた。案外古本屋が多い。宿ではまた眠られないだらうと、一軒の古本屋にはいり、色々な本を手にしてみた。大正七年出來の白樺の森と云ふのを三十錢でもとめた。装幀はリーチ氏のもので、口繪にはロダンの作品の寫眞が二三はいつてゐる。「或る小さき影」「巴里のゴロツキの顔」「ロダン夫人の塑像」など、その外、ジオンやラムの素描の繪がはいり何とも愉快かつた。

私は夕飯をぼそぼそ食べながら、その本を展げて讀んだ。有島武郎氏の小さき者へが載つてゐる。志賀直哉氏の小品網走までなど、みんな實に面白く讀んだ。

夜はまた雨だ。その雨の中を奥原氏が、町でも歩いてみませんかとたづねて來られた。

「お迎へに出て歸つてみたら、留守に、小樽へ轉任の通知が來てゐて愕きました」
 「まア、それはよかつたですね。では町にでも出てお祝ひでもしませう」

長雨になりさうな、しとしとした雨の町を歩いて、轉任でコウフンしてゐられるらしい奥原氏の爲めに、さゝやかな料理店を探したけれど、結局二人とも雨で困じ果て、アイスクリームを飲みにはいる。こゝでは北大の校歌のレコードをかけてゐたが、それは何かいゝ氣持だつた。根室線へ這入つてから、満足に天氣の日がない。明日は早朝然別湖へ行かなければならないのだが、雨では途が絶えると云ふことであつた。

奥原氏に別れて、宿へ歸つたのが九時前。雨だつたら、砂糖大根工場に行つてみよう。私は平野も湖も見飽きましたと友達に書きおくりながら、何故か湖を追つて歩いてゐるやうだ。元氣でゐなくてはいけない。

枕元には、明日行く然別湖のあらゆる姿態をした繪葉書が私を慰さめてくれてゐる。

夜更けに女中が、よく水のあがつた鈴蘭の花を持つて來てくれた。此女中は札幌にさへも行つた事がないと云つてゐた。

然別湖はまだ洋燈ランプですよと、女中がいゝところだと云つてゐた。宿屋は一軒しかないさうだ。私はとぼしくなつた財布をひらいて、その宿屋はそんなに高くはないでせうとたづねた。安かつたら二三日はゆつくり泊りたいと思つた。(昭和十年六月)

樺太への旅

1

稚内わかしほへ着きました。寒い町です。

心の中に、陽蔭で白くなつたやうな蔓草が、ぐんぐん雲蔽して來るやうな淋しい町です。五月の二十四日に、津輕の海を渡つて、私は櫻や林檎の花の盛りを北海道の町や村で何度か見ましたが、稚内へ來ると、急に冷えた景色で、春どころか、今日は六月初めだと云ふのに、氷雨もよひでまるで冬の景色です。

もう、あと一時間あまりで稚内の港へ這入ると云ふ汽車の窓から、野や山を見ますと、それがみんな熊笹の叢で、近くの山野はみんな坊主山です。繁つたものがない景色なんて考へられますか。稚内は煤けた小さい町でした。午前の七時頃着きましたけれど、船に乗るまでには二時間近くも待たなければなりません。野天の汽車のホームへ降りて、荷物置場のやうながらとした改札口へ出ますと、赤い襪をかけた少女が、船の出帆の時間を節をつけて呼んでくれるのですが少しも判らない。

改札口の前の踏切を渡ると、平べつたい驛がありました。待合室の中は鯨臭い。着ぶくれした神さん達や、長靴をはいた男達が、一様に鯨の匂ひを持つてゐる。まるで露西亞の農奴のやうな姿です。構内ではうどんや蕎麥を賣つてゐます。鯨臭い神さんや男達が、熱いうどんや蕎麥をふうふう吹きながらうまさうに食べてゐるし、板のベンチでは露西亞人の太つたきたないお婆さんが、熱い牛乳を飲んでゐました。漁場行の數組の家族達が、板のベンチに坐つて辨當をひろげてゐたり、鰯粕の臭いのを背負つてゐるもの、ゲートルを巻いた材木商人、袖丈の長い白抜きの紋付を着た色の黒い藝者、宿引き、こんな人達が、各々思案あり氣に、一二時間すれば一緒の船で皆海峽を越えて行くのです。

港町としては、私が今までに見たどの港よりも佗しく、それに第一暗くつて、町の屋根の上に鳥の多いのさへ陰氣に思はれます。驛の前の宿屋の軒下には、信州の山の中で食はせる、太さが小指程の竹の子を薪のやうに束ねて百姓風な女が賣つてゐました。椎茸も賣つてゐるやうでしたが、こゝの椎茸は蛙のやうに大きくつてぶはぶはしてゐます。

荷物を船へ頼んで、私は此冷えたやうにひつそりした町を歩いてみました。町は色々な匂ひを持つてゐます。昆布臭かつたり。魚臭かつたり。石炭臭かつたり。私はそこで、これらの色々な匂ひから、色々な聯想を愉しみながら戸を開き始めた商店や、まだ灯のあかあかについてゐる澤山の宿屋の軒をひろつて、石炭殻と砂でしめつてゐるやうな道をぼくぼく歩きました。街路樹もあるにはありました。がまだ枝ばかりなので、私には何の木だかよく判らない。道路の正面には寺がありました。鉦力屋根

なので、一寸寺のやうには思へませんでした。

だが如何にも北海道の北のはづれの港らしく、私は、町に漂ふ匂ひのなかから雪深い冬の此の町の姿も考へてみるのです。吹雪で船が出なくなると、宿屋と云ふ宿屋は海峽を渡るお客でいつぱいになるさうですが、此稚内ではこんな挿話もあると聞いた事があります。

また高等學校の學生であつた私の知人が、冬の樺太へ氣まぐれな旅行をこゝろみた折、此、稚内でも何日も吹雪に遇つて、陰氣な宿屋でごろごろして船を待つてゐた時の事ださうです。二週間も船が停つてしまふと、泊つてゐる旅藝人達は、その一座の小さな女優達を一晚遊んでくれないかと云つて來るさうです。知人は別に富裕でもなかつたが、故郷へ電報を打てば何とでもなる人なので、まだ十五歳にもならない小さい女優さんに、別に遊びもしなかつたがいくらかの金を與へてやつたとか云つてをりました。私は雪の頃の繪葉書を驛の賣店で二三種買ひました。その中で、一番素敵な風景をお送りしませう。活動小屋に立てかけてある繪看板が、雪で半分も埋もれてゐる稚内町の寫眞も見ましたが、その半分顔を出してゐる活動の立看板の繪が大昔の椿姫なのです。

小さい町をひとまはりして、驛へ來ますと、私達の乗る亞庭丸が眼のさきにありました。昨夜は霧が深く、海上で漁船と衝突してしまつて入港が遅れたのだと云つてゐました。漁船の方が浸水してしまつて、生死不明が二三人もあつたと聞きました。夜の宗谷海峽は霧が深いので時々こんな事が

あるさうです。

私達は切符を切つて貰ふ爲めに長い行列をつくりました、何だか出稼ぎに行く氣持がしないでもありませんでしたけれど、それよりも、津輕の海を越え、いままた寒い宗谷海峡を渡らうとしてゐる私の氣持は索寞としてゐます。

行列の中には、札幌で同じ宿へ泊りあはせた、ウテナクリトムのマネキンの女達が、戦線へ乗り出して行くやうな元氣な姿で這入つて來ました。どつちからともなく、「また御一緒になりましたねエ」と話し合ふ。皆綺麗で、遠い旅地にあるせゐるか、女達が子供のやうになつてゐて、暫くは私も此ひと達の爲めに旅情を慰さめる事が出來ました。

「何人でいらつしたのですか？」

「八人で來たんですけど、函館で四人づゝに別れて仕事してゐるのです」

可愛い女達でした。久し振りに都會のフンソウをした女達を見ると、何とない煙草のやうなシゲキも感じるので。切符を切つて貰つて小蒸汽船へ乗ると、案外波が靜かでした。はいけになつてゐる此渡船は、まるで佛國のデイエツプの港の船のやうに誰も皆立つたまゝなのです。

本船の亞庭丸は小綺麗な船でありました——これから八時間あまり船の上です。

甲板の上を歩いてゐると、何度となく雨に遇ひました。風は冷たく強く吹いて帽子も何も飛びさう

でした。天氣のせゐるか海は灰色で、水平線がまるで見えない。

私はマネキンの人達と二等へ乗りましたが、此船の二等は、臺灣通ひの朝日丸や大和丸よりずつと亂暴で、ホールのやうな廣い一部屋に、座蒲團を二枚敷いて陸へ上つた鮪のやうに私達は横になるのです。私は三等室の方へも降りてみました。

こゝは満員で、二等の中途半端な私達と違つて、唄をうたふ人や、泣いてゐる子供、初めて働きに行く漁場について心配さうに親方に相談してゐる家族達、暗い三等室でしたが、仲々活氣があつてよろしい。私は三等室の圓窓から海をのぞいてゐる小さい女學生を見ました。樺太の兩親のもとへでも歸つて行くところなのでせう。三等室の持つあの温い匂ひは何となく懐しいものです。二三時間は夢も見ないで私は寝ました。

船では遅い晝食をとりましたが、食卓もマネキン達と一緒に仲々に愉しく、喫煙室では樺太新聞の記者と、軍人と、私で、三日も遅れた東京の新聞を讀むのです。東郷大將のお亡くなりになつたことも此旅で知り、また船の中では、三日も遅れた新聞の上から、お葬式の模様や、東郷大將の青年の頃の美しい寫眞もしげしげと見るのです。

氷雨でも來さうな暗い海。大泊港へ着いたのが午後四時頃。稚内よりも少し派手で波止場は小ビルディングのやうでした。

大泊よりこれをポストに託します。

お元氣でいらつしやいますか、豊原には夕刻六時頃着きました、道が悪くて、ぬかるみの多い町です。驛の前にはパン屋の馬車のやうな箱型の青色の馬車が一臺、廣場にぼんやりたむろしてゐました。驛の前は仲々廣いので、四方から寒さが来るやうです。私のずうつと頭の上の方にも空氣があるのでせう、こゝには低いところに空氣なんぞまるでないやうに深とした黄昏で、町の雑音がキレイに聴えます。寒くて、海邊から遠いせゐなのか何だか清潔に思へました。こゝも北海道と同じく、高い建物がないので空ばかり大きく見えます。

此豊原に来るまでに、一時間あまりの車窓を見て驚いた事は、樺太には野山といふ野山に樹木がないことでした。——朝鮮には樹木がないと云ふことを昔からよく聞き、自分もさう思ひ込んで、シベリヤ通過の折、わざわざ朝鮮經由で行つたのでありましたが、その折の記憶は、大した禿山でもなかつたことでした。ポプラもよく繁つてゐて、灌木の葉の色も見事であつたのを覚えてをります。——旅前、樺太の地理を調べて、樺太に樹木がないと云ふことは、現在こゝへ来るまでは少しも知らなかつたのです。どのやうに樺太の山野を話していゝか、まるで樹の切株だらけで、墓地の中へレールを敷いたやうなものです。

私は大泊までお迎へに来て下すつた友人達に、「いつたい、これはどうしたのですか！」と驚き呆れ

て訊いたものです。

行けども行けども墓場の中を行くやうな、所々その墓場のやうな切株の間から、若い白樺の木がひようひよう立つてゐるのを見ます。名刺一枚で廣大な土地を貰つて、切りただけの樹木を切りたふして賣つてしまつた不在地主が、何十年となく、樺太の山野を墓場にしておくのではないでせうか。盗伐の跡をくまます爲めの山火や、その日暮しの流れ者が野火を放つて、自ら雇はれて行くものや、樺太の自然の中に、山野の樹木だけはムザンと云ふよりも、荒寥とした跡を見ては、氣の毒だと思ひます。樹が可哀想です。

私は植物がたいへん好きです。花や雑草や、樹のない土地を考へてみて下さい。幸ひなことに、一望千里の切株だらけの樺太の山野に、いま草だけは六月らしく萌え出してゐました。中には焼けた株の根から、小さい芽を出してゐるのさへあります。

汽車の中は私には様子の知れない洋服の紳士諸君が多い。どのひとの顔も樹を切りに行く人の顔に見えて仕方がありません。私は左翼でも右翼でもありませんが、此様な樹のない荒寥とした山野を眼にしますと、誰にともなく腹が立つてならない。樺太の知識階級の夫人達は、ストーヴのそばで景色も見ないで編物ばかりしてゐるのでせうか。女が、平氣で此切株だらけな朽ちた山野を看過してゐるとするならば、それはもはや、植民地ずれがしてゐるとしか云へません。

内地にをれば春になると一坪の庭に沈丁花をめで、夏は朝顔を植ゑ、秋は菊の手入れなんかをする

ではありませんか。せめて、女の人達からでも樹をいたはる運動をおこしてほしいものです。實際、樺太の樹木は、いまお化けのやうです。この茫漠たる山野の冬景色を想像してみますと、後から後から此土地に轉じて行く人達を氣の毒にさへ思ひます。

豊原の町では多くの新聞人に遇ひました。二三人の中學校の先生にも遇ひました。皆、素朴でした。豊原の町では花屋ホテルに泊る。東京を出て二週間あまり、妙に音楽が聴きたくありません。此宿は明治風なコンクリートのガランとした建物で艶がない。北の果てへ來て、宿屋のゼイタクは云へませんが、肩の張らないところがみつけない。階音が半音づゝ狂つたピアノが夜通し聴えます。それさへも聴けば有難くて、今の私は涙があふれさうなのです。私は、どの旅でも不思議に思ふのですが、小説の眞似事を書いて旅がすくひとなつてゐる現在の私を、かうして孤獨になつてみて初めて自分をそつと視まはしてみるかたちなのです。

私は北方の旅の宿屋宿屋で、古いものから自分の作品を丁寧に読みかへしてみました。丁寧に讀んだと云ふ氣持は自惚れて讀んだ意にとらないで下さい。外國の作家のものや、日本の先輩の方達のものとは度々機會をつくつて讀むのですが、自分の古くなつた作品を讀むと云ふことは仲々困難です。私はいま、再出發をするほのぼのとした氣持を感じてをります。今度こそ自分のものを旅空で讀んでみて思ひ知つたかたちです。そんなことはをかしいことでせうか。

ピアノをまだ階下の方で弾いてゐます。ぽつんぽつんとした流行唄だけに、仲々此三文音楽も風趣がある。たうとう雨になりました。こゝは日の暮れるのが内地より一時間位遅いやうに思はれます。春へ逆もどりしたやうな風景と季節を見ますと、私はまるで家族なんぞ遠くになつてしまつたやうな氣がしてなりません。

鐵火鉢に山と積まれた炭火や、古い疊の汚點を視てゐますと、もう、その部屋に何年とゐるやうなうら淋しさも感じます。

お元氣であて下さい。

ピアノの音がまだ聴えてゐる。どうもあんまり雨だれ式の音を聴きますと、自分の考へが亂杭齒のやうに思へて舌も出したくなる。此旅が終つたら、健康な仕事を始めたいと思つてをります。まあ、一字も書かないせいで、こんなに仕事仕事と云へるのかも知れませんが。

夜は、小雨の中を、數人の人達と共に、豊原の町のカフェーに連れて行つて貰ひました。プリンスと云ふ酒房ですが、改築なかばのせめか大變きたない。もう、此様なところで建物のことなど云へませんけれど、どうしてこんなに味も艶もない建物が多いのでせうか、女給さんは威勢のいゝのがあつす。非常に疲れてゐる。午前一時です。

植民地の官員に、大變馬鹿にされた話を書きませう。明治風なガランとした宿屋に泊つて、朝早く電話で私を呼びおこした人は誰だと思ひになりますか。文學の好きな青年でもなければ、新聞人か

「警察からお電話でムいます」

「あゝさう、どなたですか？」

「何時來たのかね」

「昨夜參りました。何か御用事ですか？」

「一寸來いよ」

「貴方はどなたですか？」

「もと中野×にゐたものだよ」

「はあ、さうですか、何の用事でせう？」

「まアやつて來いよ。見物位させてやるよ。アーン」

「そんなところはこはい、からまつびらですよ」

「何かこはいことをしてゐるのかね。こはいことをしてゐると……………ハツハツ……………」

「貴方は何と云ふ方ですか？」

「××と云つてたづねて來いよ」

朝八時、寢覺めに、こんな無禮な電話を聞いて快く警察へ御アイサツに行けるでせうか、まづ樺太の第一印象はめちやめちやです。

「まさか藝人ぢアあるまいし、人を馬鹿にしてゐる」さうは思つたのですけれど、また考へてみると、こつちの神經などおかまひなしで一流の好意をヒレキしてくれたのであらうと、そのまゝアイサツに行く氣などさらになく、雨なので、宿の空地に見える青草など眺めて、そのまゝ「厭なところだ」とおもつてゐました。

外はさらさらした小雨なのですが、合の洋服だけでは寒い位です。

晝前、朝日新聞支局の横田氏の御案内で、樺太廳へ樺太についての概要を書いたパンフレットを貰ひに行つたのですが、こゝでは警察部のえらい役人で黒石と云ふ方に遇ひました。廣い部屋の大きな事務机にぼつんと本を讀んでゐた黒石氏は、仲々温厚な人で、六月にはいつてもストーヴのいる樺太のお役人らしい地味でひっそりした方でした。私達はまづ旅行の愉しさについて語りあひました。帝大の何科を出られた方か判りませんでした。ちつとも高ぶらない話ぶりは、さつきの電話を思ひ出して、同じ植民地でも人々で違ふものだと、旅の話、文學の話、故郷の話などをしてゐる折でした。一人の巡査が這入つて来て「やア、こんなところにゐたのか」と私を視るのです、顔が青くて細髭がピンとしてゐて、肩に金筋がある。

「君は杉並だねえ」

「私は杉並ではありません。淀橋に七八年現在まで住つてゐますけど……」

「中野に何日位ゐたかね？」

「十日です」

「誰が調べた？」

「警視廳……××と云ふ方です」

「××？ ふんきいたことがないねえ」

さつきの電話の主らしいのです。私は歪みさうな自分の表情を一生懸命こらへてゐました。黒石氏も横田氏も呆つけにとられて黙つてゐられる。

「私は貴方の顔に少しも記憶がないのですが、人まちがひではないでせうか？」

「俺はよく知つてゐるよ。君はシンプで這入つて来たぢやないか」

私は、つひに不甲斐なく泣き出してしまひました。旅空に来てまるで被告あつかひにされた此様な暴言にはたへられなかつたのです。黒石氏も初めて気がつかれて、まアまアと、その巡査を部屋から去らしたのですが、私は旅先であつただけに、ほんとうに佻しい氣持でした。

横田氏と黒石氏の間に、今の巡査のたいどについて、「あなたの部下にあのやうな人がゐるので、實に憤慨にたへない」「いや、あんまり馴々しいんで林さんをよく知つてゐるのかと思つたので

す」と、随分長い間論じあつてゐられました。私が根からのその方面の闘士でもあつたら平氣でゐたかも知れませんが、妙にガマンが出来ない程、穴の中へ落ちこみさうなのです。二人の紳士が問題にするしないで論じてゐられる間、私は宿へ歸つたら北海道へ逆もどりしようなんか考へてゐました。雨で陰氣なせみか、神経が焦々してなりません。どんな理由であんな人間に私は侮蔑されなければならぬ理由があるのだらうか、何も云ひかへし一ツ出来なかつたのでよけいに自分に腹がたつて仕方がないので。第一、こんなところにあたくない心でいっぱいです。何割かの植民地手當で、これだけ威張つて……土地ですから、サツバツで山野の樹木のなくなるのも當然のこととせう。

横田氏や、こゝで敷香まで道づれになつて戴いた朝日の佐藤氏達に慰さめられて、昨夜のプリンスと云ふカフェーに行きましたが、心の中が重くて仕方がない。とに角、こんなところは早く引きあげるに限ると思つてをります。随分くだらないことを書きおくりましたが今日はこんなことで樺太の第一日が暮れました。仕事さへ元氣で出来れば、まア平氣になれませう。ホテルでは相變らず洋琴が鳴つてゐます。空氣が澄んでゐるせみか旅愁、さうなりです。

3

東京も梅雨でせう。こちらは今日も雨です。寒くて我慢してゐるつもりでも唇がガチガチする時が

あります。

今日は小雨の中を朝早く小沼の養狐場へ行つてみました。朝日の横田氏、佐藤氏、淀川氏達と、小沼まで汽車が一緒で、佐藤氏だけ落合まで直行。私達三人は小沼の驛に降りました。まるで山岳列車でも降りさうな小さい驛です。

實に寒い。鐵道の官舎の間を抜けて廣い街道へ出ると、茫々たる寒地です。街道の兩側には、莖の太い路が繁つてゐて、水芭蕉といふ海芋のやうな白い花が點々と咲いてゐます。鼠色の幕を垂れたやうな暗さです。肌を刺すやうな冷たさに逢ふと、私の顔は血色がよくなつて鼻の頭まで紅くなります。街道が廣くて寒いせゐか、農業試験所まで行くのに一里ばかりも歩いたやうな氣がしました。木造りの農業試験所の事務室ではまだ大きなストーヴに火を焚いて、洗面器の中から湯氣が立つてゐました。六月だと云ふのに實に寒い。雨のせゐでせうか。

此小沼と云ふところは、豊原から北へ北豊原、草野と二ツの驛を越した所にあるのです。此町は近來とみに狐を飼ふことが盛んで、個人で二三四飼つてゐる家はざらにあります。農業試験所ではこゝろよく案内して下すつて、遠い路を私達は養狐場までついて行きました。どなたか宮様がお見えになつたとか云ふ事で道は大變キレイでした。それに途中の風景は試験所へ行くまでと違つて大變いゝ。どろの樹や白樺や榆やトド松などの樹林があつて、雑草の原にはるり色の忘れな草が盛りでした。仲仲遠い道でしたが、養狐場へ來て見ると、四圍がひっそりしてゐて、廣い金網の一劃一劃に住居を持

つた狐が、屋根の上にあがつてゐて、ちぐちぐとうづくまつてゐます。何を見てゐるのか、瞳は常に空の方へ動いてゐる。

いまは毛の抜けかかはる時だとかで、どの狐もやつれてみえましたが、林に圍まれた廣大な金網の中の狐は、やつれてゐるだけに野性的で美しい。金網の中の住居の下は雑草のまゝで、その中にまで忘れな草が青色の花をつけてゐます。金網の前の養狐場番人の家では、乳から離れた小狐を茶箱のやうな大きな木箱で飼つてゐました。どれを見てもまるで猫のやうです。鳴聲は猿のやうだし、大人になつた狐の鳴聲の方が何となく淋し氣で、赤ん坊は鳴聲にまで個性がない。此小狐たちは牛肉と玉子と牛乳でそだてられるのださうですが、臺所を見ると仲々セイタクなものでした。養狐は有望なので、手辨當で手助けに來る男達があるとかで、飼育場の土間には、火を圍んで手助けの男達が集つて茶を飲んでゐました。

歸りは此氷雨の中を強行して驛へ走つたのですけれど、汽車が出てしまつたあとなので、豊原まで乗合自動車に乗りました。酸性土壤とでも云ふのですか、窓外は、何か荒漠としてゐて、地味豊かに思へません。こけら葺きの住宅續きの中に、時々露西亞造りの丸太小屋があつて、桃色の肌をした露西亞人の少女が、着物を着て學校から歸つて來るのに逢ひます。

パンを商ふか、靴屋でもやるか、おほかたそんな風なことたつきをなしてゐるのでせう。牛酪工

場の小さいのなども沿道にチラホラしてみました。此邊は、土がぼくぼくしてゐて、まるでシベリヤの小村落のやうです。

夜は、私のために小さなカンゲイ會がありました。

豊原の中學校の英語の先生が二人、土地の新聞記者のひとが三四人、肥後と云ふ官吏のひと、司會者は朝日の横田氏、誰も文學の事については話しあはなかつた。料理の話や、鯨を追つて移住する女の生活や、またこゝでも各々故郷について名乗りあふのです。故郷の話をするには、此様な遠い地に來てゐる人達にとつて一番懐しいことに違ひありません。

私はひどく物覚えが悪いので名刺を戴いてもすぐ肩書の方を忘れてしまふのですが、私の隣席に何とかと云ふ肩書のついた肥後氏は、鹿兒島縣の出身で、「何か一つ唄でもうたつて下さい、まづ先輩の肥後さんからどうぞです」と所望すると、素直に石の地藏さんよと唄はれるのでありました。——豊原では最早えらい人の部に屬する方なのでせうが、如何にも苦勞人らしく、ちつとも高ぶらない人です。宿屋へ歸るとまたあの洋琴がなつてゐる。淋しいので西鶴の諸國咄を少しばかり読みました。

4

早朝七時いよいよ敷香キカへ向ふ車中です。

窓外は蕭々たる山火の跡ばかりで、此陰惨な木の墓場は寫生するにも困難です。戦場の跡のやうな木の根株ばかりの林の上を鳥が餌をあさつて低く飛んでゐます。

樺太概要の林業と云ふところを展いてみますと、——本島の森林は斧鉞の入らない自然林で老壯の緑樹群生し且つ天然の稚樹林内に密生して後繼森林の素地を造つてゐる。其面積實に二百餘萬ヘクタールで總面積の三分の二を占めてゐる。林種としては針葉樹林が多く、潤葉樹林や針潤混樹林は之れに亞いでゐる。而して樹種は約百二十二種で其内喬木は四十九種、灌木は七十三種に分類されてゐるが、實際利用價值のある材木はエゾマツ、トドマツ、グイマツ、イチキ、シラカバ、ドロヤナギ、ハシノキ、タモ、等で之等は殆んど一定して。(中略)——大正八年より大正十二年に互り松蝨發生してその虫害木は急速處分する必要上、大正十一年臨時森林作業官制を發布し、官營に依る虫害木の斫伐事業を計畫し、大正十一年より事業を開始し、昭和元年度に於て大體完了を見るに至つた。然るに昭和二年には森林作業所を改稱し、生木の官行斫伐事業に着手した。昭和五年一月官制改革の結果、森林作業所を廢し、事業の實行は各林務署に於てし、其企畫並に監督は林業課に於てなすことになつた。——これだけ讀んで來て、どのやうな現在の山野の姿が目には浮びますか。「老壯の緑樹群生し」と云ふ一文をもう一度私は讀みかへしたのですが、樺太のどの邊に、此老壯の緑樹が繁つてゐるのでせうか？ 私の眼に寫つた、大泊から豊原に至る間、豊原から、北豊原、草野、小沼、富岡、深雪、大谷、小谿、落合の沿線に見える一望の山野に、私は樹らしい木を見ませんでした。文字通り焼野原で

あつたり、伐材した生々しいまゝだつたり、これがもし人間であつたならば、夜になつて鬼火でも燃えあがる事でせう。

私は車中で、一王子製紙の社員に、何故植林をしないのですかとたづねると、「まあ無盡蔵ですからねえ」と云ふ應へでした。植林もしてゐるのでせうが、伐る方も忙しいのでせう。樺太は此樹木のお蔭で、王子製紙工場が、殆ど全島に勢力を持つてゐます。列車の中も、鐵道員と王子製紙の役員でにぎはつてゐます。

或人は、樺太島ではなくて、王子島だと云つた方が早いと云つてゐました。どの驛へ着いても、木材が山のやうです。

車中は朝日の佐藤氏と道連れで退屈しませんでした。——落合には二時間で着きました。食堂がないのでこの驛で辨當を買つて、發車までには二三分も間がありますので、ホームの外へ出てみたり出來ます。こゝで經營が變つて、樺太鐵道になるのですが、いまはまだ、此鐵道は新聞までしか行きません。元、此落合町は、ガルキノウラスコエと云つて小さな寒村だつたさうです。現在では王子製紙株式會社落合工場があり、仲々大きい町です。

こゝで私は、まるで女優さんのやうに、樺太鐵道の女事務員の人達に、サインと云ふものを頼まれました。何とこつけいな派手な旅でせう。

サルファイトパルプや、クラフト紙の製造を、こゝの落合工場ではやつてゐるとか聞きました。隣

席にゐた黒羽織の婦人は、十歳位の子供を連れて、よく食べよく話をします。私は眠くて仕方がない。落合を出て六ツ目の白浦と云ふ町へ着くと、露西亞人のパン屋が、「パンにぐうぬう。パンにぐうぬう」とホームを呼び賣りしてゐる。このパン屋は、仲々金持ださうです。美味しいパンだと聞いてをりました。あまり美味しいパンとは思ひませんでした。味は子供の好きさうな甘さで、内地で日本人の焼いたパンの方がよつぽど美味しい。野天のホームには電話室のやうな蕎麥屋も出てゐます。樺太の土地は馬鈴薯や蕎麥を植ゑるに大變いゝらしい。だからでせう、時々ホームで蕎麥を賣つてゐるのを見かけます。——女の人達は着ぐくれしてゐるやうに着込んで、こゝでは季節が何時も冬らしい。そろそろオホーツクの海が見えます。雨もよひのせるか、髪洗粉を流したやうな灰色の海です。

高山らしい山と云へば、知取の町近くになつて、樫保三つ富士と云ふ七八百米位の三ツに盛りあがつた峰が見えました。品のいゝ姿です。線路に添つた野原には、森林愛護と云ふ立札を所々見ます。

知取に着いたのが午後三時頃。いゝかげん體が痛くなりましたけれど、窓外のオホーツクの海は、荒れてゐて、それに暗いので、何だか心に徹して來るものがあります。こんな、暗くて孤獨な海の色を見たら、誰だつて手紙が書きたくなるに違ひありません。地圖を見て下さい。線路が海へおつちさうにすれすれですけれど、長雨が續いたので、本當にこゝでは汽車が滑り落ちさうに道が悪い。此地方には石がないので、材木で杭がしてあります。

知取の町は豊原よりにぎやかかも知れませんが、それに第一活氣があつて、まるでヴォルガ河口の工

場地帯のやうでした。灰色の工場の建物は稍々立派です。煙が林立した煙突から墨を吐き出してゐるやうなのです。こゝでは新聞紙やマニラボール、模造紙、乾燥パルプをつくつてゐます。

同じ列車に乗りあはせた、四五人の東京から来た紳士がありました。××堂と云ふ本屋の重役だとかで、王子製紙の役員のお出迎へが大變なものでした。面白いことに、列車の間中此人達は金の勘定で忙がしく、窓外の景色もない程、自動車賃だの辨當代だのメモへつけてばかりゐて大變のやうでした。

山野にしゝうどの武骨な花や小さいくろゆりの花などが點在してゐて、知取の町を出はづれると、此花々がひどく眼につきまます。長い雨で崖くづれがあつたのですが、今日は幸ひなことに徒歩連絡もしないで濟みました。だが、知取と新聞の間は、一寸刻みの徐行です。北へ北へと行くほどオホーツクの海は黄灰色で暗く、何の魚か時々さまざまに海上を飛びはねてゐるのを見ました。

内地の海邊を走る汽車とは全然違つて、海の景色はひどく大陸的です。——新聞には四時頃着きました。

此邊からまた二月頃の季節に逆もどりしたやうな寒さです。私はトランクから袖なしジャケットを出して着込みました。新聞の驛はトラック建で、臺所のやうに小さい改札口を出ると、乗合自動車やハイヤーが四五臺並んでゐて、もう蟻のやうな人ばかりです。

「荷物！ わしの荷物誰持つて行つたア」と叫んでゐる漁師の神さんや、「姐さんハイヤーにしべよ」と、水色の鹿の子をひらひらさせた酌婦連れが、三味線袋をかゝへて自分達の乗つて行く自動車を探してゐたり、私達は、早々と練臭い乗合自動車に乗りました。壽司づめの満員です。リュックサックにせうちゆうを買ひこんで来たと自慢してゐる土木工や、林務署の役人、漁師、かう云つた人達が、肩と肩をつきあはせて乗つてゐるのですけれど、豊原のあの不快な思ひ出から、私は早や段々愉しくなり始めてゐます。此乗合自動車はまるで荷物船で、私の脚の横には野菜籠が同居してゐるし、魚臭い爺さんが一寸ほど私のひざに腰をかけてゐて、内路と云ふところまで身動きが出来ませんでした。——この自動車の沿道は、いままでの山野に輪をかけたやうな凄しい山林地帯で、これがまた全部森林のお化けときてゐるのですから。緑の芽をふいてゐる雑草の中に、歩けない程デグザグの巨木の根ばかりなのです。枝だけおとして燻けたたまゝ立つてゐる木が山の起伏一望なのです。私が樺太の樹々について、一人で悲しんでゐるやうですが、このむごたらしい山野の景色を、うまくお傳へすることは困難です。

此先にはいつたいどのやうな町があるのだらうかと思ひました。逞ましい鳥が何羽となく、自動車の近くを飛んでゐて、ちつとも驚かないのです。焼棒杭の森林の中に、無数の鳥が胡麻のやうに散つてゐる。

段々夕陽が赤くなりましたが、まだ、陽は高く、内路の町へ這入ると、アイヌ造りの燻製とでも云

ふのでせう、廣場に火を焚いて、朝鮮の女が鯨をすだれのやうに下げていぶしてゐました。南新聞から此荒野を走つて三時間で敷香へ着きます。敷香の町の入口へ這入るには一哩ばかりの砂地の渚の中を自動車が行ります。オホーツクの海水を浴びて走るところは寒いながら仲々壯快でした。

敷香の町へは、やつと日暮れてはいました。空は黄昏の色なのに、私の時計は九時を指してゐます。薄暮の長いのは巴里と同じ。豊原よりもまだ空気が澄んでゐて、物賣りの鈴の音が非常に美しい。町幅が広いのでまるで練兵場へ灯がついたやうな淋しさでした。新興都市だけに町も若く、宿へ着くまでの家並は、どの家の木口も新しく、また建築中の圍ひのあるのもめだちます。

道路は砂地で、歩いてゐる人達の肩がふはふはして見える。秋田屋と云ふのに宿を取りました。幌内河畔の宿なので河岸には色々な倉庫が並んでゐました。六月の中旬だと云ふのに、部屋へ這入ると、炭火が来るまで脚から冷えて来るやうな寒さなのです。

旅以來、初めて酒でも飲みたいやうな夕暮れでした。佐藤氏を誘つて夕飯を共にしました。

淋しやな北の果につきたりの感じでした。佐藤氏は社用なので國境まで行けないのが残念だと云つてゐられた。明日私は國境へ行つてみるつもりです。食後風呂にはいり早々に眠る。——明日早く起きて、幌内の河口へ一寸行つて鱒漁をみたいと思つてをります。

5

豫定の時間よりずつと遅く眼が覺め、周章で飛びおきると、早や佐藤氏は宿の番頭と河口の方へ散歩に出られるところでした。支度もそこそこ走つて行く。幌内の河口は、倉庫の横を曲ればつい眼のさきで、土人が鱒をとつてゐるところでした。眼の下二尺近い鱒が銀色に弾けてつれるのです。霞網の様な長い網を一尺づゝたぐつて行くのですが、私が見てゐる時は、その大きな奴が三尾もとれました。土人は勿論和船とも丸木船ともつかない軽さうな黒い船へ乗つてゐるのです。

いまは内地人に漁を禁じてある時季なのですが、それでも密漁で大變なのださうです。敷香は人絹パルプ工場と、密漁と流木税でもつてゐる町だとも云ひます。一尾分けてほしいと云ふと、渚へ寄つて来て生きてゐるのを賣つてくれます。一尾五十錢で、大きな奴を買ひました。

朝食にはさつそくこれを料理して貰つて食べましたが、紅身が一枚一枚刺身のやうにほぐれて薄鹽で美味です。敷香へ来て初めて晴天に出あひました。肌を吹く風は北國の春風らしく、ツンドラ地帯を吹いて来る風だけに、何か烈しいものを感じます。

私は國境行を變更して、オタスの森の土人部落へ行く事にしました。國境行はまだ交通が不便なので、ハイヤーで七十圓位ださうです。安くても六十圓位だとの事で、五六人の同行の士をもとめるには仲々めんどらうです。

宿のぢき近くの渡し場から、幌内の河を渡つて行く敷香川が幌内川に注ぐ三角州のやうな島なので

すが、岸と云ふ岸は石崖と云ふものがありません。山から伐り出したばかりの木材の杭がうつてあり、オタスの島の船着場は、自然木のつないである筏の上へ上るやうになつてゐます。砂、砂、實に宏大なる砂地の丘で、船着場を上ると、向うに小學校がある。部落の小學校で授業があるのか森閑としてゐました。

珍奇な風景を描かないで下さい。九十九里あたりの砂濱を遠々しくして、ポツンと平屋の小學校を置いてみて下さい。こんなに孤獨氣な小學校が他にあるでせうか。私は山の中の峽にある小さい小學校も知つてゐますが、こんな孤獨さうではなかつた。

足の埋まりさうな砂地の廣場を越して、此學校の玄關へ這入ると、二十人ばかりの子供の履物がチヤント下駄箱へはいつてゐました。長靴だのヅックの短靴、ぼくり、それが小さいだけに何となく可憐で胸熱くなります。

廳で子供の歌聲がきこえました。私は無禮な侵入者として、授業中の教室を廊下の方からのぞいて見ました。教室は一部屋で、生徒は、一年生から六年生までいつしよで、大きい子供も小さい子供も大きく唇を開けて歌つてゐます。金属型の聲なので、何を歌つてゐるのか判りませんが、音樂的でさわやかです。臺所から出て來たやうな、太つた女の先生が素足でオルガンを弾いてゐました。

私は、此土人學校の校長先生に遇ひたいと思ひました。再び玄關へ出て、「御免下さい？」と云ひますと、臺所から呆んやり出て來た詰襟の男がありました。

「校長先生にお會ひしたいのですが……」

「はア、私が校長でございます」

校長先生は兼小使ひさんでもあつたわけで、さつきオルガンを弾いてゐられた女の先生と御夫婦きりで、此學校をやつてゐられる由。校長先生は、見るからに素朴で、何だか喜劇の中に出て來る田舎の先生型と云つたところ。校長室に這入ると、土人の手藝品や、土人のもちひてゐた色々の着物が壁へさげてある。——熊追ひと云ふ鳥の姿を御ぞんじですか。南國の鳥類も見事ですが、北國の鳥もい。この熊追ひと云ふのは、鳥位の大ききで、鳥のやうに大ききつて、姿は鳩のやうです。只くちばしが少し鋭い。頭の頂は火がついたやうな紅色で、熊の出る頃部落へ出て來るのでせう。また白梟と云ふ眞白くてむくむくした鳥も見ました。雷鳥みたいでしたが、これ等の美しい鳥が、校長室の壁にかけてあり、私は暫くその鳥の美しさに見惚れるのでありました。

廳で校長先生は子供達の圖畫を取り出して來て見せてくれましたが、皆、子供の名前が面白い。「オロッコ女十一歳、花子」「ギリヤーク女八歳、モモ子」などと書いてあるのです。描かれてゐるものは、馴鹿だとか熊の繪が多いのですが、風景を描かないのは此地方が茫漠としたツンドラ地帯で、子供の眼にも、風景を描く氣にならないのだと思ひます。

女の先生もいゝ方です。子供へ對する話ぶりは仲々亂暴ですが、愛情のある教授ぶりでした。砂でざらざらした廊下の上には鶯の籠がぶらさげてありました。「淋しいでせうねえ」と云ふと、「大變い

いところで、かへつて外へ出るのが不安だ」と云つてみましたけれど、此老教師夫妻は實に自然人です。學校を出て部落の中を少時く歩いてみました。板倉式家屋とか云ふのなさうですが、低い丸太小屋造りが多くて、河に面した小屋の前には、艶のいゝ樺太犬が何匹もゐます。河岸には、キスのやうな色をしたキウリと云ふ魚がすだれのやうに干してありました。

人家の裏は草原で、高山植物のある地帯です。馴鹿王ウイノクロフ氏の住居は、部落のはづれにありましたが、白レースのカーテンが下りてゐて、家族は馴鹿を追つて行つたので皆留守だと云ふことでした。

ウイノクロフ氏の住居だけは仲々ハイカラでヒュツテのやうです。裏へまはると二階建の物視のやうな物置があり、白樺の若木がゆさゆさ繁つてゐる。四圍は高山で見るあの澄んだ緑です。草原には二つ三つテントが張つてあり、蒲團がはりの毛皮が干してありました、梢からもれる陽の光は、まるで水のやうに涼しく、沁みるやうな緑でした。こゝでは白樺の梢に閑古鳥のとまつてゐるのを見ました。カンコカンコ舌を叩くやうにして、私の頭の上を人おちもしないで閑古鳥が行き交つてゐるのです。私は眼を閉ぢると、長くゐた豊原の町の姿を忘れさうになりました。心に沁みるものがなかつたせいでせう。此オタスの草原の風景は、妙に哀切で愉しい。私はこゝまで来て、一切何も彼も忘れ果てる氣持でした。

私はこんどの北方への旅立ちには、仕事のゆきづまりとか云つた、そんな生やさしいものではなく、

妙に眼にみえない色々のわづらはしさから放れたい爲めの旅なのでした。私は無價値な才能もない女なのに、妙にいぢけてしまつてゐます。

私は何か恐怖性にかゝつてゐるのかも知れません。

此島には、オロツコ族、ギリヤーク族、ヤクト族、キーリン族、サンダー族、などの人種があつて、何だかどの部落民の顔を見ても蒙古人のやうに見えます。三角型に葺いたオロツコの家へ「御免なさい」と這入つて行くと、暗い片隅で化粧をしてゐたオロツコ娘が、周章て、鏡を隠します。敷香の町の風評では、ウイノクロフ氏の長女に花婿がほしいと云ふことでした。大學を出て血統のいゝ日本人でなければ駄目なさうです。——ウイノクロフ氏は、名前は物々しいけれど、純然たる蒙古人のやうな顔です。馴鹿を四千頭も持つてゐるとも聞きました。此娘さんはガンジヨウな容姿です。

オタスと云ふ島の名は砂の多い所と云ふ意味なさうです。部落部落で丸太の檻にいて熊を飼つてゐるのも見ました。熊祭の夜には、部落の土人もカヌーを漕いで敷香の町のカフェーへ飲みに来るさうですが、更衣と云ふことをしないので、寄りつけぬ程臭いと云ふことです。

夜は町の小さい新聞社の人達に遇ひました。こゝの新聞は雑誌型のやうに小さい。——砂地の町には、それでも新開地らしい夜店が出て、カアバイトの光の下に、高山植物の植木屋も出てゐます。白い花で匂ひのいゝ、いそつ、いじと云ふのが盛りらしく、實にみごとです。道幅が十間位もあるので町が暗い。それに夜分は冷えるので、夏着で行つた私は、少々此寒さにはこたへました。こゝは如何にも

新興の町らしく、まづカフェーや料理屋が多い。シスカ會館と云ふ家では、二十人ばかりの女給が、メリンスのセーラアを着てゐて、何とも珍妙な姿でした。どうも、此様なところは私にはまぶしい。私は新聞の人達と、射的場へ行つて遊びました。こんなところだからこそ、鐵砲も持てるのでせうが、一發もあたりませんでした。

6

敷香では夜更けと云ふものがないやうな氣がします。夏のせみですか、夜中の二時にはほのぼのと明けて行きます。——私はつひに國境行を思ひとまらなければなりません。

せめて氣屯まで行きたかつたのですが、國境石のあるエハガキをお送りいたしました。こゝの國境監視人は、年始狀を四月頃受取るのださうです。月に一度ソヴェートの郵便交換も此國境であるのだとか聞きましたが、昨日はソヴェートの飛行機らしいものが、敷香の町の上に来たと云つて人達は大變さわいでみました。

幌内の河を上れば、ソヴェートのカザールスコエに達し、モスコイ川となるのですが、水は黄河の河のやうです。何時も雨水のやうに濁つてゐます。

今日は、町の町會議員乳井氏のモーターボートで幌内の河口を上り、たらいか多來加湖へ行きました。七月が近いと云ふのにこゝは随分寒い處です。

河畔の木は背の低い白樺やどろやなぎなどが多く、七月にはいると高山植物に花が咲いて美しいと云ふことでした。

廣い河幅で、岸は兩岸ともひたひたに低いので、オロツコの屋根などが所々見えます。船の持主の乳井氏は、此風景をストリンドベルヒの小説のやうだと云つてゐられましたが、此多來加湖畔の風景だけは變に内地のでもなく、また露西亞的でもないのです。船は遊覽船のやうで、汽車のやうな窓がありません。誰も部屋の中へはいつてゐるものがありません。飛沫が肩までかゝるやうな速度の中に、私達は、まるで子供のやうに、モーターの下へ水を汲みいれたり、生兵法にハンドルを握つてみたり、ちつともちつとしてゐないのです。

景色がどこへ行つても廣いので、身のおきばのなさを感じますが、つくつたやうな内地の湖と違つて、暗くて大まかで壯大です。一切の賭博的な氣持がなくなつてしまつて、しゃがんでしまひたいやうな愉しい氣持でした。

此多來加湖を最後として、私は早々に樺太を引きあげませう。

私の日記に、豊原の町は按摩のメガネ。

官吏はゐねむり。

女學生は雪やけでまつくろ。
 歸りは西海岸眞岡の方も廻りたいのですけれど、さて、どうなりますことか。おそらく、敷香ぐらゐ樺太中で、いゝところは外にないと思ひます。私はシスカと云ふ町を背景にして何か小さいものを書いてみたいとさへ思つてをります。近日敷香から鱒の鹽びきをお送りませう。またあとからおたよりいたします。(昭和十年六月)

私 の 好 き な 奈 良

奈良は、夏も秋も知りませんけれど、早春の頃の、まだきびしい風の吹くあの野山の景色をまたなぐいゝものに思ひます。

黄木綿の手拭ひを肩にした田舎の人達が、どこへ行つても、ちらほらしてゐて、私は、それ等の人達の行列の中へ、一緒にまぎれこんでみる時があります。奈良の景色を見るのに、私はパラソルなんかさしたくない氣持です。羽織の裾を吹く風の中に、早春らしい季節を感じることは、如何にも古都を歩いてゐる感じですが。奈良では大文字屋と云ふのに泊りました。離れのやうな部屋で幾枚かエハガキにたよりに書いてゐると、美しい琴の音がしました。どんな娘さんだつたのか逢ひませんでしたけれど、奈良の宿らしく思ひます。

また、奈良ホテルにも泊つたことがあります。終日池に面した部屋から、笹藪のゆさゆさするのを眺めてゐた事があります。奈良ホテルに泊るやうな、心おこつた豊かな氣持も捨てがたく有難いのに私はホテルを出ると、友人と二人で町のうどん屋に這入つて狐うどんをたべたりもしました。驛近い

大きいうどん屋で、汁のおいしかつたことを忘れません。奈良では古道具屋を見て歩くのが好きです。油壺の愛らしいのを見たり、古書の蟲の食つたのをめくつてみたりしたものです。奈良は空が綺麗だと思ひました。空が綺麗だから、古道具なんかの並んだ軒が深く、陳列の品々が、澄んで見えるやうな氣がします。

春日神社の裏の、土堀の中の墓のある寺も好きです。何時も二月頃出かけて行くものですから、奈良の記憶は寒々としてゐて、まるで支那の寒山寺あたりを歩いてゐるやうです。大佛様は母と二人だけで見に行きましたがもう此頃では、奈良へ行つても大佛様は御無沙汰がちです。ひまと金があつたら大和路の方を歩いてみたいと思ひます。なるべくペンキ塗りの藥の廣告や宿やの廣告の出てゐない田舎道を考へます。佛蘭西でバルビゾンと云ふミレーの生れた村に行つて見ましたが、各國のお上りさんが行くところなのに、その村は、ごみごみしたかざりで荒れてゐると云ふところがなくて、大變いい感じでした。

奈良は静かで心温い町ですけれど、方々にペンキの地圖や宿屋の廣告が出てゐて、一寸不快です。奈良の夜は素敵だと思ひます。動物園があつたのか、夜、寒いなかを森の方へ歩いてゐますと、つるなんかの鳴く聲を耳にしました。鹿も鳴いてゐるやうでした。到るところ鹿の群にあふのは、如何にも奈良らしくて好きです。

奈良は大昔から鹿がゐたのでせうか。

巴里の近くのフォンテンブローと云ふところは、丁度奈良に似てゐて、こゝにはサヴォイと云ふ夏のホテルがありました。大變立派なホテルです。そのホテルの硝子張りのルームで御飯をたべてゐた時、裏庭の芝生が、奈良の野山の感じだつたことを思ひ出します。景色の調つた美しさよりも、小さな芝生の面、一ツの木や、一ツの石にも、何とない古さのある景色は、まるで噴水の上の虹を見てゐるやうに、心靜かになるものです。奈良の、笹藪や、土堀の家々は、佛蘭西の片田舎にも似てゐて、一時出來の名所の眞似の出來ない床しいところがあります。

そのうち暑い頃の奈良にも行つてみたいと思つてをります。(昭和六年三月)

下田港まで

四月二十二日。私は下田の黒船祭を見に行きました。

修善寺から下田の港まで十二三里もあるさうですが、やつと天城越えをして、乗合自動車で下田の町へ這入りますと、町の中はまるで芋を洗ふやうな賑やかさで、女達が組をつくつて歩いてゐました。乗合自動車では、修善寺から、一組の美しい若夫婦と一緒にのでしたが、下田の町へ着きますとその細君の方が弱つてしまつて、「終點でムいます」と車掌が云つても、立てなくつていつときぢつとしてゐました。下田までは大變登りが多いし、それに天城の難所がありますので、私もかなり腰が痛くなりました。三時間位も乗つてゐたやうに思ひます。

自動車を降りると、別に荷物もないのでぶらぶら賑やかな方へ歩いてみましたけれど、さて私ははづかしい話ですが、どこか「はゞかり」を借してくれる家はないだらうかと、飲食店のやうなところをぐるぐる探して歩きました。

掘割のやうな細い町の川添ひには櫻が満開で、並木が瘦せて小さいだけに、ちよいと簪を突きたて

たやうに鄙びて見えます。川添ひの家は、すべて小料理屋風なものであるらしく、こばやしやだの、下田屋などと染めてある水色ののれんの下から、揃ひの衣裳の私娼たちが、まるで小鳥のやうに並んで客を呼びあつてゐました。私は小料理屋でない飲食店を二三軒も覗いて見ましたが、連日の祭で、「御めんなさい」と云つても、どの家も草臥れてゐるのか、誰も出て来ないので。で、私は橋のそばにある古風な荒物屋で、サイダー一本を抜いて貰つて「はゞかり」を借りたのでありますが、下田の商家の構へは、すべてゆつたりと氣持のいい建方でした。「はゞかり」へ案内して貰ふのに、鰻の寝床のやうに、暗くて長い土間を通つて行きましたが、その土間の途中には庭があつたり、井戸があつたり、子供部屋のやうなものがあつたりして、奥深い床しい商家でありました。「はゞかり」も大變廣としてゐて、まるで宿屋のやうに、どつしりした机のやうな臺などが造りつけてありました。「はゞかり」から出て来ますと、四圍に人かげもないのに、私の靴がちゃんとそろへてあり、これには大へん赤面したものです。

土間の途中の小さい泉水で色のいい金魚を見てゐますと、眞晝の空に暗雲に威勢のいい花火が揚つてゐました。泉水の横はすぐ通りになつてゐて、その境に鐵格子がしてありましたがその鐵格子に凭れて、艾を賣つてゐる商人が、盛んに人を呼び集め「二度とは云はぬぞ」と妙な事を云つて商ひをしてゐます。

店では鹽箱の大きな木の蓋の上に凭れてサイダーを飲みましたけれど、私は何だか到るところ吾家

といった氣持で、心に沁みる程、サイダーの味がおいしかつたのです。

「くらげみたいだぞ！」町の子供達が、路上で空を見上げアドバルウンを指して珍らし氣に見てみます。花火も随分ひつきりなしに揚つてゐて、黒船祭がいつそうハイカラな祭らしく思へました。

見やれ見やんしたか

下田の沖の

霧の夜明けの

鯨浮くよな黒船を

向う岸の橋の袂の小料理屋の二階で、何と云ふ琴なのか、針金のやうにザリンザリンと音のする琴で、大工のやうな頭をした男が、大きな聲で此様な黒船小唄をうたつてゐました。その琴を弾く手ぶりや、聲を聴かうとしてか、道も、白い橋の上もいつばいな人ばかりで、道路の商人までが自分の店を空けて聴いてゐるのです。

開港八十年で、町は二週間もお祭ださうです。子供達に「小さい宿屋を知らないですか」とたづねますと、何だか長いお祭で、子供達も變に呆けてしまつてゐるのか、「此町には小さい宿屋はないよ」と云ひます。

町を歩くと、白いセーラーの假裝の水夫たちが並んでゐたり、黒船を型どつた自動車や花車が、狭い道を練つて行きます。どこかで、晝御飯を食べなければと思つてゐますと、小學校の式場から米國

大使がお歸りなのか、日米の旗を持つた小學生達が小さい町に溢れて來ました。米國大使がおみえになつたので、町は餘計にさわいでゐるのでせう。——朝、グルー大使は驅逐艦で下田へお出でになり、午後三時には、またその驅逐艦島風で横濱へお歸りになると云ふので、私はせめて船だけでも見なければと、港へ行つて見ましたが、「島風」は最早船尾を曲げて港の外へ出てゐました。私も一度位驅逐艦へ乗つてみたいものだ、子供のやうにうらやましくなりました。船脚が速くて鮮やかで、遠くからはまるで銀灰色の銚のやうに見えました。

下田の町へ來るのはこれで二度目なのですけれど、去年のいま頃來ました時は、このやうにお祭ではなかつたので、町の中がひっそりしてゐて、靜かな波の音といつしよに、實に愉しい印象でしたが、お祭の下田の町は、大變焦々した町に見えました。だけど、如何にも新店のお祭氣分が出てゐて掘割の意氣な通りは、近在の若い衆が、赭い顔をして、たむろしてゐます。煙草おとしの鐵砲屋も仲々繁昌で、道が狭いので、鐵砲を打つ若い衆の肩や背中に、並木の櫻の花が散りかゝつてゐたり、まるで芝居のやうでした。

町の子供達が下田には小さい宿屋がないと云ふので、山を越した大浦海岸の保養館と云ふのに歩いて行きました。去年も大島の歸り、此宿で中食をしたことがありましたので、靜かな海邊もよいものだ、山を越して行きますと、どの家にも菜の花が盛りで、梨も櫻もまるで洗濯物のやうに亂れてヒラヒラしてゐました。陽もあたくかくのんびりしてゐました。小さい崖の下の小徑などは、普段はし

いんとしてゐるのでせうけれど、入通りが多くて、その人達が皆、笑つたり唄をうたつたりしてゐます。

大浦の海岸も、祭へ行く彌次川町あたりの人達が、後から後から列をなして通つてゐました。此濱邊にも、セルロイドの裝飾電氣がついてゐて、日米の小旗が賑やかに飾つてありました。大浦はとこぶしや海老がうまいのですが、しゅんでなかつたのか、魚もお祭で草臥れてゐたのでせう、大變大味でヒカンしました。海邊に來れば海のもの、山に行けば山のもの、旅をしますと仲々馬鹿にならぬ程そんなものが愉しみです。

ひややけき風をよろしみ窓あけて

見てをれば櫻しじに散りまふ

中食の後、縁側に出ると、庭の古木の櫻の花が、砂地の庭一面に散り敷いてゐて、私は牧水の歌を憶ひ出しました。

町の中は私にはまぶしい程賑やかなので、大浦から下田の港へ出る循環道路と云ふのをぼくぼく歩いてみました。循環道路と云つても、岩に添つてやつと一人が通れる程な小道で、海の展けた向うに、大島らしい島影が、雲のやうに見えます。その三和土で固めた細い道は、成程、行けども行けども循環道路で、吉田松陰の幽閉されてゐたと云ふ岩屋などもうかゞへるのです。

「さア、いらつしやい！ それそれいま大龜が怒つてゐるところッ！」

道の下の方には、大龜を観せる小見世物屋が出來てゐたり、遊覽船の發着所があつたりして、紅白の汚れた鯨幕の間から、紋付高帽子の町の有志が、胸に桃色のマークをつけて唄つてゐたりしました。私は偶と大人の運動會のやうな氣がしました。道は何時までも盡きるといふこともなく、近在の人達がぞろぞろ往つたり來たりしてゐました。

近在の若い衆らしいのが、四五人の娘連れを見ると、「俺は一番はじがえ。お吉みたやうぢや」と、娘達をからかつたりして行きます。お吉が、その娘のやうなのならば、色が黒くて、肉づきがよくて、目鼻立ちはエチオピア風にもりもりしてゐたのかも知れません。何しろ、朝五時に東京を發つたのですから、一里ばかりの循環道路を下田の港へ出た時は、酔つたやうに草臥れてしまつて、やつと、櫻並木のある掘割のところへ出ますと、私も町の人達のやうに、石の手摺りにいつとき凭れてしやがんでしまひました。

どんなに疲れても、旅のつかれは一寸休むと、仲々爽やかになるもので、眼が涼しくなつて來ますと、私の横にしやがんでゐた揃ひの衣裝の女の人に、「寫眞を撮らして下さい」と、寫眞機の蛇腹を擴げました。「あら、私酔つぱらつてンですよ。それでもいいですか」と、女達は三人づれで、早石の大燈籠を圍んで、笑つて見せるのでありました。成程、下田の女を見ては縞の財布がからになるはずだと、私も記念に、此優しい女達と、一緒に寫して貰ひました。床屋の若い衆に、シャツタアを切つて

貰つて、記念の寫眞を撮つたのでありますが、姿よく酔つぱらつたは、たちばかりの女が「ちよいと、出来たら送つて頂戴よウ」と鼻を鳴らして云ふのです。

「貴女の家はどこなの？」とたづねますと、七軒町新小林と云ふのです。「あの家ですよ」と指差されたのは、郊外の借家のやうな構へで、老けた女が煙草を吸つて、花火ばかり見てゐました。

私は大分疲れもなほつたので、掘割の突きあたりにある了仙寺と云ふのに行つて見ました。最早陽も暮れそめて、川添ひの花街の家々は、二階も階下も灯が霰のやうです。

了仙寺の門前には土産物屋の、わさびや椎茸を賣る店がやはり紅白の幕をかこつてゐて、聲高く客を引いてゐます。私は、門前で、紫のうはつぱりを着た娘さんの拜觀料を拂つて、まづ寺内に這入りましたが、了仙寺と云ふのは、小さいながらよい寺だと思ひました。此地方は木材が豊富なせゐるか、本堂の棟木も仲々どつしりしてゐて、寺の姿形が、歴史のあるくすぶり方をしてゐました。左手の寶物館へ上つて行きますと、竹の皮草履にはきかへ中へ這入るのですが、這入るとすぐ右手に、かごから降りかけてゐる、明治風の、大きな女の繪が立てかけてありました。それがお吉の若い時の姿だと云ふのですけれど、私の心に浮べてゐたお吉とは、少々ばかり違つてゐるやうでありました。肉づきが薄くて、女形の頃の衣笠貞之助張りのきやしやなお吉が、私には何となく哀感をさへそゝります。ハリスの締めてゐた、馬糞色の丈夫な皮帯も見ましたが、仲々背が高くて、太つてゐた人なのでせう、大變しつかりした皮帯でした。ハリス愛用の硝子のコップも見ましたが、これとても大變質のよいも

ので、いまの世では、此様にどつしりしたデザインと、質のいゝコップは見當らないだらうと思ひました。陳列の中のコップは、さつきまで水を張つてゐたやうに肌が曇つてゐて、紫色なのが涼しく見えます。背の低いコップは、私も子供の頃、飴湯を飲みに行つてよく見かけたあのデザインで、一寸立ち去りがたい氣持でありました。此了仙寺は下田條約の結ばれたところで、林大學頭とか、井戸對馬守が、こゝでペルリと會見したと云ふ由緒のあるところださうです。日本の商人が、米國へ渡るに着て行つたと云ふ白い手術着のやうな洋服や、ハリスが持つて來たらしいギヤマンの皿とかが、かなり豊富に飾つてありました。また面白いことに、下田街道の要所要所に立てたのでありませう。キリシタン宗についてのきついはずつとの高札は、風雨にさらされてゐて、薄くなつた字のまゝのが並べてありました。憂國の青年であつた吉田松陰や、澁木松太郎も、此了仙寺には杖をひいたことだらうと思ひます。——私達の眼にさへもハイカラだと思へる品のいゝハリスの好みも、大變いゝ氣持で眺められました。また、こゝには、廊下と云はず、陳列の中と云はず二階も階下も、佛像が澤山置いてありました。下田の歴史は、随分そやなものだらうと思つてゐた私に、此、澤山の佛像は、私にとつて少々愕きでもありました。鈴木と云ふ人の所藏になるものださうであります。名高くないだけに、私は飽きることもなく見ることが出来ました。

閻魔様の大きいのや、小指程の千體地藏尊なんかがいまでも心に残つてをります。いつたい下田の近邊は、大變地藏様の多い土地で、自動車の道々隨分寺の入口に可愛らしい石の地藏様を見かけまし

た。

了仙寺を出ますと、かなり疲れてしまひました。さて、どこへ泊つたものかと、賑やかな町へ出ましたが、いつそ泊るなら湯ヶ島あたりに歸つてしまつた方がよいと、乗合自動車の發着所へ行きました。幸ひ修善寺行の出るところで、車内は満員でしたが、やつと乗ることが出来ました。町の上から勝太郎や市丸の聲が、ライオンのやうに聞えて來ます。下田は小唄で埋まつてゐるやうなお祭氣分です。

「あんた、きおうでやア、もにやアのよ。とこのまもにやアのねえ……」

面白い國訛りだと振り返ると、來る時修善寺から一緒だつた若夫婦でした。その美しい細君は、きつと鏡臺も床の間もない宿屋へ辿りついて、良人に不平を云つてゐたのでせう。細君は何時までもこぼしてゐましたが、此人達は名古屋邊の人でもあるのだらうと思ひました。

夕明りで、縁に染まつてゐる橋の手前の川つぶちにさしかゝりますと、隣席の老人が、「お吉は浮世が厭になつてしまつてこゝへ入水しただねえ」と大きい聲で一緒に乗つてゐる宿の番頭と話しあつてをりました。その老人の意見では、ハリスに歸られてからのお吉は、何かにつけて、町の者達から白眼視されてゐて、今ほど世が進んでゐないだけに、勝氣なお吉には淋しい事であつたに違ひないと云ふのであります。

「私だつて死にたくなるわさ」

稚茸の籠をさげた下田歸りのお神さんが、「こゝが入水した所かねえ」と、深く澄んでゐる水の面を、振り返るやうにして眺めてゐました。いまでも淋しいところですが、その頃は餘計淋しくつて、こゝまで辿りつくにもお吉は何となく味氣なかつた事と思ひます。老人はまた「お吉も、さうべつびんではなかつたらうと思ふよ。肉づきでもようて、大きな女子であつたんだろ」と言ふのであります。私は先日、何かの新聞に出てゐたお吉の寫眞を憶ひ出して、お吉の最後の人生觀に、何とも云へぬ哀愁を覺えるのであります。その寫眞のお吉は、少し股を擴げて、胸も腰もゆるい着つけで、寫眞館の床の上に素足のまゝで腰を掛けてゐるのですが、私にはそれが大變好もしい姿でした。

下田の町は、まだこれから五月の二三日頃までお祭ださうですけど、漁夫の利を占めるのは、船會社とか自動車會社なのでせう。町がへとへとになつて、祭が濟んでも呆んやりしてゐるのではないかと思ふ程、下田は賑やかでした。——湯ヶ野を越えて天城へかゝる頃は、自動車の中は皆々眠りかけてしまつてゐて、私なども、夢現に峽の流れの音を聽いてをりました。星も月もないので、只山々が、土塀のやうに黒く見える中を、自動車の燈火一つで走つて行くのです。夜の天城越えは初めてであるだけに、私には一寸愉しみな事でありました。

湯ヶ島の宿場で降りると、峽を降りて、落合樓へ泊りました。此宿は、馬鹿馬鹿しい程のんびりした廣い部屋をくれるので好きです。窓を開けると河鹿の涼しく啼く音が聽けて、窓にせまつた樹の枝

が、さわさわ風にゆすぶられてゐます。部屋の眞下は流れなので、水の音が頭の中へまで流れこみさうに新鮮です。

山かけで遅い夕飯を食べ、横になつてみると、もう何もかも有難くつて仕方のない程、私は呆んやりしてしまひます。河鹿の啼く音を、こんなにぜいたくに聴けることもまれなことでありますのに、此山峽の宿では、窓を開けておくと、水や土や草や木の匂ひまで風が運んでくれます。私は随分旅をしました。まだ此様に柔かく美しい山峽を他に知りません。こゝへ泊るたび憶ひ出すのは、川端康成氏の春景色と云ふ短篇です。——晝間の湯ヶ島の町は、竹藪の上に架かる虹のやうによい村落で、何となく、その文章の點綴が頭へはいつて來るのであります。こゝではお慶さんと云ふ美しい女中がゐました。「苦勞してゐるものですから老けてしまつて……」さう云つてニツと笑ふと、何とも云へないよい眼元になります。

あくる日は、まるで體中に釘を打ち込まれたやうに、へとへとに疲れが出て起きられませんでした。寝ながら障子をあげると、楓かと思つたのは山櫻で、二階の私の部屋から、仇な櫻の花を眺めることになりました。草萌えの盛りで、狩野川をはさんだ上流の山々は、まるで火がついたやうに見事です。

晝から、舊宿の街道を少し歩いて見ました。白い椿の花の下で洗濯してゐる若い神さんに、下田の町を見に行つた話をする、「はア私も一遍行つて來なければ……」とうらやましさうにしてゐまし

た。——昔は、下田の祭も、修善寺の祭も、此下田街道が仲々賑はつたものであつたが、今では乗合が出来たので日歸り客ばかりで素通りされてしまふとこぼしてゐました。

昔、ハリスも江戸へ出る時は、かならず、此湯ヶ島で一泊したものだと云ふことです。ハリスはお寺が好きと見えて、湯ヶ島の、弘道寺と云ふ寺によく泊つたと云ふことであります。神社や寺と云ふものは、泊めてくれさへすれば、私もほんとうに好きです。信州の戸隠山では、房のやうな宿屋がありますが、泊つてゐて安心して落ちつけるところでした。

天城からは、立派な榎なども伐られるらしく、舊宿の街道を、山から降りて來るトラックは美事な榎を澤山載せてゐました。宿はづれの百姓家では、神さんが庭で芋を切つて餅のやうに並べてゐました。まだ花の咲かない菖蒲畑があつて、庭の眞中には噴井戸のやうなものがあります。私は水を一杯のまして貰ひました。もう動くのも厭だと云つたやうな老けた牡犬と、子供を入れて、その伊豆らしい藁屋根の寫眞を一二枚撮りましたが、此地方の藁屋根の棟には、どの家にも菖蒲のやうな葉つばが青々と吹き出てゐて、私は珍らしく思ひましたが、この草は屋根のもちがよいのだと、お神さんが教へてくれました。

道々、櫻の若木の植つた一畝が眼の下に見えましたが、櫻も埃をかぶらないで咲いてゐると、大變氣品のあるものだと思ひます。何と云ふ竹なのか、直径四五寸もあるやうな大きな青竹が、空にすくすく伸びてゐて、まるで山の中の杉の木のやうでした。宿へ歸ると、梅と云ふ女中が、嫁に行くのだ